

寒

菊や

雪をこらへし

花の色

華胥亭夢樂

あるす











屑屋の意外の有様も肝を冷して覺えず二三間逃退き何だらう彼婦やアまろ  
で狂人の様だ

娘の母の顔を見て「母ちやん彼人の能く宅に来る屑屋ですよ、は、は、道ちや  
んの子供だから困るよ彼奴のね道ちやんのお祖母ちやんの情夫でね宅を奪  
ふとするの、悉皆彼奴の悪計だから實は彼様も憎奴のさいよ彼奴の毎日、  
昨夜も夜中も今朝も母ちやんを欺さうと思て来たんだけれど旦那も叱られ  
て歸つたんだよ彼様可怖奴のさいから道ちやんも油断しての不可よ今だつ  
て旦那が一所だから彼奴の逃たんだよ道ちやんお前も父様も能くお禮を  
お云よと云へば娘のお道の四邊を見廻し「母ちやん父ちやんの何處もお出さ  
の父ちやん死んで仕舞たのだよとおろく、聲もされば母のまたもや高く打  
笑ひ「おは、は、其處も居つしやる父ちやんが見えさいかへ此兒の厭事事を  
云ふのねと云つゝ、歩行て九段下の通りへ出でけり  
母娘の但ある菓子屋の前は佇立み菓子を呉よと云へば其處の小僧また今朝

も遣て来たかと思ひながら日毎の大顧客されば飛で出で何をあげますと云  
ふ婦人の娘の金着より一圓札一枚取出し種々まぜておくれ其處もあるのを  
悉皆おくれ何程差上ます「一圓買つて行んだよ、えあの一圓丈で滞在すか

第一回

昨日よりの雪空降らぬ中の烈寒の身も徹て人の多くの炬燵も潜込み此雪が  
降つて呉ねば外出の出来ぬさよ、弱い言を云ふ中板屋はばら／＼と音して  
霰降来れば怖い物見たさど同じ心か今迄の火鉢もかぢり附し内儀炬燵も潜  
りし老爺も孫子さすを呼立てソレ殿がと椽も立ち門も立ちて寒い物を見物  
するも可笑

子供風のソレ殿がと云ふより往來へ走り出で雪やこん／＼霰やこん／＼  
と彼方よも此方よも袖を展げ膝を展げあせして霰も打れて遊ぶ中一人の  
女兒が「あれ道ちやんが来たよ道ちやん／＼と聲を掛け他の子供も實は道  
ちやんが来たよ叔母さんも来たよあせ、彼方を見遣れば母と共は菓子を



し歸掛けお道の朋輩の子の遊び居るを見るより霞を防て居る母の袖の下より共遊べんと走り出る  
 母の之を見るより道ちやんやアお前一人で驅て行ちやア不可よソレ其處も怖い人が立てるぢやアいか連れていかれるよお待よ一人で驅出ちや不可よアレ彼人の道ちやんを連れて行く旦那早く早く旦那奪返して下さいアレと眼色變りお道の跡を追ふて驅出し漸うお道を捕へてさめくと泣きながら「道ちやんお前の仕方がいかいよ母ちやんが何程心配したつてお前の後人が怖くさいのかえお前を彼人又還る位お母ちやんの死んだよ涉覽よ彼處よ彼奴がお前をよお前が居おくつたら母ちやんの死んだよ涉覽よ彼處よ彼奴がお前を奪ふともつて彼様顔をして此方を見てるぢやアいかと眼を怒らし唇頭へ或家の前又立る其家の主人を睨む  
 道母ちやん彼人の菊ちやんの父ちやんですよ怖い人じやさいの 母道ちやんの眼の菊ちやんの父ちやんは化てるのだよお前を奪ふと思つてるか

ら母ちやんは緊着纏附てお出でと云へばお菊と云ふ兒の頬を膨らしアラ彼様事を云て私の父ちやんを化てるおんて道ちやん處の叔母ちやんの酷い事を云てと不平な顔をして其父の方を見ればお菊の父の打笑ひて家の中へ入りぬ  
 母旦那が退つて下さつたから漸と逃て云たとお菊と云ふ兒を始め二三人の子供が其身の周圍又立るをソツと見ては、は、菊ちやんも米ちやんも道ちやんと遊んで下さつたのね叔母ちやんが涉褒美をあげましよねとお道の兩袖又入れさせ其身の手も袖も餘る菓子袋の口を開き三人の子も袖を開させ惜氣もあく撥出して幾撥ともあく與ふれば三人の兒の甚嬉しき様して互に顔を見合せお道の顔を見ての喜び年嵩あるお菊の叔母ちやんもう澤山おのと云ひおがらも尙袖を撥げし儘與ふる儘又貰ひ居る  
 菊道ちやん衆兒でまた道ちやんのお家で遊びませうかと云へば衆兒「あ、道ちやんお家へ行らねえと答ふるよお道の嬉しうよ母の顔を見て母ち



やん衆兒でお家で遊んで能のど云ふも母も甚く打喜び「サア衆兒お出で叔母  
ちやんも一處も遊びませうとお道の手を曳て前も立ば衆兒のツロく」と跡  
よつさ行く

霞の早く止みたれども家々の窓門口より日頃見馴れあがらも人の奇を好む心  
の哀れある物をさへ見るを好めばお道親子を迎へつゝ送りつゝ見るよお道  
の母の日頃親しくせし人の目視するよの隣敵も出會し如く眼を怒らし解ら  
ぬ事を云て罵しるかと思へば見も知らぬ往來の人よ此方より笑ひ掛け其人  
よの覺もあき名を呼掛け丁寧よ會釋するあ近所の者の平生の事と知りあ  
がらも顔を見合すばかりなり

嚴然立る冠木門の澁も抜しか墨の色も脱て貫抜あを朽たれども門より玄關  
迄の石を敷て其の間五間ばかり餘り卑しからぬ官員の住家とも思はれる家  
ありお道の母の衆兒と共に此家まで來りしが小門をツツと押して中に入り石  
を歩む下駄の音の高く門外も響きしが觸てまた物音も聞ゆすありぬ

此家が其家かど家々の表札を見つゝ來りし年の頃四十ばかりよて田舎者  
の木訥らしき男此家の表札を見るより喜悅の色に面も見はれあゝ漸うの事  
で知れた門も閉て座するの留守でゝある事かと獨言つゝ小門を推し  
よ貫抜を指しと見ゆて容易開ねば門の表札もあるのよお宅さされた  
のでもあるまいと門を脈めし儘佇立居る

第三回

道母ちやん道ちやんも遊びも行たいよう菊ちやんも米ちやんも歸るつて  
道ちやんも往來も行て能ひの母ちやんようア菊ちやん待てよう米ちやん  
も待てよう遊戯も飽て歸らんとするお菊お米も待てくゝと呼掛けつゝ  
共よ玄關も走り出るお道母の阿那とばかり玄關も追掛出でお道の手を確と  
取て引寄せ我子の顔を見詰る眼もはらゝく涙

道母ちやん道ちやん行んだようア衆兒歸つて仕舞よう母ちやん往來へ  
行うゝと泣聲あげてせがめども母の少しも許さず道ちやんお前の母ちや



んを捨るのかい情さいよお前往來へ行と怖い人よ召捕まつてお祖母ちやん  
處へ連れてかれるよお前お祖母ちやん處へ行たいかはお前母ちやんを捨て仕  
舞のかいとさめくくと泣く

お道の此日頃朝暮母の傍を放されず遊戯を好み賑しきを望む子供を薄暗さ  
陰氣ある廣き家の外一寸たりとも遊戯よとて出せし事おくれは他家の子の  
遊戯よ來りて歸らんとする時何時も此様よせがむを母の何時も許さず今  
も亦涙よありて止むるをお道の子供心の頑是かゝ母ちやん行んだようく  
と聲をあげて泣く道ちやんお前迄母ちやんを見捨るのかいとグツと慄さし  
めて此も亦聲を立て泣沈む

お菊お米の母兒の此様よ自分達が泣せでもせし様よ顔見合せ云合さねと共  
よ玄關前の敷石を踏て逃げ歸るをお道の母の見送りしが泣居る我子を懷め  
びづいと奥へ入りぬ  
門外よの尋ね來し男小門を叩きも聞ざるよ當惑し便もがあと佇立中門内深

く小供の泣聲聞え纏て二三人の足音の走り出る如く近づくと不思議と見や  
る門の小門を貫抜の音させて立出るの未だ十歳も足ぬ女兒二三人あり男  
の年嵩あるを呼止め此家の鈴木様かと聞か答えのせず唯點頭また足早よ急  
ぎ行く

男の小門を入り中々立派なお結構だ私が御奉公した時のお宅よりのまだ  
一層大ききお住宅且那樣お死去されたとの噂よ奥様壇様の何様してお出  
おさるゝかど今日お尋ねすのだが旦那様の御出がおいと思ふ所爲か何や  
ら陰氣らしく煌々として居おい何よしろお尋ねやして見様と玄關よおづ  
く小腰を屈めて「お頼みやますお頼みやますと二聲三聲小聲よ案内しよ絶  
て答ふる者おくれは今度の聲を張て二聲ばかり續け様よ呼ども尙人の住む  
べき氣勢もかし

そよどの風の音さへ聞えざりしよ薄暗さ玄關よ忽然現出し女の姿塵の臭氣  
よや人氣さき奥の心細さよ頬瘦け髪乱れ唇蒼白め深く陥落し眼の鋭く光り



いたと睨みし立姿の材高く瘦せたれば現世の人どの見え難し男の思掛ねば  
 甚く打驚きて仰反し足踏止め會釋するをも忘れ呆れて女を見詰たり  
 女お前の何だね何處から入つて來たのだ何處から入つて來たのだまた母  
 親さん又頼まれて來たね母親さん又さう云つてお呉れ私が生てる中やア私  
 や死んだつて此の家の渡ささいよお前お歸りお前歸らさいか歸らさいかい  
 サア歸らさいか早く歸らさいかどヨリと迫り來るよ男の唯驚くのみよ  
 て少時の返すべき言葉もあし  
 姿こそ斯く淺間しくのありたれ十年の昔どの歳こそ老たれ仕へし家の妻君  
 又相違おけれバ男の餘りの事又涙ぐましくお目通を致しませんからお見  
 忘れ遊ばしたのの浮道理で居ます私し久助で居ますと云ふ顔女のツ  
 ッく見詰たりしが何と思ひしよやホ、と微笑「お前さんは本統又久助さ  
 んでしたね牛久又參つて居ました時又の種々お世話を戴きまして彼時の浮  
 心切の決して忘れませんよサアお上りあさい本統又能く尋ねて來て下さい

ましたね久し振でお目又掛つて此様嬉しい事ありませんよと打て變りし  
 女の様又久助の此ども其身又覺えおけれバ「ハイ」と受るのみよて此よ  
 も答ふべき言葉あし  
 稍ありて「ハイ私其久助さんとも違ぬます私し本統の久助で居ます且  
 那樣のお死去遊ばした事をつい此頃伺ひましたから奥様やお嬢様の如何遊  
 ばして入つしやいますかお尋ね下さいと思つて居りましたがお轉宅遊ば  
 したので一向お宅が知れませんが且那樣のお兄様の山村様へお尋ね下さい  
 たらと云掛るを女の問答ゆ「ア、解つたお前のお兄さん又頼まれて來たんだ  
 よさうよ違ぬさいよさうだ」お兄さんばかりの頼母しいお方だと思つて  
 居たらお兄さん迄も此家をえ、お歸りお歸り早くお歸り 久「お兄様が何か  
 遊ばしましたので……」女おとぼけでさいお前歸らさいかい歸らさいやア  
 旦那願つて追出して越くよと久助が背後の方人でも居る様よ旦那此奴  
 を喰殺して下さいよ早く喰殺して下さいよと云はれて久助の吃驚して背後



第四回

を見返る間もさくアツと尻餅つく

日の暮れて夜の八時よりありぬべし久助の何やらん風呂敷を包みし小さき物を片手より提げ月光を便りよとぼくとお道が家の門迄来りしが足を止め頻り又打仰ぎおゝ此お家だ此お家又違ぬさい一逼来たばかりで夜の勝手が違ぬ無益な路をまごつたいたせでさへも閉てある御門だから夜の別して開ての居まいと獨言きつゝ小門をソツと推して見れば思ひしより違ぬてギトと音して開し久助の便よしと喜びながら容易に入り得ず顔のみを前み出して門内の様子を窺ふと頭をキツと締められ御元と水を注がれし如き心地してまた此方へ二歩三歩

阪上様も何つて見ると實にお可哀さうな旦那様のお死去をされてから女の御身でお子様計りであくあの憎いお袋様迄私が御奉公した頃も折々の見えられた氣も喰ぬ彼お袋殿迄女の手一つでの御理もさい嘸も難をさ

された事であらう今での坂上様の御意見もお聞入さくお嬢様と唯お二人彼様してお出さるゝとの事其も未だくお可哀想さいお嬢様此頃の御菓子ばかりで飯をおおびさされぬとの事故見る影もさく瘦てお出さると阪上様の涙がらのお話さく鈴木様と云へば元老院も御出勤されて月給の百五十圓も頂戴遊ばしお若手での御評判の能つた旦那様久助をさよ迄お優しく實も難有い旦那様であつたのよ其お跡が此様におありさるとの音を思ふと實も夢だ實に夢だ彼奥様のお秋様も今日お眼に掛つた時よの實も奥様との思はさかつた柳橋で瓢屋の小玉と云へば人よも知られて名高い遊者實に水の濁る様も御容色で久助をさよへあゝお美しくいと見惚る程であつたのよ今日お眼も掛つた時よのまるで幽……勿体さいが宛然幽霊人の浮沈と云ふ者のあり情さい實もお情さ……えゝッ叱つ叱つ犬め人を吃驚させやがつて叱つ叱つ

斯して居る中もお嬢様が嘸も飢い事であらうお口よの合まいが實の志は



かり何かお受あされて下されば能いがと門を中へ入りたれどお秋の晝の言葉で其良人の鈴木が毎姿を見はす如く思はれたれば玄關又近づく程怖ろしさの身も微み落葉を踏む我聲音も冷りとし地も印りし木の影をも一々能く見定めて一歩一歩漸と玄關又廻り着たれど夜又一入物凄く陰々として鬼氣の人を襲ふ如く燈光も此處への達かざれば久助の案内をもおかね後にも前にも我を喰ふ鬼住如く覺えて少時の身動きもあさうしがお嬢様が嘸お飢じからうと思ふ心も氣を取直し幾度か聲をも掛んとし玄關へ上らんとあしけれども思ひ切て其も出来ず鬼つ追つ思案の未終も家を廻りて裏口へ出けるも此處も亦人すむべしと思はれぬ程荒果たり

車井の藪ひの屋根の朽て僅か又半を止め井石側への草も生たり久助が幾度も躓きしの手桶壺あとの箱蓋けて狼藉しあり夜目への確と見分付ねど籠子あとの破朽たるもありけりそと勝手口へ忍び寄り家内の様子を探ひ見るも臺所より納戸迄の障子唐紙の残らず除せしよや一眼見渡されてお秋お道

の姿もわりくと見られたり

久助の二人の姿を見るより力づき直様聲を掛けんと思ひあがら喉閉りし如く覺えておとおくと迄の出しが其さへ人よは聞えぬ程の聲我あがら口惜しと氣を張りて呼掛んとせし時お秋が此方を眩度見し眼の凄じさも覺えず一問ばかり逃退きホッと息を續てア、と頭を振り再び立寄る氣力あり

お秋お道の母兄の室の中央に悄然と坐りしが火鉢もあいと見えて一枚の四布圍を敷き懐合ひしかと思ふ迄膝を組合せお道がッ、と泣くをお秋の片手をお道の肩に掛け片手の菓子袋の中よさし入れ道ちゃんお前の聞分がさいよお前其様は毒を食て死たいかい此お菓子を幾許でもお前の食たい程お食べサア之をお食べとお道又與へお道の顔を背向て手よだも取らず母ちゃんもうお菓子やお飯が食たいよ母ちゃんお飯を食させて下さいよお腹が空て飢い毒だつて能からよう母ちゃんお飯を食させて下さいよお家外も此聲もるれば久助の覺えず手も持し風呂敷包を握り詰めお飯の此處



第五回

よ滞在す早く上たいと立寄る眼よの止度なき涙はらくく

道「母ちゃんお飯食たいよう毒だつて能からお飯たべたいよう母ちゃん早くお飯戴頂よう道ちゃん飢しいよう世お前の聞分がよいよお前死んでも能かい 道死んだつて能かよいお飯たべたつて死よやしさい菊ちやんだつて米ちやんだつて衆見お飯たべるけれと死よやしさい道ちやんもお飯たべたつて死よやしさい飢じいからお飯頂戴ようんお菓子いやお飯頂戴ようど母よ取付き母の顔を仰ぎつゝおろく聲よかりてお飯たべたしと請お秋の恨めしさうとお道の顔を見詰め本統よ聞分のよい子だ米屋だつて肴屋だつて酒屋だつて衆人お祖母ちやんと同謀よあつて道ちやんお家乗ふと思つてるからお飯やお菜よ毒を入れて母ちやんと道ちやんを殺さうとしてるんだよ此お家を奪れると母ちやんが父様よ濟さいんだよお前が死んじまつても父ちやんよ濟さいんだよ好兒だからお飯食べるのにお止しね好兒だね道

ちやん好兒だね 道だつて飢じいよう母ちやん飢じいようど尙もせがむ折しもお秋の何を聞付しか凄き眼よ乾度裏口を見返りぬ

久助「お道が飢しいぐと云ふ聲を聞くよりあゝ情さいお可哀想だ早く之をお進やしたいと裏口よ立寄り指眼くよお秋が此方を乾度睨みし様の如何よも怖ろしけれバ直よの聲を掛けかねて脚圓たり

秋「誰だ其處よ居るのの 久「へい 秋「誰だよ此處よ居るのの 久「へい久...

久助で御在ます 秋「久助... 久「久助で御在ますとギョ付く戸を力まかせよ引開れバお秋のお道を引寄せて袖の下よ蔽ひ満面よ怒りを含みし眼逆釣り寄らバ喰付もし兼まじき氣勢あり

久助も進みかね臺所の板の間よ坐りて頭すり付け誰今も承りましたが實よお可哀さうでお嬢様が可哀想で久助泣て居りましたお嬢様嘸お飢しい事で御在ませう何かと存じましたがさし當つてお飯と云ふ譯よも参りませんが久助がお脂を持って参りましたお菓子よりも少しのお腹よ堪えが出ませ



うからサアお嬢様はんの久助が志で御在ますサア召上つて下さいましと風呂敷包とくく這寄り竹の皮の束を解バ玉子海老おどの握鮎お道が眼よの百珍の献立とも見ゆめり

お道の飢じさど嬉しさよ小供心の遠慮なく鮎を摘らんとすればお秋の慌て道ちやん何をおしだ其お鮎の毒毒を喰るとお前死ぬよ 久「毒！久助が持て参つた此鮎を毒！毒！の奥様お情かい阪上様で伺ひましたら奥様も嬢様も飯と云ふ物召上らず此頃のお菓子ばかりで凌いで入しやると承まはりあゝお情かい事だお嬢様の様子様何して汚辛棒が出来やう昔の汚恩を報ずるは此時と迎もお口よの合ますまいがさし當りお鮎でもと持て参りまし

た此久助此頃の奥様の様子も阪上様で窺ひました世間の人皆奥様も仇を承て居りますし奥様も私の性質の能く汚存じで汚在ませんか其久助が持て参つた物を毒か何ぞの様も仰有るのの奥様餘りお情かいお可哀想よ

お嬢様の汚様子を伺ひますと私の實もお情かい事だと思ひます其様も欲がつて入つしやいますものを奥様何卒お進みさつて下さいましお嬢様毒で汚在ませんサア召上つて下さいましと眞實面も見れて涙ながら進めたり

お道の飢じさど食たさが精一杯喉の下よ吐わりて吸寄する様も思はるれど母の心を計りかね流石よ手よの摘み得ず母ちやん彼お鮎食て能の母ちやん食て能の道ちやん飢じくつて堪らさいよと云へども母のお道を引寄置て許さず久助を見て冷笑ひ「何程も欺さうと思つたつて其手も陥ものか其様毒おぞを持て来て私とお道を殺さうと思つたつて旦那が始終護つて居て下さるから何様事を謀んだつて此家を奪られて堪るものか其毒を持つて早く歸れ

久「矢張毒と仰有るので汚在ますか 秋「毒だとも早く毒を持って歸れ 道「母ちやんお鮎たべたいよう 久「お可哀想よ早く召上れ奥様何卒お進みさつて

秋「え、早く持て歸らさいか 道「母ちやん其お鮎頂戴よう 久「彼様も仰有つて入つしやるのが奥様貴女よの解りませんかお情かい 秋「持て歸らさい



か持て歸らぬいかど云つ、竹の皮包も手を掛るお道の母の手も添て母ちやん頂戴ようと云ふ聲返し秋の竹の皮包を籠の方へ擲つくれ、柱の中つて飯粒亂散さし明日の雪を予急ぎける

道母ちやんいやアと泣出せば久助のお秋の手も取絶るを秋の其手を振、扱ひえ、歸れ歸れ歸らぬいか

第六回

お秋が柳橋と瓢屋の小玉と呼れ左袂をとりし、今より十四五年昔十三の歳から十七迄若手での評判者ありき

面が美で藝が出来れば藝者の先づ流行は極つたものされど座配はまた格別よてお福質のナヨッヒリ鼻の何時も茶も挽筈あるが却つて天人質を配へて百美人の中も如此女がと思はれるのも多し美人の額が狭く三平二満の出額の出で居るだけ、空地が廣い廣きの運好く狭き運なし鼻のムリと丸きの金も窮らず尖りし、思ひ多しと人相早見も出て居る譯あらぬと出願よ

て眼のクルリとせし女の世波を巧く潜りて好い月日の下も暮すかかし

小玉の藝も誇り面も美れど座敷の淋しき方よて客の機嫌を取る事上手あらぬ、呼で呉る客も多けれども定つて人よ評はる、程の旦那さき替りも藝人狂ひの悪評も聞えず憎まれる方でもあければ極愛されると云ふ事もあし、れども小玉が一人見えぬ、花の中も権一枝欠たる心地と何れの坐席も聘れて遊客の心も全く忘れられし事、あかりき

小玉の早く父も死別たれど母の尙在りて共暮しぬ

其日を生活かねて詮方なく最愛の我子を歌妓もあす者世の例多けれども小玉が母の初めより娘よて食積り幼時より遊藝を仕込てまだ相應も貯蓄ある中も小玉を知れる藝者屋より半玉よして柳橋も賣出せし、自慢娘の他人の眼も美しく見ゆるか料理屋も待合も可愛がられ一本もありてから別して評判されるれど母の不足マラマラ毎日、小玉も愚痴の百萬遍を繰返したりき



母のお龜の小玉にむかひ「お前の様はお愚圖さんよ何程云たつて仕様が  
 いがね此廣い柳橋もお前の様お腕のさい女にさいよモウお前座敷も出る様  
 又あつてから足掛五年もさらうぢやアさいかね尾花屋の小吉を御覽今年  
 漸十四だよ其もお前お前も今朝の新聞を御覽だらう私やア實又感心したよ  
 彼歳で旦那が三人あつてさいひかい其旦那がさ龜清さんで三人落ちて各自  
 又自分の持物の積だから機會の悪い事許り云んだらう夫を彼歳で私やア實  
 又感心したよ彼歳で彼妓が巧く弄めて尻尾を出さいで切抜たあア實又感心  
 ぢやアさいかね能考へて御覽お前のモウ十六だよ其又困るぢやアさいかね  
 足掛五年の中よ旦那が一人も出來さいどの實又呆れッちまふよ昨日も誰や  
 の内儀さんが小玉さんも今の様ぢやア不可之今の藝者で彼様又堅くつちや  
 ア仕様がさいよ厭事もあるよやア違ひさいが時よやア顔も立て呉ねえぢ  
 やア小玉さんばかりぢやアさい宅でもお客を失敗して仕舞から少しやア厭さ  
 思ひして貰ねえぢやアとつくづく私よ云さつたよお前の様よして居ち

やア早晚お得意を失つて何家からも聘て呉やアしさいよお秋お前何と思  
 ふよ其様濟ねえ顔ばかりしねえで些たアお袋の云ふ事も聞もんだよと烟管  
 をボンと打きて小玉の横顔を眺む  
 小玉の火鉢の側よ横よ座り茶棚の錦出の茶碗を俵形よ積上げたり崩したり  
 して居たりしが母の顔をソツと見返し「お母さんの話やア能く解つてるよ出  
 來る時よやア出來るわね後生だから其様事を云はさいでお吳よ 母よ云はさ  
 いでお吳れへん此上云はさかつたら何時の菩提か知れやアしねえ 小何時  
 の菩提だつて好ぢやアさいかねお尻を賣の私しやア厭だよ斯様商賣を何  
 時迄して居やしましし 母斯様商賣はしねえ旦那もさい癖よお前誰よ頼ん  
 で廢業する積りだい 小誰よだつて能ぢやアさいかね私が稼いで廢業すり  
 やア其で能ぢやアさいかね 母生意氣な事を云でさい自分一人其様又成  
 人たと思つてるのか 小そりや何さ母さんが養育て呉たのさ 母其を知て  
 るから些どの云事を聞くが能い 小だつて母さんが無理だよ 母何が無理



だ「何がつて旦那が磯か何かぢやあるまいし何處もだつて落つてる物ぢやアあいよ 母口のへらねえも一遍云て見ろと母子争論の折から誰やよりお座敷どの口掛りたれば小玉の仕度して出で行くと母の切り火又祝ひて送り出しぬ

第七回

柳橋の待合誰やの奥の室別々客と藝者の指向ひ馴染と見えて互又奥底もあらく打語ふの彼の瓢やの小玉と元老院の書記官鈴木才之助と呼ぶ、若手の切者あり

鈴木の或宴會の折小玉の容色美しくしきを見初めし後所々より聘て馴るよつれ小玉が浮たる心あきを愛し此頃の日毎又此誰やより我物の様又引付置き折ふの泊りて歸る事さへあり

始の何とも思ひざりしが會數の重されば小玉も鈴木の殿御振憎からず第一よの實意の底を見抜たれば行末の頼よすべき人鈴木様の外よのど何時か下

紐も嬉しく解そめての今迄の戀の諸分を見聞かから自分の戀知らず他妓の戀を淺間しく可笑き事又笑ひし身も其味を覺えての陥りも深く鈴木が一日顔を見せねば氣も浮す他席は呼れても座配分て淋しければ意地の悪い奴と情知りとも口惜き事も云われ羞かしき事も云われて今の柳橋は鈴木と小玉の契情を知らざるものもあらずありぬ

サア旦那が出来た此からの甘い寐酒も飲ると喜ぶ小玉が母のお龜相手の元老院の書記官されば敵又取て不足あしと此頃の正反對て機嫌の能い程小玉の行末の覺束あさを氣遣へばお龜の折折又五十と細つた札の數又ニツコリ笑ふ日もあれを怒り限りおしモ少し物もあさりさうさへ云る、時小玉の苦しき今の中が少時の辛秘私に玉の奥母さん、後隠居様と樂よさせて仰有る目を出させて見せますと相槌を打バ打喜ぶ母の顔見るよ淺間しと心よ泣く折もありさ

鈴木は早はる醉の上機嫌「あ、酔たぞモウ其様事聞んでも能い乃公の胸中



又ある事だ少し浮々してトウだ一杯位お合をしたつてハ、ハ、ハ、サア乃公  
 が飾う 玉アア其様一杯私の飲あいのを知てらつしやる癖又 鈴助させ  
 て貰はふと思ふ野心があるのさ 玉ホ、ホ、氣樂な事ばつかし私のサウあ  
 れバ日頃の願が叶うんですから實又嬉しう滞在すすけれ共母が彼様ですか  
 ら其が心配もあつて本統又如何したら能いだらうね 鈴能いでいあいか乃  
 公の胸もあるから心配いせんが能いぞモウ十日と此地又の置ぬから明日  
 から坐敷又の出んが能い母さんの乃公が思案て居るから決して心配をする  
 小玉ハチツと鈴木の前を見居たりしが飲乾せし杯を鈴木又さしあがら本  
 統又濟ませんねえ  
 其夜鈴木ハ平生より早く歸らんと云ふ小玉ハ朝まで止めたけれど日毎  
 勤めある人をサウもあらずとまた明日の夜を契りて待せある人車又乗迄も  
 傍を離す鈴木の前を口をつけて……よござんすか 鈴馬鹿な事を 玉ホ  
 、ホ、誰やの女中も背後よりねえ旦那小玉さんも餘程ホ、ホホ、玉アア

姉さんさうぢやアと云ふ聲を背後又鈴木の前ハ馳去りぬ  
 母「オヤ小玉歸つたね今夜ハ大層早かつたね鈴木さんぢやアあかつたかえ  
 小玉ハ火鉢の側ハ鳥渡坐り「鈴木さんだつたけれど今夜ハ急ぐからつて今お  
 歸さつたの 母さうかい早く若更てたしまし未や姉さん歸つてお出だよ  
 早く若更を出して遣おと呼立れば下女の未驅來りて姉さんお歸んさいま  
 しと俗衣と不斷帯の纏たるを持來る小玉ハ立掛りながら帯の間より紙包を  
 取出し母の手ハ渡して是れをね鈴木さんが母さんよつて 母「え私よつてか  
 いさうかいと中を見れば新しい銀行紙幣十枚「オヤママさうかい私よつて  
 かい鈴木さんの本統又能くお氣がお附さるねえ本統又感心だね私よつて  
 かいお前から能く今度お目よ掛つたらお前から能くお禮を申してお呉よ實  
 又彼方の感心だねえと我娘又迄世辭を遣ひ縁喜棚又載せ断火をカチ〜と  
 還り乍らお前も本統又感心だよ鈴木さんの本統又感心さ旦那様だねえ  
 小玉ハ着物を着更終り再び火鉢の前よ坐りて鈴木が愈よ近き中又其身を落



P 30.

薪て母も不足なく手當をささんと云し事を語り明日からのモウ坐敷も斷り待て居よと呉々も云置たりと云ふも私も愈よ官員さんの御隠居様もされるのだねとか龜の甚く打喜び次の朝の滅法早く起て近所近邊を吹聴して歩き髪結の家へも自分出掛け追立て呼來り小玉がキマリ悪く云ふを鞠めて丸鬘も結せお前の丸鬘が一番好く似合よソレチと自分背後も立て鏡を見せれば小玉の嬉しさ一杯おれど何人か來るとキマリが悪いね

第 八 回

世も苦しきもの金を貰ひて働かざる、あり一月八百圓の上の極上二圓一圓の下々の婢女も至る迄此故も奥さんの厭々顔を見世間も兎や角の評をも受るあり上りの上もあり下りの下もあり金と替をはめられた上り上官の顔色も喜びもし悲しみもし下僚の後評をも空吹風ははされず上り好れば下り悪く下り買られたければ上の氣も入らぬ事も云はねばあらず一二百金の官員の境界多くの電信の聲を頼みあるぞ果敢あさ

鈴木才之助の一日を簿書の中も暮近き頃我家も歸れば妻のお秋出迎へて今日も亦大分お手間が取れまして滞在すね其様もお急がしいので滞在すか鈴木も窮屈で堪らさうさ顔をして洋服の上衣を脱おがら、大きな面をして居ても頭が空お連中はかりだから何か新しい議案が提出されるとラ調査だソラ取調だ鈴木斯云ふ事のおいか彼ら如何であつたと頭からコキ使はれるからいや實に此頃の様おやア珍免を蒙りたくあるおお秋のツを脱せて小間使が持來りし和服も着替させおがら本統もお大抵で入つしやいませんねおやお足袋がおい勝や旦那様のお足袋を持てお出で、鈴いや足袋の不用ぬ今日の大分温暖かいでおい其障子を開るが能いと机を少し離れし座布団も座ればお秋の煙草盆の煙管を取上げ吸口を袖口にてクツと拭ひ火皿も煙草を盛りて吸付んとせしがほいと打笑ひて其儘良人の方へ打遣り能く掃除をさせて置ましたと云ひつゝ、良人の顔を見れば鈴木もお秋の顔を見返して莞爾打笑み帯の間から煙草入を出して烏渡一服つけ



て呉さいか 秋「アラ厭私しや其様事存じませんよと鳥渡垂頭て微笑む  
 鈴木の庭打眠め居たりしが久助久助の居さいかと聲高く呼ば木蔭又濁たる  
 聲して「ハ」此所又居りますと答へて出来り椽の側近く進みながら小腰を  
 屈め何か御用で御座りますか 鈴久助御苦勞だの能く掃除が行届いて心地  
 が能く 久「恐れ入ります掃く跡から」 枯葉が落まして何も奇麗にお掃除  
 が届きませんで 鈴「いや此頃の詮方がさいのだ時又茶園の能かまだ植木屋  
 又頼まんでも好か 久「へいあの何で御在ます二三葉黒葉が見えます様で  
 鈴「そりや不可あ今日のモウ遅いが明日の藪下の藤吉の所へ持て行て例年の  
 様又頼んで来い 久「へい畏りました今から参りませうか 鈴「いや」 明日  
 で能いモウ休め明日の事としてモウ休め」 久「へいへいモ少し残つて居  
 りますから其を仕舞ませう且那樣奥様御免下さいましと竹箒提行く姿鈴木  
 の見送り「實又正直な男だ 秋久助は本統又感心な男で御在ます奉公人が悉  
 彼様のばかりだと能御在ますね

燈火も既又輝きぬ小間使のお勝膳を持運べばお秋の自ら良人又進め多くの  
 求めされど鈴木は晩酌を好め膳又添て酌をあしつゝ「お歸宅がお遅いので  
 嘸お腹がお空さいましたでせうと満々と杯又篩「いや其れ程でもさい一  
 日役所又居ると實又屈託するがお前又酌をして貰つて斯して一杯傾けるの  
 で先づ苦を忘れるのだ 秋また彼様事を仰有つて 鈴何だ彼様事だ人間の  
 樂みと云の我家より外又のさい以前柳橋あたり又飲又行たの今更考へ  
 るど妙な心持がするさ 秋さうで済ませうねえ私も柳橋又居た時の事を  
 思出すと實又身振が出来ますよ 鈴其や餘り残酷な時一杯如何だ 秋私し  
 のモウ酒の一生飲ませんよ所夫知つてらつしやる癖又 鈴「む、さうであつた  
 お女の先づ飲ぬも好からうそんなら酌だ 秋「はいと篩を何やら思出せし  
 様又考へ居る 鈴何か聞ふと思つて居たが今日の誰も来さかつたかどの尋  
 ね又お秋の何やらん樂しからん色見え誰も見えませんでしたか母が留守  
 又伺ひました 鈴「さうか乃公も久しく會あかつたが今晚の止て置と能



かつた 秋、ハイ、難有う、滞在す、彼様母です、から参ります、都度、私し、實、  
 ……お秋が言葉、を切し、仔細、あらんと、鈴木、の態、と、機嫌、よく、何か、用、があつた  
 ので、の、お、いか、遠慮、さく、云、が、能、ぞ、秋、ハイ、鈴、決、して、遠慮、の、無、用、ぞ、秋、さう  
 仰、有、つて、下、さい、ます、程、私、し、の、……、や、上、る、の、が、幸、ふ、滞、在、す、と、垂、頭、し、ま、溜、  
 息、つ、く、

第九回

元柳町の新道、女、一切、の小間物店、あり、家名、の、瓢、や、と、て、家内、の、後家、と、小女、と  
 の、二人、暮、店、番、も、此、二人、交代、も、客、も、愛、想、も、能、く、殊、も、他、所、より、俄、も、移、住、し、もの  
 と、い、遠、ゆ、土、地、も、馴、染、あ、れ、バ、新、店、も、し、て、の、相、應、の、繁、昌、あり、  
 湯、の、歸、途、か、不、斷、着、又、黒、縮、緬、の、一、つ、紋、の、羽、織、を、引、掛、け、下、地、子、も、七、ツ、道、具、を、持、  
 せ、し、廿、二、三、の、藝、者、態、ど、ら、し、き、内、輪、の、歩、行、つ、き、小、間、物、店、の、前、を、行、過、し、が、思、出、  
 せ、し、様、も、立、歸、り、暖、簾、を、捲、り、小、女、の、顔、を、見、て、莞、爾、今日、の、お、母、さん、と、留、守、さ、の  
 小、女、か、や、か、出、さ、さい、ま、しい、え、奥、も、お、出、です、よ、藝、さ、う、小、女、さ、う、申、し、

ます、から、鳥、渡、と、云、て、奥、も、入、る、  
 「お、や、小、兼、さん、か、へ、モ、ウ、お、湯、も、お、出、さ、の、小、ハ、ア、夕、刻、か、ら、龜、清、さん、も、お、約、束、  
 が、あ、る、か、ら、平、生、よ、り、少、し、早、か、つ、た、の、何、時、も、御、全、盛、し、く、て、結、構、だ、ね、小、多、謝、  
 其、様、で、も、お、い、わ、わ、の、先、日、の、珊瑚、の、モ、ウ、出、來、て、來、て、お、氣、の、毒、様、ま、だ、持、て、來、さ、  
 い、の、だ、よ、先、刻、も、小、女、を、催、促、も、遣、た、ん、だ、け、れ、と、ま、だ、二、三、日、掛、る、つ、て、本、統、も、困、  
 つ、ち、ま、ふ、の、小、さ、う、永、い、事、ね、サ、ウ、云、て、遣、て、置、い、て、お、呉、さ、さい、よ、本、統、も、お、氣、  
 の、毒、様、だ、ね、え、小、お、母、さん、玉、ち、や、ん、か、ら、音、信、が、有、て、あ、減、多、も、自、分、で、來、る、  
 事、の、お、い、が、ね、音、信、の、あ、る、よ、小、さ、う、お、序、も、宜、く、ね、難、有、う、小、今、の、の、忘、れ、さ、  
 い、様、も、ま、た、小、女、を、遣、て、置、て、下、さい、よ、今、直、も、ま、た、催、促、さ、せ、や、う、よ、小、宜、し、く、  
 と、云、捨、て、出、行、ん、ど、す、る、時、店、と、納、戸、の、間、より、顔、を、出、す、の、五、十、二、三、歳、の、男、小、兼、  
 さん、何、時、見、て、も、美、く、し、い、ね、何、人、と、小、兼、の、立、歸、り、お、や、小、辰、さん、の、親、父、さん、さ、  
 の、不、相、變、甘、い、お、口、だ、ね、ね、え、お、母、さん、と、小、玉、の、母、の、顔、を、鳥、渡、見、て、態、ど、ら、し、く、  
 微笑、小、辰、さん、も、宜、敷、お、母、さん、お、邪、魔、様、と、云、ふ、時、此、も、湯、の、歸、途、と、見、え、し、藝、



者通掛れば小兼の此と聲を掛合ひ打連てこそ歸り行く  
 長火鉢を中よ晝からの小鍋立お龜の早微酔の上機嫌親父さんモ少しお飲さ  
 ね今日何したんだねえ浮ねえ顔をして何を其様よ考げえてるのでね男  
 何をつてお前考げえもするだらうぢやアねえか手附迄うつて今日明日と何  
 日迄延せるものぢやア無え乃公も柳橋ぢやア相應人よも知られてる小辰  
 の親父だ活物を相手よして抱へる來やうと考つて百と五十との融通がつか  
 ねえと云やア顔向があらねえお前が大丈夫だと請合たから間違のあるめえ  
 と思つて手附迄うつて其が斯う延引よあつちやア考えもするぢやアねえか  
 龜さうお云だと私が虚言でも云たようでお氣の毒だけれ昨日も出て出  
 たんだから今日の屹度返事があるよ其様よ心配しねえでも一杯お飲よ男  
 間違えがあけりやア何も心配するよやア及らねえがお前大丈夫か 龜大概  
 大丈夫だよ 男大概ぢやア覺束ねえと云處へ店より小女聲を張てあの鈴木  
 さんから久助さんが参りましたお龜の男と顔見合せ莞爾打笑ひ久助さんか

へ此處へお通し  
 久助の小腰を屈めて納戸よ入來ればお龜の見るより「おや久助さん能くお出  
 だサア此處へお出遊慮おしでの困るよ 久「へい」 難有う参在ますモウ此  
 方で結構で参在ますと小辰の親父をシロシロ見る 龜此方のお秋も惡意さ  
 人だから遠慮の無用よ小辰の親父も會釋して「お初よお目よ掛りますと云うか  
 此方へお進みあすつて 久「へいへい 龜丁度能所だ久助さん一杯お飲でさ  
 いか 久「へいへい私へい無調法で参在ますいえモウと云うかと云ふ中よお  
 龜の久助の前よ杯を置き諸否かしよ置飾よすれば久助の迷惑さうよ杯と腕  
 くらをして居る  
 稍ありて久助の「えー今日上りましたのの奥様のお使で参在ますがと小辰の  
 親父を鳥渡見るお龜の素知らぬ様して「さうかえお秋の使よ何も遠慮の無用  
 から傳言でもあるから 久「へいあの宜しう参在ますか 龜あ、能ともと云  
 ふ中久助の腹よ結へし風呂敷包を解き其儘お龜よ手渡しして「お手紙とそれ



よ……能くお改め下さいましてとじつとお龜の顔を見詰たり  
 お龜の小辰の親父と顔見合せながら包みとくとく中なる二品を取出し手紙  
 より紙包を指し押へて試みれば思ひの外嵩低き早面白からぬ顔色手紙  
 の封をツンザイと引裂き大畧讀了しがボンと火鉢の傍に擲出して少時の  
 無言小辰の親父も紙包とお龜の顔を見比べて同じく無言久助は仔細を知ら  
 ぬ此の茫然とお龜の面を見て不審を面付

龜久助さん此の儘又請取たと云てお吳今晚も私が行からと能かへ能さ  
 う云てお吳人此つばかりと初めにも似合ず聲又尖あり 久へいへい申上ま  
 す承知致しましたとさうかお請取を云へば面倒臭いねえと鳥渡請取を書き  
 久助も奥へ早く歸つてさう云てお吳れ 久へいへい大きよお邪魔を致しま  
 して左様さらど久助の立歸る背後に 龜人を馬鹿にして居やがる何能よ私  
 が今晚も出掛て行て思ふ様だをこねて遣から 男どうかさうでもして  
 呉ねえと云ふ聲久助の怪からずと思ひつゝ邸へこそ歸りけれ

第十回

お秋の母より度々の無心よ其都度良人才之助の耳に入る事身を斷るよりも  
 辛く奉公人の手前も肩身狭事のみあれば其身の小遣よとて月々若干の手當  
 を無てならぬ物の外に買ぬ様にして月々三圓五圓多き時の十圓近く母へ送  
 る様よあす心配を何とも思はれざること口惜しけれ此迄旦那の耳入し金  
 さへ數百の高よ上りたるよ今度纏めて百圓の無心どの餘りと云へば惘然過  
 る旦那が微塵厭ふ顔を見せ玉はず此方よりの申悪しと思ふ色眼を彼方より  
 お察しおされて夫婦の間よ遠慮のない答何事をも打開て話せよと勿体ない  
 程お優しいお言葉を聞く時の節よ昨日も昨日とて迎もやさるべき義理お  
 らねと強てのお尋ねも母が参りて斯々どのお話致せしよ百と纏りて我分  
 限よて大金其方も乃公が給料も知つて居ればお袋とても満更知られぬ事  
 もあるまい出来るおれば用達たき山々おれと今とありて乃公の力よは  
 及ばぬ事百圓の所の五十圓で濟み五十の所も三十で濟す法が遣かたでお



いども定らねばお袋の腹を立れぬ様其方より巧く和めて今度の此で承知して買いたい廿金で不足あり知れてあれど有る無し勝るべしと借た金を説き云ふていも返す様亦仰有り様餘り難有さ又嬉し涙又暮たのを其方を泣さうとて心配いせぬ何事も乃公が承知ぢやお袋も心算のある事であらう程も明日の久助も早う持せて遣れ其中より又都合をつけて用達も致さう程も度此で堪忍して下されどおの文言の説を云を旨とせよ親子の中の無遠慮も可厭き事の認めお袋の腹立上戸も其起因の正直過るからぢや乃公と其方との同心一休共泣き共笑ふべき妻夫其心配の無用事ぢやと此程も思召て下されしお金を不足らしく好面もせず晩も行て云事ありと何と云ふ言事久助の話で限つきの可厭き男が居て其奴が如何も鳥散臭い白晝からの小鈴立での如何して店が張れませうと見て来た儘を齒は衣被せぬ正直者の驚いたも無理のあい今夜の旦那のお留守こそ幸ひ來られたら思ふ存分出様よりて論破り切ても切れぬ眞實の親子の争論他人の見る目も蓋

かしいが親の言葉返すのも親を思ふ心よりあゝ嬉しいよつけ悲しい事の如何かれバ斯の断ぬぞとお秋の母を恨めしく眼をうるませて居たりけり玄關又人の氣勢の來客ありと玄關番の書生立出見るより手を支て「柳橋の御隠居様能お出さされました此方へ何卒と云をも待すお龜の早玄關を上げて「旦那にお在宅かへ 書いえ先生の今晚の御宴會がありますので 龜留守かへお秋の居るだらうね 書いお奥様のお宅に入つしやいます御隠居様のお出をお待かねの様に御在ました 龜何私の來るのを待てるって 書いハハ 龜それぢやア何人も指合のお客のあいね 書いハハ鳥渡や上ませうか 龜ナニ能よと云捨て奥へ行くを書生の背後より拳を體へお龜の頭を打真似して「何だ鬼婆め大きな面を仕やがるぞこれだぞ」

龜お秋また來ましたよとすつと入ればお秋の火鉢の傍も今も思案の休ありしが斯と見るより鳥渡會釋して「おやお出ささいと云しまゝ平生の様もナヤホヤせずお龜の早くも見て取て「ハハと鼻も冷笑ひ火鉢の側も坐らんと



しけるよ侍女のお勝坐布團を持来り「侈隠居様入つしやいまし何卒これをと  
進ければ」あいと答えて立上お勝は敷せて澄して坐り垂頭居るお秋の面をじ  
つと見るお龜も少時の無言よて煙草を二三吹輪よ吹し後お秋お前加減でも  
悪いのかへお秋の鳥渡母の面を見て「何だか心持が悪くつてお母さん侈免さ  
さいよと眉間よ八の字見るれば 龜さうかへお心持がお悪いのでそれも私  
の様さ意氣地さしの親を持てるからそれで尙氣が鬱々んだらう今聞と旦那  
の留守守ださうだから嫁られてもお前も話さねえちやアあらねえよお秋の  
斯と聞き呆れし如く眼を瞬り「お母さんまア旦那は直接よ旦那は話す積みの  
驚いて仕舞ね 龜驚いて仕舞何も其様よ驚くよやア及らねえよ 秋いえ私  
の驚きますよ今日のお母さんの仕打さんざア驚かずよやア居られさいよ  
龜何だどと眩度お秋よ對ひたり

第十一回

お秋の眩度形を正し私に實に驚きますよ能く考へて侈覽ささい私を落籍て

下さつた時お前さんも此家へ引取て遣う其とも窮屈よお思ひから何か望の  
商賣をさせても能いお村さんの融通も何とも仕様と仰有つた時お前さんの  
待合を仕度とお云だけれと客商賣も商賣よ依る鈴木の妻の母が待合をして  
居ると云はれての同僚の前も面白くさいから同じ商賣でも堅氣さ商賣よし  
て貰いたいと仰有つたのをお前さんが不承知をお云だから今の小間物店だ  
つて旦那の餘りお進ささらあかつたければ三百圓と云ふ資本を御して彼店  
を出して戴いたのぢやアあいかね其からと云物の毎月二十圓三十圓と  
罷も云れると思ふ程の無心を云つた上また纏つて百圓どの私の實に驚きま  
す旦那の俸給料も能存存じの癖よ餘まりアクドイぢやあいかね召使も多  
しお交際もあるし中々月給ばかりで不足どころを幸ひ有合せたど彼廿圓  
のお金だつて現在入用の知れて居るのを老人よ心配させるの可憐想だど  
仰有るから實にお氣の毒であらさいけれを態々久助よ持せて遣つたのだよ  
其を呆れて仕舞ぢやあいかね金の置て行け不足の云ふ行くとお母さんお前



さん何して其様氣もおありだ私の實も驚きますよと此迄の良人の手前奉  
 公人の思惑もあれほど何事をも母の云ふ儘も過せしが今日の餘りの仕方母  
 さればとて遠慮のされぬとお秋の齒も衣着せず云放ちぬ  
 お龜の横を向て煙草輪も吹き折々お秋の顔を睨みたりしがフ、ソと鼻で笑  
 ひお秋お前モウ其で云ふ事ねえのか其でモウお仕舞かへお前の本統もか  
 利口だよ傍發明だよ能く其だけ口を利様もかありだ其利口も發明お鈴木さ  
 んの奥様もある様よ誰が養育て遣たんだよアさ何人が面倒を見たとお  
 思ひだ親父さんが死去てからの悉皆斯云ふ私が手鹽も掛て其様口も聞ける  
 様よして遣つたのだ其も何だ奥様顔をしやがつて亭主孝行の知つて居ても  
 親孝行の知つて居るゆ亭主の傍よばかりコヒリ付て居やがつてお袋を乾干  
 よして其で奥様顔も凄じい 秋何だどえお袋を乾干よする外聞の悪い事を  
 お云でさい彼様も立派も店も出して遣て度々の無心も聞てやつて私だつて  
 戴いたお小遣の悉皆お前さんよ仕送つて居るよ外聞の悪い事をお云でさい

よ 龜外聞が悪いおア當然だ夫婦揃つて親不孝をすりやア人が許さねえよ  
 仕送るくッて傍大層お事を云ふが月も漸と三圓か五圓だ其で甘へ酒が飲  
 ると思つてるのか藝者をしてる中からお客を取るのハ厭だど毛嫌ばかりし  
 やがつて幾許稼いだと思つてるのだ其もお母さんがお心よしだから黙つて  
 云あり次第よして居たのだ其も何だ今よあつて五百や三百の金が何したと  
 云のだ馬鹿くしいお前も身の皮迄も締込で置て色男と夫婦よして遣やア  
 其で好ど澄しちやア居られねえから何でも今夜百圓貰いねえぢやア歸らね  
 えのさお秋さう思つてお出で義も理も辨まへざるお龜の言葉よお秋の唯呆  
 れるのみよ少時の云返すべき言葉も出す  
 龜「鈴木さんだつてさうさ他人の掛娘を自由よして奥様の候のど大きお顔  
 がしたいのやら最些キレルが能のさ好お商賣をさせて遣と云て人をお欺し  
 のハ傍人休も似合ねえとそろく鈴木を説訴の口を切れバお秋も黙つて  
 ハ居られずあり母さん大概よかしよ私の事やら親の無理と随分黙つても居



様けれど旦那の讒訴を云れちやア奉公人の手前もわり黙つちやア居られさ  
 いよ 龜何だ黙て居られさきやア何とでも勝手よ言ふが能い 秋あゝ云ま  
 すとも今度のお金だつて小辰さんから頼まれた珊瑚を二つ持逃されて償は  
 なくつちやあらさいから其でお金が入るとか云だが虚言の事知つて居るよ  
 娘の旦那を責めても情夫と白晝から小鍋立がしたいと少しの歳も恥  
 ぢさいよとすつかり言バお龜も流石又胸を刺れて顔色變つて見ぬよけり  
 龜何だ色男を引摺込み白晝から小鍋立たア何を證據よ言ふのだよ言掛り  
 よも程があらア 秋證據のさい事言さいよ言掛りだとか言から確かお證  
 人を出しませうよ久助久助鳥渡来てお呉れ 久へいへい唯今其も参り  
 ます

第十一回

人の評判の善又つけ悪又つけ下又落すしくして上又傳るあり小才覺のある  
 商人も權助おさんよ益暮の遺物をさし平日氣入る様お世辭をも云人

の家よ取入秘訣娘の情事下女の取持よありてまた其口から世間へも漏る  
 あり一季半季の奉公人年俸高くて十八圓の大藏秘書官油断すれば手を噛む  
 飼犬も是から出るぞかし  
 鈴木の臺所よて侍女のお勝下女のおさつ支關番の書生下男の久助奥を見  
 ての齒噛をさしおのおのお秋を賞てお龜の後評 勝本統又顔を見ても憎い  
 よ私が座布団を出したらあいよとツイと立て私よ敷せて懐手をしたありで  
 ベタリと座つて禮も云さいで帯のしめ様が高過て野暮だ喜んで不用お世話  
 だ奥様のお母さんよ違さいから強て禮を云れたかアさいが何も彼人よ使  
 入れてるんぢやアあるまいしお勝お氣の毒位に云ても罰も當らさいだらう  
 ぢやアさいか 畫ヒヤ〜だ僕あんなかア食が喰さいから此家よ厄介よあつ  
 てるのでないんだ先生どの同國だし親爺が先生と懇意で以前の先生の世  
 話をした事もあるのだ其縁で此處の厄介よあつて居るのだ其様事を知りも  
 しまいで普通の立關番だと思つて僕が奥さんの親だと思ふから立關の板の



間も手をついて挨拶をしても會釋もしない失敬を婆だ奥さんの何でさけり  
 や此拳骨で一本盛るんだけれど實は失敬を婆だ 下「私だつて東京三界顔の  
 讒訴を受え迎來ましねえ私鼻これ今日初まつて低い譯でもありましねえ此  
 だどつて親骨折て慥えた鼻だアよ其をお前様怪からねへお前がお白粉塗く  
 つたら大笑下女獅子鼻白牡丹だ云たアよ理屈の理屈又違ねえが此だつて  
 私い村での評判よも乗た私だ獅子鼻だどつて彼婆様の世話さアありましね  
 え 勝「は、は、其様事を云たかい自分の面から鏡映すが能い 書實は失  
 敬だ久助さんお前の事も何か云て居たぞ 久「あア私の事を何と云たもて  
 其様事の何とも思はねえがね奥様がお可哀想だアお勝さん今何を云て居た  
 ね 勝「奥様も今夜能い顔をして入つてゑやらさいから大不機嫌で種々お事を  
 云て居るよ 久「さうかアね憎いお袋様だ 勝「帯を立てお遣よ 書「僕ア下駄  
 又灸でも點てやらう 久「其様事をして奥様も知れての能ありませぬよ 書「  
 拵ふものか 勝「をや久助さん奥様がお前さんを呼で入つてゑやるよ 久「私を

かねへいへい唯今参りますへい唯今 書「機會があつたら充分に攻撃して還  
 が能ひ僕も援兵も出掛て行ぞ  
 秋「久助此處へお出遠慮しあくつても能いから此室に入つて跡をおえぬ  
 久「へいと這入て背後の唐紙を閉め手をつき久「へい何の多用で滞在す 秋「  
 わゝ種々聞たい事があるから無遠慮云てお呉れ 久「へい存じて居ります事  
 さら何ありと申上す  
 お龜の久助の來りしを見て此老骨が証人か何を知つてと尙も澄して空囀ふ  
 く  
 秋「久助お前今日母さんの宅へ行た時何人が來て居たかね 久「へい何で滞  
 在ます五十ばかりの人相の悪い鳥散お男がお袋様と……  
 お龜の久助の方へ膝を押し向けて走る様お眼をもて屹度睨み「何だと人相の悪い  
 鳥散おたア誰の事を云ふのだ 秋「お母さん黙つてお出ささい私が今久助も  
 聞て居る處だよ 龜「うんよア黙つちやア居られねえ鳥散お男どの何人の



事を云のた久助云てお聞せサア何人の事を云のたど眼色變りて詰寄つたり  
 久助もお龜の所作の憎くて堪らざる此頃主人の母あれほど遠慮する心あ  
 きよぞお龜の凄まじき氣勢も少しも屈せず「へい奥様のお尋で御座いますから  
 申します丹前を着て三尺帯をしめた五十ばかりの男とお袋様と酒を飲でお  
 出なさいまして久助も飲と仰有つたのをか忘れの御座りますまいお秋のじ  
 つとお龜の顔を見るよお龜は「ッ、ッ」と冷笑ふ

「お前の様お田舎者の柳橋あたりの様子に知るめえ白登だつて客があれ  
 ばお酒の出すよ其が何が不思議だよ餘り馬鹿くしくつて笑ふも笑えさ  
 いよ其やさうで御座います此久助の田舎者で御座います堅氣も店を張て居て  
 近邊の者が来たからと申して酒を出す様お中私に在所の御座います  
 よ「お其やさうだらう彼お客を遠方の人か近邊の人かお前知りやしめえ  
 久田舎者の久助でも彼男の知つて居ます富士屋の小辰と云ふ藝者の親爺  
 で御座いますと云放ち此でも御座いますふかど云さうお顔よてお龜の様子を見る

「お前能知つて居たねありやア私の處へ直しよ来た小辰の珊瑚を持逃さ  
 れたから其を償へど彼時も丁度催促も来て居たのさ久其様事を仰有つた  
 つて久助の何もかも悉皆存じて居ります今日歸途も近邊所の髪結床で悉皆  
 聞て参りました髪結床でも新聞も出さいのが不思議だと評判をして居りま  
 すよ其時間事をしてしあげたら奥様も嘸吃驚おさる事であらうと此はつか  
 りの申しませぬと久助が言葉の云廻し秘事を残らず知りし様子あれば流石  
 のお龜も言句も出す顔を火として身体さへも震へたり

お秋の母を見返りながら久助を退ぞけて「お母さん餘り酷すぎるぢやアあ  
 かねと恨を述べんとおしける時立關又車の音轟きお歸りと呼ぶ聲す良人の歸  
 宅と出迎へんとお秋よりお龜の先立上り「能も久助と馴合て親の顔を  
 お潰した此返報の酷度するよと立歸らんとお秋の慌て押止め「旦那も  
 丁度お歸宅おすつたからも少し待て下さいと母の袖を捕ふれお龜の何を  
 すると振返り様お秋の胸をドンと突ばお秋の尻居又倒れしが母も取付んど



第三十回

して思ひ返し其儘伏して忍び泣くお龜の見つゝ冷笑ひ出んとする時鈴木の早く此處より来り無理にお龜を引止たり

犬猫も受し思ひ忘れじと云ふあるいかゞ非義非道の者さればどて思を受し人又對ひかへ磨すませし刃ありとも鈍らぬ事のいかであるべきお龜が今宵鈴木より来りしに云ふ迄もかく我娘夫婦を説破りて望める黄金を得んとせしかり去よ才之助家よりあらざるのみか娘のお秋が鈴木の子ありて後の絶て口答さへさせし事あらざりしと今宵の思ひも掛す我と争ひ加之久助が其身の秘密の幕を知りたるは流石最初の擬勢折けたれと去とて弱身を見せるの損ありと尙争のんとおしける處へ才之助が歸來りしと一大敵を加し心地元來才之助の會ん心ありしと其前より小辰の親爺を引たり小辰立の放埒のと列べ立られての流石は面目を失ふのみか意外の事と立到らんと態と外して通んどせしは鈴木は早部屋の入口より立たるは振切もあらず阿

容く引止られぬ鈴木の平日出進ふるお秋が玄關にて顔を見せねば俄病や侵るけんとお勝も問は柳橋の御隠居様來られて今お話の最中ありと云ふ其よし迎へざるの不思議と我居室へ行様と納戸を窺へば俄人の倒れし音して忍びて泣音のお秋あり唯事からずと走り入る出會頭お龜と顔を見合せたりお秋の如何と之を見るは火鉢の傍に打俯て袖を蔽ふて泣く様あり

此様無論仔細あり其の後にて分明あらんと才之助のお龜と對ひ留守として失禮でした私の居室へお出ささいか龜の少しく氣味悪ければ此處を脱らるべきよあらずとはい唯今か暇しやうと思つて歸る所で滞在すモウ深更もありませんした伺ひませうと伏したるお秋を斜め見えて兎角歸らんとしたりけり  
此時お秋の顔をわけしが良人を見る眼は涙を含みか歸宅遊ばしと云つゝ顔を斜めすれば才之助も僅か首肯のみありき



才「お母さん、此方へ出でまだ十時もあるか、あらず、今晩の泊る事として私の室でお話ささいお秋加減が悪ければ先も寝ても能くいや、其様事のお勝もさせれば、好いお母さん、乃公が能話をするお母さん、サアお出でと先も立ちつゝ、我居室へ入り手早く和服も着替、坐布團おどお勝も命じてお籠も共も坐らせけり

魚「今晩の傍宴会だつたそう、で、傍在ますねえ、才「左様さ、面白くも、おい、會だ、が義理として臨み、譯も行かず、大草臥、草臥て疲勞しました、魚「さうで、傍在ませうとも、お交際も、お大体で、傍在ませんねえ、才「交際と云もの、お氣の隔る處も、あつて面白く、おぬものさ、魚「本統で、傍在ますねえ、才「時もお母さん、今日お秋から、届いたかね、魚「はい、確、頂戴致しました、才「敵もお氣の毒で、生憎の時、で、意も任せ、ませんが、來月、來々月、あつたら、また、今度の彼、だけ、で、まア、何と、かして、置て、下さい、魚「ハイ、いえ、モウ、何時も、傍無理ばかり、お願ひ、申しまして、何ね、貴所、本統、馬鹿く、しいので、傍在ますよ、お秋から、お聞で

傍在ましたら、うが、飛だ、災難も、會ましたもので、すから、其で、貴所、據無し、よ、お願ひ、申せる、譯ぢや、ア、おい、んで、傍在ます、けれども、先方が、因業、お家で、毎日、く、今晩も、宅も、催促も、參つて、居るので、傍在ますよ、と、鈴木、の、機嫌、能、ところへ、附込み、また、物も、せんと、様子、を探る

鈴木も、お龜の、性質、お秋、よりも、聞き、其身も、大方、認め、し、所、あれば、能、と、聞流、し、よ、して、取合、何、か、お秋、から、今、歸宅、た、處、で、仔細、の、解ら、お、い、が、何、か、お秋、が、氣、も、障る、事、でも、申し、した、様子、だ、が、まア、聞流、し、よ、して、置て、下さい、お秋、も、餘り、正直、過、て、私、も、さへ、言葉、を、返す、事、がある、よ、私、から、も、云、聞、せる、が、お母、さん、から、も、序、の、時、能、云、聞、せて、貰、ひ、たい、もの、だ、と、お龜、も、花、を、持、せて、巧、み、云、廻、し、ぬ

お龜、の、鈴木、が、自分、の、話、も、乘、て、來、ね、お、今、宵、の、不可、と、見、据、を、つけ、お、貴、所、親、子、の、心、安、立、も、私、だ、つて、時、折、無、理、お、事、を、云、ん、です、から、阿、秋、ば、かり、が、悪い、の、でも、傍、在、ませ、ん、の、さ、で、す、が、ね、貴、所、娘、も、藝、者、お、ん、ご、さ、せる、者、ぢや、ア、あり、ませ、ん、ね、今、晩、と、云、ふ、今、晩、本、統、も、思、當、り、ま、し、た、よ、と、怒、り、を、含、み、し、様、よ、て、才、之、助、の、顔、を



見たり

才「フー、何した譯で、龜何ね因を云へば私又其丈の位が赤いからで、在ますのさ、悪口雜言されたつて仕方ありませんよと態ど齒と物の掛りし云廻し、鈴木、膝を進め、誰が悪口雜言をお秋がかね、龜「おア、彼久助まで、在ます私、破落漢を引摺込で怪しお事でも仕て居る様、何ぼ私だつてねえ、貴所此歳もなる者を餘りぢやアありませんかね、才「それ、怪からんあの、久助が怪からん奴だ、久助、久助、いや聞捨よ、いからぬ、久助、久助、鈴木、ハ、ハ、怒りの聲、鋭く久助を呼立たり、

お勝此場の様子を偷聽して早くも久助又告知らせたり、久助、奥様の前、おれ、バこそ遠慮もしたれ、旦那様の前とあれ、彼狸婆の面の皮を引剥いて遣んど勇んで才之助の居室の椽側へ兩手をつき、「ハイ、旦那様お召で、在ますか、何の御用で、在ます、才「いや、用で、いさい、貴様の、伊隠居さん、又怪からん事を、やした、お其處で、お詫を、やせ、久助、云捲らん積り、よて、來りたれ、旦那様、久助、の、虚言

第十四回

のやしませぬ、それの、其……才「え、黙れ、黙れ、黙れ、言葉返す無禮者、詫をせ、い、詫を、せい、え、何故、よ、詫を、致さん、のだ

久助の思ひ掛ずも主人鈴木の發怒、強くお龜又失言を謝せよと云ふ、唯呆れたるばかり、よて何と云ふべき術を知らず、鈴木の顔を仰ぎしのみ、よて一言も發せざれば、鈴木の尙も急込て、久助お詫を致せ、其方の實は不都合を、奴ぢやど、何を知つて、伊隠居さん、又無禮者、ことを云たのだ、不都合、千万、才「ハイ、何を、知つて、仰有り、ます、か、お袋様のお所作が、餘まり、で、御在、ます、から…… 鈴「え、

「まだ、云、か、其、様、お、事、を、云、口、で、お、詫、を、致、せ、好、ん、ば、何、様、お、事、が、あ、ら、う、と、も、貴、様、が、其、様、お、事、を、申、す、よ、い、及、ば、ぬ、の、だ、能、々、の、事、お、ら、あ、せ、乃、公、よ、内、々、で、話、さ、ぬ、の、ぢ、や、サ、兎、も、角、も、お、詫、を、致、せ、サ、詫、ん、か、 才「で、い、伊、在、ま、す、か、且、那、様、其、の……

鈴「え、乃、公、よ、迄、言、葉、を、返、す、か、乃、公、の、命、令、よ、背、く、あ、ら、今、晚、限、り、雇、を、解、は、す、ぞ、 才「へ、ッ、お、暇、を、 鈴「お、う、暇、を、遣、す、其、で、も、貴、様、の、お、詫、を、せ、ん、か、主、人、よ、對、つ、て



悪口したのゝ召使の身で理非を争ふ所でさいア詫んか詫んければ暇を遣はすと久助が云ふ所の一言をも聞入れず唯詫よくと叱し尙ほ争はば暇を遣はさんどあるは久助の争ひかねて主人の命令は従はんと思へど狸婆は對ひ過失なき過失を謝せんこと如何も口惜くお龜の顔をツツと見ればお龜のツラ見た事かど云ぬばかり片頬は笑を含みて久助の顔を尻目と見し眼を轉じて天井を眺る顔のえい憎い奴

斯あれは何程口惜くとも其身は塵微ほどの過失ありとの思はねども主人の命令の畏さはお龜は對ひ頭を下んとおせせも頭を紐もて天井は釣れし如く下んと思ひおがら下らずお龜を見し眼は涙見ゆれば鈴木は不便ありと思おがら久助何故詫んか久へい 鈴まだ悪いと思はぬか 久へい…… 傍隠居様私の不調法で涉りましたと頭を座につけしが腰の手拭の何時の間にか右の手は在りて涙の露は濡れけり

お龜は久助を下眼に見てそれで何かえお前の不調法とお云のかえ 久へい

い全く久助の不調法で御在ます 龜能いよ其で能よお前も自分の口から不調法とお云だから私が情夫を引摺込だの小鍋立をして白晝から酒を飲んでたさんぞと有もしない事をお云のは全くお前の作言だね 久えッ作言と久助顔色を變れば鈴木は屹度久助を睨むは久助は是非あしと頭を下る

龜「作言まさかねえお前の様も正直お人が作言をしやアしめえ何人かよ何されたのだねお前餘まり正直おのも損だよ其だから此様は謝罪事も出来るのさお前の様も正直者の人は弄戯れるのだから私やお氣の毒であらさいよはくはんと冷答ひ「ねえ貴所餘まり正直でも困りますねえ飛でもさい人もわれはあるのだとまた態とらしく打笑ふ中久助は鈴木が味は座敷を滑り出て臺所へ退ぞさぬ

勝「久助さんお前さん口惜いだらうねえ 書何故ドンく攻撃しあかつたのだ乃公から遣つけて仕舞んだが君ア意氣地がさいぞ 久私に實は意氣地がさい今晚の様は口惜い事ア私の生れてから初めてだと尙も涙の眼蓋を濡し



けり  
 お龜の多寡が下男の久助に謝罪せしを一期の手柄の如く打喜び此を機よと  
 最早深更たれば一泊せよと云を聞入れず柳橋へ歸りぬ  
 次の日鈴木の久助を近く招きて其方又過失なく柳橋のお袋身持悪き事、我  
 連も知らざるよあらずされども事毎六かしき事を云へ彼氣質としてのお  
 秋を取返すよの事を云出さぬとも申し難しそもお秋を妻よあさんとせし  
 時親類の中よも異論多く殊に實兄坂上よての大の不承知ありしをわれ獨斷  
 よ迎へしあれは妻の母よ云々の事ありよと云れての妙あらぬ廉抄よからず  
 さればこそ昨夜の如く不論是非其方を叱りしあれは必らず悪う思ふべから  
 就て其方よ計り度い袋の氣質よての此後は些細の事よも必らず昨夜の  
 事を云出て妻のみあらず此才之助よも一つの過失ある如く楯よもあし銚と  
 もあさん余が家を平和よ治めんよの過失もあきよ氣の毒よがら其方の雇を  
 解の外あし必らず悪う思ふて呉よと思ひ掛けざる主人の言葉よ久助の言句

も出ず鈴木の顔を仰ぎつゝ呆れ果てて見えよける

第十五回

久助の主人より暇を遣せんとある意外の出来事よ少時の言葉もあくてあり  
 しが稍ありて奥様の迷惑を見て居りますのが如何よも心苦しう存在ます  
 から今よありて考へて見ますと下人の不用差出口と實よ後悔致します今後  
 の屹度心を注ゆまして此度の様事よ決して致しませぬ何卒今一度過勘辨  
 下さいまして此迄通り情願久助をお使遊ばして下さいませ實よ久助の落度  
 で存在ました何卒過勘辨を願ひます且那樣従前通りお使遊ばして下さいま  
 せと涙よ共よ打詫れば鈴木も過失ありて暇を遣はすあらぬは流石氣の毒よ  
 よ尚ほ聞入難しとの云棄て少時の共よ默然たり 鈴いよ唯今も申す通り其  
 方よ過失があつて暇を遣すのでいはい其方も知つて居る通りのお秋が母の  
 性質此後よても昨夜の事を根よ持て万事よつけて楯よ取るの知れて居るさ  
 う致せば其都度よ其方の迷惑お秋の苦勞乃公よても二度が三度三度が四度



どおれは是非なくお秋を離縁せねばならぬ様もあらういや其も自然の結  
 果おれば是非が赤いが親類又對して兄の坂上又對してッレ見た事かど云る  
 も面白う赤い其方又過失の一點も赤い此後出入を止ると云でいさし主人  
 の家を平和又治めさせたいと思ふ心があるからこれ久助氣の毒おがら暇を  
 取て呉れよいか解つたか決して悪う思ふかと主人の身もて手をも下ぬばか  
 りの鈴木が言葉又久助の唯涙又暮るのみハイと答ふるさへ甚口惜しく  
 見えよけり

久「詮方が浮在ません其通り又仰有つて下さいますのを私が兎や角や上らる  
 譯も浮在ませんそれでいお言葉又隨ひまして今日お暇を頂戴致します此  
 迄の一方からぬ浮恩を戴きまして……またお目も掛りますことが浮在まし  
 たら其時の矢張此迄の様……旦那様此上の浮繁昌を蔭ながら祈つて居り  
 ますと言葉も斷續又答へて悄然と立上る時次の間よりお秋入來りて久助ま  
 アお待ちと聲を掛れば久助の頼みの綱又取付し心地よてはいと云様ベマリ

ど坐りお秋の顔を見るより奥様と唯一言手拭を顔又押當つ泣く  
 秋「此様事よあつて久助實にお氣の毒であらまいよ旦那がお前も暇を遣ると  
 仰有るから私の種々申上た事もあるけれどお前も今お聞の様次第で却つ  
 てお前の迷惑する様お事が多いと違ひまいから無理お事を云とお思ひたら  
 うが暇をどつてお呉と氣の毒さう云廻し久助のまたも木より落し猿言  
 葉のなくて頭を下て詮方おしと云ぬばかり又承諾しぬ  
 お秋にお氣の毒を言葉の前後又つけて尙も久助を慰めつ鈴木よりの志其  
 身の志を二包一つ又重ねて久助が辭退しぬくを無理又納めさせて此邊又來  
 たらばまた寄るが能い浮機嫌宜敷くを主従の別として久助の終又鈴木より  
 暇を遣せぬ玄關番の書生侍女のお勝下女のお末も久助との別離を惜みて皆  
 々門又送り出れば久助のお龜の憎い事此家を出る事の口惜しさを幾度と赤  
 く繰返しお前様方も浮奉口大事又主人の浮身の上を頼みますると門を離  
 る迄云續けて見返りく残惜げ又立去りけり



母の性質一つよて奉公人よ迄氣の毒さ思をする事よとお秋ハ久助ハ暇を取  
 らせて火鉢の傍よ何となく思案せる處へ久助を送出せしお勝前ハ手を支へ  
 て「お郵便が参りましたと差出すを見れば母より其身ハ宛しかり何事と胸騒  
 けども左あらぬ様にして久助ハモウ去たかね 勝「ハイ 秋氣の毒さ事をした  
 よど力あく云バお勝も悄然て「本統ハ能い人で御座ましたのよ 秋「あゝ濟さ  
 い事をしたよど云ふ時座敷ハ手を敷せバお勝ハ高く答えて座敷へと急ぎ行  
 く  
 後よお秋ハ母よりの手紙ハまた心配の事でのないかととくく讀了りし  
 がひた呆れよ呆れて少時ハ手紙を見詰たり

第十六回

一圓の札が千圓あるとの難有い話中らぬ前ハ彼富ハ當つたら其中五百圓  
 ハ手堅い株よして置くか日本銀行へ定期預よして卅七年目の津波よ出喰し  
 ても此ばかりハ大丈夫残りの中百圓ハ子供女房われ等の衣服五十圓ばかり

で芝居も見せて遣ろ遊山も遣てやろまた百圓ハ豫備よして二百五十で小  
 取廻しお店商賣をして三年過バ先づ店ハ成立つ小金ハ貯る其から吾等旗上  
 の一段早く中らぬか中つて呉ぬかと白蛇の抜殻の無疵お奴を借て来て神酒  
 をあげて祈り込んだ又手難有い富が中つた女房喜べ富が中つたぞッテやお  
 婿しや姉ハ娘の事黒絹の羽織が製へて遣たい何でもあいわ。次郎ハは試験  
 の晴衣ハ仙臺平の袴が能く似合せう。オツと能わ其も香込だ其からの妾。何  
 ちと望んだか能う。又手何よしたら能座んせう。其方の事ハ其方次第ちや乃  
 公から云ふから羽織ハ七子の黒の紋付が出す入らずで品が能い着物ハ一樂  
 の二枚重ね帯ハ心あし博多を三つ又折てギエツと云せて遣ろ其ハ第一眼よ  
 觸ハ時計ぢや吉沼か天賞堂か其隣家の藤田ハ仕様か廿一金ハ鎖ハ十八金帽  
 子ハ巴里の流行を規つて下駄ハ香取屋よして鼻緒ハ絹糸で別誂よしても四  
 圓捨れば先づ羞かしうはさいき。其ハ目よ立いで屹度したお見立妾もお前様  
 よ釣合してやさうから帯ハ絹珍の丸帯着物の鳥渡着の京着召よ餘所行の祝



事よも用の足るゝ小紋の紋付頭の物の見た上での望が御座ますと四五百圓  
 の身の皮よして其を見せたい爲の芝居遊山よ一月の入費が二百圓去來商賣  
 の段よあると漸と百圓あるかかし思つた商賣の見込は外れて投首をする頃  
 よ廿一金の時計繻珍の丸帯がッロク質屋よ駈付け店も開かぬ中よ本來  
 空とあるぞかし千粒の汗よ絞つた白銅一枚が積りも溜りもしたらら富士  
 の山ともあり太平の洋ともあるべし逆つて入る資逆つて出る例お龜が鈴  
 木より絞りし高揚なからねと淫樂よ費やす金の百金も一文其都度娘の涙を  
 絞る事いと淺間し

富士屋小辰と記せし彦神燈の格子戸ガラリと開て今晚へと道入のお秋の母  
 のお龜目腐の下女早くも開付け「オヤ瓢屋の御隠居さんお出ささいましと云  
 ふ中お龜の早火鉢の傍小辰の親爺と顔見合せ親爺さんまた来たよまだ返事  
 が來ねえのさ親氣たくあるだらうぢやないかと云つゝ座る親爺の勘兵衛お  
 龜の顔を鳥渡見て其だから云ねえ事ぢやアねえ彼様手紙を遣るア未だ早と

云つたんだのよあれで本統よ怒らせ仕舞ちやア跡が利ねえで仕様がねえ其  
 だから乃公が云ねえ事ぢやアねえお前の短氣から不可よと云つゝも尙思案  
 の様子

お龜の眼腐が篩で出す煎茶をアと取て一口飲みだつて彼位よしねえぢや  
 ア剛情ッ張だから利ねえもの勘其もさうだが今迄返事のねえのを見ると  
 怒らしちまつた様だぜ 龜怒つたら怒つた時でまた責道具ア獲許もあらア  
 ねお前と云ふ軍師が就てるものと勘兵衛の顔を見て莞爾笑へば勘兵衛の上  
 眼よ見返し「へン餘り軍師の就く風でもあるめえ 龜これの浮摺扱とでも云  
 ひたいねおほおほおほ

小「お母さんお出ささいと聲を掛つゝお龜又列びて坐るゝ富士屋の小辰顔の  
 般若質色蒼黒く眉薄く眼の周圍黒すみ頬の眼下よ近き邊よ糸蚯蚓の様な血  
 管見えたるが口のキツと締りあると鼻の餘り高からずしてツンとしたるよ  
 て存外見らるゝ容色まづ一曲ありさうあり



小辰の煙草をつけてお龜も與へ随分玉ちやんを賣めるのねえ可哀想よとお龜も對ひて微笑とせし眼の其父の顔も流れて口程も物を云ふお龜も微笑せしが何れも責めたかねえが餘り剛情ッ張だから少しや藥もあるのさど煙管をはたきて小辰も返す

小辰の父も對ひたがねえ親父さんお母さんパツかしを的として抱える積りよしたんだから今もあつて間違ふど私が實も困るわ 父そりやお前が云ねえでも承知して居るんだから其様も心配しねえでも大丈夫だらうぢやアねえか 願うさうだとも私だつて願屋のお龜だ約束しどいて今更出來ねどい云ねえ鈴木の方が間違やア店の物を賣たつて約束した丈の事をするよ安心してるが能よ 小お母さん濟さいけれど私が大變も困るんだから本統も頼み申しますよ 龜「アイ安心して居出よと云ふ處へ座敷ありとの報も小辰の仕度せんとして其坐を立ちぬ

第十七回

お秋の我居間も唯一人巻紙を膝も持添へ片手の筆を顛顛の傍も翳し吐息繼つゝ思案の体筆を下さんとして思案し思案してはまた書もて行しがツツと筆を止めて書し分を巻紙より引裂き其を兩手も丸めて袖も押込みまた書んとして筆尖の鈍りしか稍少時思案おしつゝ寧ろ今の様も書て遣うか知らぬ人が聞たら何したつて親も違ひさいのだから嘸私を悪い様も云はふ一度や二度ぢやアあし此迄彼様も心配を掛て置て其揚句も彼手紙どの實も驚いて口も利れさい何れか書様もあらうのよお母さんよの實も呆れて仕舞ふよ何して彼を旦那も云ふ事が出來よう今更始まつたのでんさいがお母さん私を可愛ども何れも思ひさいのかね仕方がさいから矢張さう書て遣うか旦那も相談をすれはお母さんの手紙をお見せやねばあらぬさうすれお母が此でいど結局も見捨られるよ違ひさい私が唯旦那のお傍も居たいからと云てお母さんを捨るんぢやアさいが理も非も解らず義理も人情も知らさいのだから何も實も仕様がさいと眼中も潤みを有ち終りの思切りし様もて



思案しつゝ筆を運ばせ漸書終らんとせし時思掛けず唐紙を開て入る者あり  
 お秋の驚きながらお勝かど見れば良人才之助ありしよ生憎ありきと手紙  
 を其儘背後隠して恐怖を帯し眼もて良人を見る  
 才之助のお秋の傍に坐りて「お秋隠さんでも能いでいかに今の何ぢや何  
 處に遣る手紙かお母さん遣る積りであらう何も隠さんが能いぞと星を指  
 れての隠さん心も半の失しが又手紙を見せる迄の思切れず「ハイ母遣  
 ます積で書て見たので御在ますければも…… 鈴さうである乃公もサウと  
 の察したがもう何も云んが能ではあいか秋でも餘りで御在ますもの 鈴  
 餘りどの何様事を云て来たお母さんの手紙の何處もある見ても大事ないか  
 ど一步切込れての流石も面目さくお目も掛まして能御在ますければも餘ま  
 り酷い事を……私の本統も羞かしくつてと見せたがらぬ程鈴木の見たくも  
 あり讀で見たならまた相談の仕様もあらんと強て見せよと促したり  
 之を見せていとお秋の今更胸躍りながら手文庫の中も秘し母の手紙を取

出し面目あげよ良人の前も指置を鈴木は取上げて「サウ」と讀行きたり  
 昨夜の能もおいぢめなされい一人の親の顔を潰したので定めて胸が空  
 て嗚か喜びと存じ自分ばかり奥様顔をして居れば親のたつても構  
 ない心も違ひないから此からの親でも子でもさい私も勝手とするか  
 らお前も勝手とするがよい此から屹度親子でさいから決して構ない  
 が能くは鈴木さんも鈴木さんだ女房のお袋の云事が素直に聞かぬ様さ  
 人どの知らなかつたモウ無心も云ないから安心さされい乞食もあつ  
 てお貰ひも行た時親子の名乗を致すべくし  
 鈴木も讀了りて呆れ果て少時の云べき言葉を知らず唯嘆息するばかりあり  
 お秋の襟袵の袖口もて涙を拭き「所天餘りでの御在ませんか私に如何して彼  
 様母を持たたので御在ませう實に因果で御在ますよと終り袖も顔を蔽ふて泣  
 く  
 鈴木も流石も愛想を盡し「此様事迄云ふ人どの思はあかつたが此手紙で



又驚く此迄も成程困却した事もあるが一旦縁があつて婚姑とあつたのだから辛棒するだけの辛棒して居つた此で實に致方があいか秋お前の何と云て遺積りか 秋「外に致方も滞在しませんから親子の縁を絶ます積りで……」  
 鈴「ナニ親子の縁を絶る愈よ遁路があい時又其も止を得んが絶て絶れぬの親子だ先づ熟考へるが能いぞ 秋「ハイ難有ふ滞在しますが私のモウ決心ましたと堪へされずヨ、と泣くを鈴木のお秋の心を察し遣り悄然て見ゆよける

鈴「先づ熟く考へるが能が斯の云て來ても歸しであらうから放擲して置いて何だ 秋「ハイ放擲して置いた種々お事を云て参りますから私の母の申す通り縁を絶ますから何卒私をお任せますつて下さいまし 鈴「夫程云ふから其を好むと思はぬが囁み相違ないから必らずお母さんから悔て來やう其迄にお前の思ふ通りとするが能らうが其時あつて餘り剛情を張ど乃公の面皮も開る事が起らぬとも限らぬから其處に能く注意して居て呉れ能か

秋「ハイ 鈴「モ少し年を老たら屹度悔て來るからアさう心配せんでも能いでいさいか 秋「所天モウ五十を越たので滞りますの實に羞かしう滞在すよ 鈴「其も仕方があいな手紙の成丈酷い事を書ぬが能ぞ 秋「ハイと先づ始末の此を一決せしが鈴木のお秋を慰さめ遣んと少時の餘談又時を過し我書齋へ歸り行ぬ  
 其夜お秋の思の儘を筆に云せてお龜が方へ送り遣りたり

第十八回

小辰と其父勘兵衛との火鉢を中へ差向ひ何やら互に澄ぬ顔付 勘「お前の様は直怒つたツて仕様がさからうぢやアねえか瓢屋が虚言を云たア譯ぢやあし先方から外れたんだから何方も今更ッを云たツて仕様がねえ 小「親爺さんの仕様がねえで澄して居られるけれど私や實に困るぢやアあいかね初めから出来あいのから出来あいで此迄もやア何とか仕様がゆるわね去來とあつて瓢屋ぢやア金が出来あひ片方ぢや玉を新橋へ遣ちまつたと云れて



ハイさうで居ますかとの私よ云て居られさいよ 勘居られると云つた  
 つて居られねえと云たつて今更何も仕様がねえぢやアねえかお前も平生の  
 様でもねえ 小そりや當然さ仲間中も今度これの妓を出すから頼む  
 よと吹聴しどいてさ今更百圓ばかりの金も困つて斯々だと云れちやア外見  
 を張る商賣ぢやアあるし姉さんだとか何と云はれてる丈に人よ顔が會さ  
 れさいよ 勘そりやアまア其様もんだだつて仕様がねえぢやアねえか 小か  
 前さんが彼様婆さんかんと相手よしして大丈夫だとお受合だから間違もさか  
 らうと思つて飛でもさい目よ會はされたよ是から彼婆さんを宅よ足踏もさ  
 せてお呉でさい馬鹿くしい 勘お前其様事を云が随分此迄宅の爲よもさ  
 つてるぜ先日更衣さんさア半分から都合して貰つてるぢやアねえか 小  
 私や可厭だど云たのをお前さんが構はねえどお云だから其で使用たのさ何  
 だつて云から彼婆さんを宅へ入てお呉でさいよ 勘そりや餘まり勝手過や  
 うぜ 小勝手過さつて何だつて能から… 本統よ彼老婆の顔を見るのも念

だど勘兵衛の言葉の耳へも入れず小辰の疝氣強き女よ一つ間違へば親の  
 見界もさく悪口雑言の末の泣騒ぐ癖あるよぞ勘兵衛も日頃懲て強くの云  
 ず其場を外さんと立上りて「お花(目腐)の下女の名湯」行くから手拭を取て呉  
 れ 花ハイと石鹸も取揃へて持来れば勘兵衛の火鉢の抽箱より湯札を出  
 し無言よて出行を小辰の見送り「また瓢屋さんぞお這入でさいと云を背後よ  
 受て湯屋へ行く  
 引違へて格子戸ガラリ入来る瓢屋のお龜今晚の小辰さんお宅かへど云を  
 小辰の聞より眉を皺めてお花を見返れば平生の御隠居さんがど飛で出  
 るお花が小辰の顔色と先刻からの親子の争ひを能く飲込べ此も小辰の顔を  
 見返して可厭お奴が来ましたよと云ねばかりの顔付此を下女氣質とや云べ  
 き下女のみよおらす其家よて女房勢ひわれば女房の顔色よついで廻り隠居  
 威勢が能れば隠居の眼鏡の蔭から共よ睨む様も輕薄者が何人の眼もチラ  
 付く程世の中よ多い



か龜は案内しつゝ障子を開て内へ入れば小辰の火鉢も煙をついて其手で額を押へ氣分が悪いよと云さうか顔目腐もか龜の顔の見あがら何とも云ぬ不平面

か龜も流石も手持さく小辰さん親父さんのお留守かへと云へば小辰の溜息を吐き此方を向しが用もさき火鉢を覗いて居る 龜留守のえ小辰さんと云へば目腐が親方ですか親方のお留守ですよと云し儘づいと立臺所へ行く

か龜は少時の立往生早くも様子を探りければ負ぬ氣の女とて委細措かず火鉢の傍にムツと坐り小辰の顔をじつと見るも眼の向も火鉢の中へ落して眉間から頬のあたり不平の氣の皮肉を破りて出んとするか何とも云ぬ様も膨れ火箸をもて何の字とも付す灰も奮たり消たりせる様のか龜の眼も喰付たい程憎し

龜小辰さん何かしだへ小辰の無言よて知らぬ顔 龜お前大層御立腹だね

小辰の鳥渡か龜の顔を見てまた下を向き左様さ腹も立し欺かされるし顔も泥の塗れるし種々病氣も取付れたもんだから人と口を利のも癩も觸るのさ 龜へえさうかねえお前は屹度私の方の金が間違つたからそれ其様事をお云だらうが……小辰のフ、ンと笑ひて私しや其様事は知らさいよ用があるから親父さんよか云ひあさいわ、厭さ心持だ如此晩の早寐しやうと云つゝ奥の間へツイと入ぬ

第十九回

か龜の小辰から顔も火の出る様も目も會ひ勘兵衛も逢て充分文句も列べ彼か茶碗を謝罪せねば胸が治まらぬと富士屋を出ると其儘つひ近所の湯屋へ駆付け柳湯と書たる格子戸の障子の破れも顔押めて勘兵衛や見ゆると差覗







てお出よ確乎聞て来るんだよと小女を富士屋は偷聴も遣はし其身の我家へ急歩けり

勘其様も怒つたつて仕様がねねよお前も小辰の気性の知つてるだらう乃公でせえ持餘すんだから謝罪せるかんで其やア迎も乃公の力もやア及ばねは 龜其でのお前さんの自分の娘を自由もやア出来ねえのかね 勘だつて其やア今小辰が稼人だらうちやアねえか今小辰は不貞られて見ねに其こそ仕様がねえよ其もお前と如此交情でせえさけりやア其や謝罪せもするがまア勘辨して居て貰ひてえさアと勘兵衛はお龜の顔色を窺ひつゝ云ふお龜の懐中より紙入を出し其を開いて四五十枚もあらんかと思はるゝ紙幣の小口を見せ鈴木の方の出来あかつたけれど一旦約束したんだから店の代物を伊勢屋は預けてせめては五十圓も何したらと思つて今態々持て行くと彼始末だらうちやアさいかね私の怒るの無理なからうと思ふよと云止てまた紙入を懐中しぬ

勘そりや實も済ねねのさ其様事たア知らねへから小辰か一圓も短氣を起たのだから能話して謝罪せる事よ仕様よ實も済ねねと手の裏返す勘兵衛が輕薄追従もお龜の惚し身の其程も思はねど一圓も小辰を怒り居れば何能よ謝罪せて貰はさいでも能よ其代りもやアお前を止て置て歸宅さいからサウ思つてお出でと云ふを 勘其ぢやアまた圓く行ねえからまア乃公も任せて貰ひてえ 龜いゝに今夜兎も角も歸宅ねえよと争ふ所へ小女は歸り來りぬ

龜聞て來たかへ何と云て居たね悪く云てただらう 小いゝえ何とも……  
龜「虚言をお吐き悪く云てない事があるもんかも一度行て今度の確乎聞てお出で

第二十回

一風吹ての後の枯葉去り病葉辭して相頭新樹の観あり鈴木家よての狐屋の小玉才の助が妻とありてお秋と呼れし後お秋の母お龜の爲よ夫妻の間の愛



の泉の未濁り波起ぬべく見えしが暴風起りて怒濤天を撃ち一たび過し跡  
 白波の消て縁の浪程かよ漾々とし一望鏡の如くありぬ  
 お秋の親とて唯一人の母親の其心より招きしとの云ながら母娘顔をも合  
 せ難く途又路人の思ひをさす事口惜くも亦快よからず斯る事もあり行しも  
 斯あるべき因果あらんと思沈みての思返し年月を過し行く心の中こそ哀れ  
 され  
 心よ一つの憂はありながら良人才之助の近き頃また官を進められてます  
 く世よ知らるゝと到りし妻の身として之勝りし喜びさく此上の玉と  
 もあらん子の生れよかしと思ふのみを指屈りて數ふるこそよさかしき程尙  
 樂しけれ  
 お秋の良人よ向ひて云んとしての云出悪き様して垂頭さながら此様事やし  
 たらお叱りを受るか知れませんが私何だか何も心の落付ぬ事が傍在ます  
 才之助の見返し改まつて何様か事知らぬが氣の濟ぬ事があるから遠慮さ  
 せ

くやすが能でのかいか 秋ハイさう仰有つて下さいますと尙々私もや上悪  
 う傍在ますので……と垂頭ながら顔を斜よして才之助の顔色を窺ひ決して  
 お恨やしますの何のどやすす譯での傍在ませんけれどもまた言葉を切る  
 才之助の手よ持し書を下よ置てお秋の方へ身に向變へ「何だ何があるのだ恨  
 む恨まぬと云ふ話の夫婦の間での面白からぬ事だ遠慮さく云が能でのかい  
 か 秋ハイ其からバヤしますが私ハ兄様のお家への参られませんで傍  
 在ますかと云了りてまた良人の顔をじつと見る  
 鈴木の前阪上がお秋を落籍せる時懸者さぶを妻よせずとも立派ある良家の  
 女を貰ひ受る方世の人も許し己れも心地悪思へば行末家よ風波の起らん事  
 を思はハ断然彼を却けよと幾度も諒たれと鈴木の小玉の色よ迷ひしのみあ  
 らず我家の妻として左まで我を辱しむる事あるべからず母こそ面白から  
 ぬ者されども此ハ又仕方あらんと兄の同意を求めず才之助が一生の苦樂を  
 共よする妻の事ハ才之助の了管よ任せ玉へと終よ小玉を妻よさよとせしよ



坂上も強ての止めず其方の心も任する上の己れも亦望あり我弟鈴木の嫁  
とし此坂上が世人へ對し羞しからずと思ふ迄の余の小玉とやらへ面會せま  
じ其承知あらばと昔氣質の兄の言葉も鈴木も其は餘りありと思ひたれど頑  
固一方の兄の事今説も詮あし小玉も其程の器量あらば今争はずとも事あ  
りと坂上も鈴木も面白からず小玉を迎へもし迎させもしたれば小玉のお秋  
の今日まで鈴木の兄の坂上も其嫂も面會せし事あらざりき  
其身を卑服者も扱はるゝ程人の心も口惜き事もあるまじさればお秋の鈴木  
へ來りし初第一も會ねばあらぬ良人の兄も嫂も會ふ事叶はざりし故此  
の不思議と良人尋ねれば兄の昔氣質の頑固者其方が商賣をせし者故確と  
見定めし上からでの會じと云ふ其を兎角云たりとて今の詮あければ其方も  
商賣せし者も似合すと賞られ早く兄も會時の來る様あすこそ專一されとの  
事も斯る頑固の兄様また親父様の難題の此迄見聞せし事あり此も其等の事  
と云へば身をせめて兄様方よか目も掛るの外あしと其心掛のありながら母

の事より良人よさへ顔合するも羞かしければ死て坂上も會ん事あと思ひも  
寄らずと打捨てしが母の方も片付き其身も此と思ふ羞かしき事あければ今  
の會せて下されても又手こそ出せしされ  
鈴木も慰め兼たれど今少時辛棒せよ此頃も兄も逢て兎も角もあすべしとお  
秋も言葉を開かせず四五日過て退省掛る飯田町の坂上を尋ねたるも幸ひ兄  
も在宅ありとの事も案内しつゝ打通りぬ

第二十一回

父子兄弟の情の動し難く人の其間も突入て之を離さん事の難きが上も難  
きぞかし去かから此父子兄弟の情も動かされて甚だしき反目するも到ら  
しむるの夫婦の情と云曲者ありお秋が母を捨しも鈴木を捨難き情の満たれ  
ばあるべしされば鈴木も其兄坂上との間もお秋の事ありてより鈴木の心の  
底より兄を恨むものあらぬと商賣をせしお秋ありとて兄の顔も洗を塗る様  
ある女をわれ不肖さればとて迎へんやわれも確と見定めし處あればこそわ



が妻もあすあれざるを我を信する事出来難く我妻とありたればとて其身  
 見定めし上あらでの面會せじとの餘り又情を知らざる人かあど不平の心常  
 よりあり阪上も亦鈴木は不快の念あり父又次での兄の言葉を一婦人の爲に  
 退けし才之助が心こそ心得ね其身の後來を思へばこそ諫をもするあれそれ  
 を好意との思はず終る藝者を引入し事才之助の兎もあれ此坂上が亡父上  
 へ譯あしと互に思ふ所の違ぬたればお秋鈴木が妻とありて後阪上の鈴木  
 へ來りし事亦才之助の阪上の門を跨がざるよりあらねど自然疎遠あり行  
 きたり

日々櫻合て喧嘩の間斷なき兄弟も家を別ちて相會事少くあるか國と國と  
 相隔り容易會事あらずあれは朝又夕又互の安否を氣遣ひ他人の死を聞ても  
 兄弟近くは在ねば万一の時より如何もせんあを確執の確執として相思ふの  
 情の却つて熱すべし阪上も鈴木が我言葉を用ぬざりしに不快らねど此頃の  
 様も疎遠くありての鈴木は如何もせしお秋とやらに如何弟の事るぞあど

流石心も掛りて今の不平の心もあく今度違ふは打解し話もすべしお秋とや  
 らんも思ひしと似ず久助より聞し所堀出し物ありしあを思ひ居ける處へ鈴  
 木才之助が來りしと云ふ喜びて坐敷への請じたりけり

坂久しく逢んでのさいか今日の能く尋ねて呉れたいや段々年を老と兎角  
 兄弟が戀しい様も心持がしてあハハハ、鈴、それの才之助も同様に  
 在ます同候たいくと思ひまがら多用も紛れて大きき無沙汰を致しまし  
 た坂「イヤ其のお互だ何だの家内も變つた事なさいかの鈴「ハハ難有う  
 在ますお姉様も多變りの御在ますまひ坂「今日の悴を運て何處ぞへ參つた  
 と見えて今朝から留守よした様だ獨り淋しい處へ能く來て下さつた此から  
 何だか少し近く遊びよ來る様よしてのお前の方でも此迄の事……兄  
 弟の争そひあつた他人との確執との違ふし些とお秋も遊びよよこす様よ  
 ア才之助些一處も出掛て來が好でなさいかといと打解て笑を合つ、云出し







今日の禮を云せて取散したればお出ありても却つて失禮な事さもありても  
 濟ませぬ片付し上りて私より伺ひます何かのお禮に其時厚く申上りますと  
 云せ遣し心の中の樂しさ人の妻とありでからの初めてあり  
 幸ひの日曜されバ鈴木も共々指圖して大畧に片付し日暮頃「何だ少しの片  
 付たかおと入来りしに阪上一郎あり鈴木の迎へて「ハイお蔭様で大概の片付  
 ました今日又種々多心配を下さりました難有ふ存じますお姉様も宜敷  
 願ひます 坂「イヤ何も行届かんでお絹も氣を揉で居つたが彦六がまだ彼通  
 りの酒はあしで却つて邪魔さつてのど差控へて居つた様ぢや 鈴「どう致  
 しまして大層便利を得まして難有ふ滞在ましたお勝阪上のお兄様がお出  
 あつたとお秋を呼んで参れお勝「ハイと立て奥へ行く  
 お秋「下女の末を相手は眞筒葛籠さどより勝手道具さを探しける處へお勝  
 来り「アノ奥様阪上様の旦那様が入つしやいました 秋「オヤさうかいと立上  
 りしが「何様か方かねと小聲又問ハ 勝「アノ旦那様とお似遊ばしてお柔和さ

か方で滞在せずよ此處の處へと頰から臆の處を人指よて撫さがら「お掛がム  
 シヤ〜とありませすけれども 秋「さうかい初めてお目も掛るのよ此様打掛  
 での失禮だねと鳥渡と衣服を着更て何と多挨拶したら能からう  
 秋「お初はお眼通を致します私のお秋で滞在すとお秋の阪上の前も両手  
 を支て挨拶させバ阪上の両手を膝よして會釋さし「イヤ初めまして私の阪上  
 ぢやが此からまた親しく願はんければあらぬ今日ハ嘸お草臥でお多忙い處  
 を邪魔をしてのあらぬ「サア構はずと用をして下されと豫て思ひしとの違ぬ  
 て鬚髯のあれども柔和ある阪上の容貌言葉附よお秋の心も打喜び「いえもう  
 大概片付まして滞在す今日ハまた種々多心配を戴きまして難有ふ滞在ま  
 すお姉様から多丁寧多信切又仰有つて下さいまして私の實も此様又嬉し  
 い事ハ滞在ません何卒多兄様からも宜敷多願ひ申します 坂「イヤモウ一向  
 行届かんで 秋「いえ貴所何致しまして勝や彼方よお湯が沸てるだらう鳥渡  
 持てお出と茶道具を出し掛れば阪上の押止め「イヤまた明日家内と出直して



参らうイヤ大ききお邪魔を致したと立上るをまア貴所とお秋が止る中も早  
 出行く鈴木の後からお秋を送りて後 秋「おかくお柔和いお方でい滞るま  
 せんか 鈴「解りさへすれば彼通りだか一つ意も落ぬ事があるとかかく顔  
 面だ 秋「さうで滞りますかね其様御様子に些どもお見えささいませんね  
 次の日鈴木のお秋を伴ひ昨日の禮旁お秋をお絹も引合せを兼ねて阪上方へ到  
 りぬ阪上方より用意ありしと見えてお絹の玄關へ出迎へて「まア能く来て下  
 さつたサア此方へと坐敷へ請じ二女初対面の口上クドイ程あり  
 此處へ阪上も出来れば五歳もある彦六もチヨロくど母の傍も駆来り母ち  
 やんど云て其膝もだかるをお秋の見るより「オヤ坊ちやんで入つまやいます  
 か初めてお眼も掛りますねサ私も入つまやいました懐致しませうと云彦六  
 の人見知するもあらねど初対面を齒も噛て笑ふが如く笑はざるが如くお秋  
 を見ての母を見返り行たくもあり行たくもあしと云様あり  
 秋「サア入つまやいましたよと云バお絹の「何だね彦六の可笑ね早く叔母ちや

んも懐おしと膝より下せば下されし儘尙進みかねたりお秋の兩手を伸して  
 鳥渡懐上げ「重い事ね叔母ちやんの宅へ遊び入つまやいよと我子もても愛  
 する様も彦六の顔も我顔を寄せて愛する様お絹の仔細も見て思つたよりの  
 品もありしとやかさうで實意もありさうお人の本統も逢つて見かければ知  
 れかいものだ

第二十三回

事が一つ好方に向へば万事が好事ばかりお秋の母が苦勞がさくありてより  
 良人の官の進む家の我家が出来る會たいと思つた良人の兄嫂のお絹も會  
 た會て見れば思つた様も怖い兄でもさくお絹も亦好遇して呉て此からの姉  
 妹同様に頼みますると此方から頼まふと思ひ云ふと思つた事を先方から云  
 て呉れて勤者おがりと侮慢れて口惜事ばかりあらうと覺悟して居て却つて  
 斯云ふ事もありしさればお秋の唯嬉しくして「ア、これでお母さんさへ彼  
 様でもかかつたらそして彦さんの様も子供が出来て呉たらモウ外も望のきい



と恩ふあるべし  
 彦六を見度も彼様子が欲しいと鈴木が云へ私も欲う在ますとお秋も云ふ  
 欲しい〜と思ふ時よ却つて出来悪いと云理屈の赤いが待とあれバ一日も  
 千日の心持青い顔をして大赤腹をして一步毎息を切り病氣から来た病人  
 さら大醫も七を投さう赤妊婦を見ても其青い顔よ赤つて見たく彼様も息を  
 切て見たい様赤心持よある夜啼をする近所の子の啼聲も羨ましく新聞よ  
 拾兒の雜報を見ても其様無慈悲赤腹よ宿る子があるさら穴の辨天様も鬼子  
 母神様も此方融通して下さつたらと恨めしくも思ふ子が欲しい〜と思へ  
 神經の働で月經も見ぬ様も赤り腹も塊が出来来る事もあるものあれバお  
 秋も自分で自分を欺し醫者も見て貰つて其で何でも赤くて落胆した事も  
 幾度か「私よ子が赤いのよ違ぬ赤い此様よ心配しても出来赤いだから私  
 よ何しても子が赤いのだと思痴らしくお勝よ云ばナニ貴婦其様事が在  
 ますものか坂上様の奥様も五年目よ彦様がお出来遊バしたさうで在ます

から奥様もまだ一年バかしよしきやお成遊バさんので在ますもの屹度今  
 年にお出来遊バしますよ 秋「いえ私よの迎も出来赤いよ 勝「ナニ貴婦屹度  
 お出来遊バしますよ 秋「いえ屹度出来赤いよ 勝「い、えお出来遊バす 秋「  
 い、え出来赤い 勝「そんなら賭を致しませう 秋「ア、仕様ども 勝「出来ま  
 したら何を下さいます 秋「何でもお前の望の物を 勝「其で今召て入つし  
 やる滂帯を賜さいますか 秋「此様物あら容易赤いよ 勝「それでアノ緋無  
 垢のお胴着を頂戴致しますよ 秋「あ、好ども 勝「それからアノと云處へ才  
 之助ツト入来り大分面白い話だのと笑ひつゝ云ふお勝の顔を眞赤よして「ア  
 ラ何しませう旦那様聞て入しやつてと云へんお秋の鈴木も顔見合せて「は、  
 おは、神も佛もお勝が怒張の願掛を納受玉ひけんお秋の月水も見赤くあ  
 り腹よ堅い玉が宿つて今度の如何す神經の働きでも赤さう赤醫者よ診せ  
 れバ今度はサウらしいと云ひ産婆よ聞バ此が間違つて何致しませうモウ確  
 よ三月よお赤り遊バしますと自分が經驗のある事から何家の奥様の斯で



在まして夫から何方様の斯で滞在しましたと種々奇例を引て七月八月の先産時の心得迄も行き届き過る程云聞するよお秋の嬉しくてあらず其日鈴木が役所から歸宅て産婆の何と云つたと開れし時の肩身が廣くあつた様も心持と少しの鼻白悪い様も心持とチャンボンもあつて話をすれば鈴木も大喜びよ喜び何よしても喜ばしい事ぢやそれあらば其積よして体を大切よせんていかに可う食事其外の心得を醫者も産婆も能尋ねて能か充分よ注意せんければあらぬぞ何よしても喜ばしい事ぢやと其夜の二合の量の晩酌を三合よして老松の謡曲よ手拍子とるも親の心ありけり

彼様事よあつて今よ音信不通縁の切た事よあつて居れど嬉しいよつけ悲しいよつけお秋の心よ思出さるゝの母のお龜の事あり良人の方よ祖父様祖母様は赤い私の方よ唯一人の祖母様と云れぬべからぬお母さんが音信もせず音信もされぬ身よあつて今よ何處よお出か柳橋の店の疾よ他人よ譲つたどの話の聞たが私が今此様身よあつた事を知らせたら肉身の孫の出来る事

定めて嬉しくもあらうのよ音信も出来ぬどの情かい本統よ恨めしいお母さんだど行末迄も思遣れべ覺えず涙ぐまるゝこそ是非なけれ

第二十四回

初産の女第一の大役如何か斯かと案じたりしよ案じるよりの産が安く前夜より夕刻迄の苦痛よ障子の算の見えさくあること僅か一度よて兒の容易と生れたりお秋の喜びの云も更あり鈴木も其日の退省を早めて書齋よ立たり居たりして居る中よ我兒の聲の聞初めの夢の心地産所よ行て様子を見ればお秋も宛然眠りし様よ眼を閉たり鈴お秋先づ目出度かつたぞお秋の少し眼を開て良人の顔を見てニツと打笑しが心の中よ今一人斯る時の世話を

も受け喜ばれもし喜ばせもしたき人あるべし

豫ての男子をどの希望ありしよ産れし女の兒あれと物事云まよ自由あらば世の中よ望と云ふ事なくとも済むべしお秋の女兒でと堅き約束をあしあがら其よ背いて面目さいと云ぬばかりの様をすれば女兒とて何の我兒



是非があるものぞ此れもあるものをと鈴木が慰むればモウ彼様苦し事  
 の修免で滞在すよさう幾人も出来たら私に死んで仕舞ませうと打笑み答  
 ふれば鈴木も口を開いて打笑ふ  
 七夜も法で名のお春と命じぬ春の若草の萌出る初めよて臆て花さく兒の末  
 を祝ふてあるべし枕直しも濟てお秋床を離るゝ様よされば此で先づ安心さ  
 りと鈴木の一家の勿論坂上の兄夫婦も打喜びて三十三日の食初も昨日よさ  
 りぬ

お秋の今度も坂上が信切ある世話を受たれば其が禮をも述べんと才之助も其  
 旨を断りし上彦六への土産物をも調へんと良人よ對ひて思ふ所を語れば其  
 のお前の勝手次第思ふ通りとするがよい先日から云ふと思つて居たが  
 前の堅く断念して居る様だから折もあらうと控えて居たが柳橋の其後何さつ  
 て居るかお前少しも知らんか  
 お秋の胸を刺るゝ様よ思へば態と左あらぬ様よて「左様で滞在す別段……」

氣も掛せせんから尋ねさせも致しませんが疾く店の閉ひまして何處へ参  
 りましたか其から先の事の閉も致しませんが少しも存じませんと立派に  
 云切ながら氣遣へる心の中眼のうるみも知れたり  
 鈴柳橋を閉店た事乃公も知つて居るが其後の事少しも知れぬいか  
 秋「ハイあの……先日アノお勝が宿よ参りました時萬世橋で見掛たとかずし  
 て居りました 鈴フウ萬世橋でそして單身かど聞かれてお秋のハイと答え  
 て懐きしお春の顔を見る様して垂頭ぬ  
 お秋の母のお龜が柳橋の店を閉て何方へか行しし鈴木の玄關番の書生が態  
 々出掛行て見來り手柄顔よお勝よ語りしよりお秋才之助の耳へ入りし  
 り下女下男おと下々の者其家よて其人が能とされば滅法はめ立ていけぬ  
 となれば前後の見境もさく悪く云が常ありお龜のお秋の母あればお勝おと  
 も他人を悪く云様よの云ぬとお龜が眼鏡橋を若い男と歩行て居た其男の風  
 のニコニコでお龜の打掛の斯であつたと手よ持つて居た風呂敷の縮柄から



其古び加減迄も今見る様も物語るあり其時のお秋の辛さ泣たくもあり腹も立つお春の生れしよつけ生立よつけ母を想ふ念の愈よ迫りぬさるよ今良人から尋ねらるゝ事返事するさへ面目あき限りあり

秋「若い男と一處だつたさうで居ます 鈴さうか其の何よしても困つた事だお春の出来た事を聞いたら定めて見たくもあらうと思ふから考へた事もあるが其での先づモ少し見合せる事致さうかと思ふ云れて見ればお秋の力の抜し様も心持もすれど今の處詮方あければ何も致方が居ません私の坂上様も参つて参りますよと坐を立けり

其處へお勝來りて「坂上様の奥様と坊様が入つてまやいましたと取次ぐ 秋「オヤお姉様と彦ちやんがかへ今お伺ひ申さうかと思つて居た所だつたのよ早くお通し申すが能よどお秋のいそぐと出向へて坐敷又案内せんとすれば鳥渡來たのだからとお秋の居間又打通り「赤さんのお變りもありませんかとの尋ねよ「ハハ難有ふ居ます浮蔭様でと懐かしお春を見すればお絹の懐取

りおう大分重くなつてお、お、モウ笑へるねとあやすを彦六の傍から覗き「赤い赤兒だおア坊やあんかモウ赤くさいやと云ふをお秋の彦六の頬の紅を見て「彦ちやんも頬邊が赤いから矢張赤ちやんですね 彦何だい此や金花糖が粘着たんだい知らさいかやアイわアイ

第二十五回

年の早くも二年を過てお春の三歳もありぬ彦六も今年七歳とありたれば阪上と鈴木どの其家儘かに一町を隔てしのみあるよど日毎又鈴木に往來して一夜を明す事なけれと朝より夕までも叔父の家を離ぬ日さへあれは知ぬ者ハ鈴木の子よしてお春の兄あらんとも思ふゆりさればお秋も我子の如く愛して菓子あどの到來あれは必らず彦六の分として別よして置き一日來らざれば此方より持せ遣様あしけり我子を斯さるればお絹もお秋を憎く思はず我子を愛さるゝ事嬉しさよお春を愛するの心深く二日お春を見ざる事あれは迎よ還て歸す時よお春の口よの未だ甘しとも思はざる物迄も包



よして持せ遣さるお秋お絹の間斯の如くされば世間も能く廻いぢめと云争ひの阪上鈴木の妻の間よの起らざりき去さがる人の心の四六時中如何ある時も美しふばかりは奇り難く大事お用をさせる時氣分の悪き時お彦六も五月蠅はど附纏るればあゝ五月蠅子だ今日あたり遊びよ来て呉れぬ方有難と思ふ心の其時よ由てのお秋も起らざるもあらず彦さん今御用があるから少し彼方で遊んで下さいと追拂ひて見えぬ程の八字の皺のお秋の眉間へ出現する事もありけり

小兒の中にも神經の鋭き兒の能く大人の顔色を悟りてシヨケもし膨れもするありされば彦六もお秋の顔色の可笑と思ふ時よの長くの遊ばずして歸り行く

お絹もお秋を憎しどの思はず藝者をさせし女よしての實意もありさうで下卑た所もあく彦六も可愛がつて呉れる私よも禮を盡してあれかれ先づ自分の妹分よして他人よ笑はるゝ事もあいと他家の人へも堀出物で座りま

すと吹聴する程ありしが藝者であつたどの觀念の容易も除れされず若しお秋も些少の過失よてもあらんよの藝者よしての堀出し物と思ふ傍から以前が藝者からだどの考へも猶豫なく湧出るあり善事があれは先づ殊勝氣だと思はれ悪事があれは當然だと思ふゝ事一度歌女遊女とありし者の一生の損と思ふべし

今日の日曜よて鈴木よ一人の來客あり才之助が同僚の一人よ何家よても悪酒の長尻と云はあは免だど妻君の第二よして侍女下女よ高も無鼻を撮まする男あり朝から來れぬ夜の十時頃あらで歸らず午後後されば夜の一時二時までもナヒリく飽すして飲むお秋の今日の日曜を幸ひよお勝を連れて佛參から遊山よ行く筈よて昨夜よりお勝も仕度させ置しされば此來客よのお秋よりもお勝が一番よ膨れ出し下女の末へ愚痴のヲラく本統よ仕様がよい切角お供が出來るともつてる處へ因果と遣て來て今晚も屹度十二時過るよ本統よ焦氣よ末本統よさうですぬ私よ早く寐られるから能け



れどもお勝さんのお氣の毒だ箒木でも立て遣りませうか 勝「無益く 彼人  
 又其様事が利様だと幾分か可愛いやねそれこそ無益な事だと不平を鳴せる  
 處へお秋來りて「私ハモウはつとして仕舞たよお勝お前少時行て居てお呉れ  
 私がまた直又交代から 勝「ハイ私ハモウのお客様のお顔を見ても厭ふお  
 りますよ 秋「まア其様事を云さいで早く行さいと旦那様の汚機嫌が悪いよ  
 勝「ハイと顔を皺めながら行く果して黄昏近くありたれど彼の客ハ歸らざ  
 ればお秋のお勝と顔を見合せて互の眉間ハ八字を見するそれ又生憎彦六  
 も午後から遊びよ來て居て五月蠅中をお秋又附纏りてはつとした處へ尙一  
 層はつとさせられお秋の顔色面白からぬ彦六ハ庭よ去りて枝も撓むバカ  
 りよ生たる石榴の實を竿を持來りて打落さんとするよ竿長く重ければ力足  
 らず勝と呼り末と叫び果ハ叔母ちやんくと助力を求むる事頻りありお  
 秋ハ五月蠅と思ひおがら末よお春を懐せて彦六よ力を添んと様よ出し時座  
 敷より縁傳ひよ來りしお勝「奥様本統よ五月蠅涉在ますね 秋「此様時や本

統よ困るよ早く歸つて呉れば能のよと二人ハ彦六の方を眺めつゝ云しを彦  
 六ハシツと見返りしが竿を投捨てアいと駈出し我家へ歸りしが母よ聞れた  
 ら譯を云よりも前よわアつと泣出めり

第二十六回

秋も末よありて木々の梢色づき海晏寺灘の川の時節とされバ團子坂染井お  
 菊の盛とありぬ黄菊白菊の外よハと古人ハ詠じたるよ此頃ハ種々の人巧  
 を加へて菊を見するよりの船八が細工を旨とすれば觀者も菊の美さを云す  
 して菊五郎のお菊團十郎の鐵山を見しかと錦繪の大きいのを見る心持よて  
 見よハゆくあり

今年も大仕掛大人形の菊細工ありと新聞の廣告より辻々の貼紙八百八町の  
 理髮店よ其噂高ければ鈴木ハお秋お勝よ催され坂上のお絹と彦六とを誘  
 引て團子坂より上野の動物園美術會見よとて午前の十時頃より家を出けり  
 留守よハ玄關番の書生山田と下女の末と二人毎時ハ新様時のお供よハお勝



又勝を取れて聊か不平なきよあらねば末の何時もお勝さんばかり羨ましい  
 私も多少し鼻が高かつたら年が何歳違ぬのしまいし此様もお釜の傍は煩ば  
 つてばかりの居らぬと云へば山田も我輩だつてさうだ、使があるどあると  
 久助が居るくあつてからは夜の十時からでも芝あたり迄ノコノ行かけれ  
 ばならぬ其よお勝さんの先生と奥さんの前を甘く胡麻をすつて居れば日  
 曜の遊山よの屹度お供僕は何時もお留守きぞとの勞ある者を賞するの道よ  
 外れて居るよ瓦煎餅のお土産位ぢや馬鹿くしいと其程々の不平を述べて遊  
 飯よの二人醜金よて天獄羅をウント食込で久し振て脂づいた様も心持がす  
 ると舌替すりをあすこそ多くの奉公人根生あるべし  
 日も暮よ近付たり早一同帰宅あるべき時刻と末の急よ火鉢の湯を氣をつけ  
 座敷の手爐よ火を加ぐあど、俄よ忙しい心持が仕出す山田の門の前よ立つ  
 て小石川橋の方を眺めまだ姿が見ぬぬと獨語き居る時傍より山田さんと聲  
 を掛る者あり山田の何人かと振返れば一人の老婆が小腰を屈めて笑掛しよ

予能く見れば柳橋のお龜が以前どの似付ぬ打掛して自分よ物問とするあり  
 けり狸婆來やがつかさと思ひあがらやアと云へばお龜の微笑み山田さんお  
 秋の今日宅で滞在まあか、山奥さんですか奥さんのお留守です、龜留守何  
 處へ参りました、山さうです先生や坂上さんの奥さんと團子坂へお出でし  
 たお勝がお供で嬢ちゃんを懐て彦六さんも一處です僕と末どがお留守居  
 をして居るのです、龜さうで滞在ですか貴所のお留守で苦勞様で滞在ま  
 すね嬢ちゃん云ののお秋の何で滞在ですか、山さうです奥さんのお春さ  
 んと云ふ名です、龜さうで滞在ですかとお龜の少時考へしがまだ急よの歸  
 りますまいか、山さうですモウ口が暮ますからお歸宅だらうと僕に斯して  
 待て居るのです、龜其でお秋が歸りますまで少時待て居りませうと門を  
 入らんとするを山田の立塞りて不可いのです門から中へお遣入あさつて困  
 ります僕がお留守を預て居るからお入す事なかりませぬと屹度云へばお  
 龜の足を止めて山田の顔を見る



魚山田さんお前さんの變事をお云ふね何故私が入つての不可のだ 山何故でも不可い 龜自分の娘の家へ入るのよ何が悪いのだね 山悪いから悪いと云のです奥さんを娘とお云さるが奥さんと縁を切て此お家よ足踏の出来さい人です僕がお留守を預つて居るから其様人を入れる事の出来さい 龜生意氣な事をお云でさい何構ふものか入さいと云ても入るからさう思つてお呉と推して入らんとするを山田の怒りて推出し門を閉して小門の前よ立塞かれお龜の山田を屹度眺みて「食客の磯野郎め覺えて居やがれと云捨て九段の方へ立去りぬ

夜よ入りて鈴木夫婦の坂上の前よてお絹彦六よ袂を別ち一同立歸りぬお勝が其日の土産ありと煎餅を紙よ包みて玄關へ來りて山田よ興ふる時山田のお勝よ對ひてお龜が來りてコレ〜ありと物語ればお勝の眼を見張りてオヤさうと呆れたりしが能く家よ入さかつたのねと山田が追返せしを打喜び鈴木が寐よ附し後お秋へ斯々ありし由を密話しよお秋の驚きと悲しみとよ

茫然として言葉出ず懸てハラ〜と涙を落しぬ

第二十七回

手よ握つた物の様よ思ひし金の行違ひよりお龜の富士屋の小辰よ辱しめられ小辰の親爺の勘兵衛を責て小辰を謝罪せんとしたれを甘く勘兵衛よ説れて小辰よ御事事を云れ損腹の立損とありて其の其儘よ濟しけり其上龜まで我を張女されバ商賣物を質入して調達し五十圓を捨るが如く小辰の前へ擲出して約束の約束道道のあい金を私の手よ持て居るも心外されバ是非納て置て貰ひたいと五十と百の金よの目も掛ぬと云はぬばかりの容體を見すれば小辰もムツとしたれを勘兵衛が目ませよ此處の折て置が徳と俄然變る普薩顔お母さんよ其様よ云はれると私や質よ困つちまうよ彼時の如何かし居て居て心持が悪くつて變だつたからお母さん本統よ勘忍してお呉さいよねえ親爺さんお前さんからもお母さんよ謝罪してお呉よと親爺の顔を見て困つた様お顔をして垂頭たが面の皮を一枚剝たら目皆下り口尻上りて頬邊よ



藤の十ばかりの見ゆるあるべし  
 勘小辰が彼様云ふからお前も腹立たうが何卒勘辨して遣て呉ねえと  
 充分お龜の顔を立し云廻もお龜のいどいど鷹揚らしく何其様事ア何でも能よ  
 何時迄も其様事をグズグズ云やアしねによ其金せに納めて呉れりやア私の  
 氣が済と云ものだ小辰さん遠慮しねにで納てお置よ辰だつてねえ親父さ  
 ん其様事の出來おいの勘さうさまアお預けよしといたら能からう入用  
 時があつたら其時やアまた借るとして「私や其様事ア嫌えだつて不  
 用さやア溝と捨る丈の事さど金故よ其身の娘の涙を絞りあがら鷹芥程も  
 思はざる真似する事斯る人物いど多くして斯る人物の世も多きこそ果敢  
 ちけれ  
 父娘の顔見合せ眼と眼は云れぬ意味を見はし互の心も首肯おひ勘彼様  
 よ云ひおさるから小辰仕方がねえお前預かつとさア能ひぢやアあいか辰  
 ぢやアお母さん済あいけれどもお借すして置きませうと云へばお龜の腹  
 争ひ勝つて大手柄でも見はせし如く揚々として烟草を輪と吹く顔の小辰よ  
 の嘸や可笑くありけん  
 此からの目腐の下女もお龜の足音を聞ても飛出して格子戸を開て隠居様  
 くと下も置ぬあしらひ小辰もお龜を長火鉢の上坐よ坐らせる様よあし  
 勘兵衛も亦女房として一際位高き者よして置ばお龜の愈よ増長して斯して  
 置の當然だおれの富士屋の氏神様の様もものだおれを粗末よすりやア此  
 處の家は眞黒闇だぞ小辰も親よして孝行をするが能い勘兵衛さんも大風お  
 事ア云ねに義理だ湯屋も行くも髮結どの世間話も屹度之を云出しての  
 自慢し富士屋の新道も入る時よの片幅が廣過て一間半の新道も樂よの通り  
 されぬ  
 お龜の終よ小問物の店を仕舞て富士屋に入込し時よも百圓近くの金を親娘  
 の者よ渡したりき其よて一人のお酌を抱えて小辰の辰次と名を更へお酌を  
 二代目小辰よして廣めをせしよ二人ども存外よ繁昌して流行妓の中よ數へ

争ひ勝つて大手柄でも見はせし如く揚々として烟草を輪と吹く顔の小辰よ  
 の嘸や可笑くありけん  
 此からの目腐の下女もお龜の足音を聞ても飛出して格子戸を開て隠居様  
 くと下も置ぬあしらひ小辰もお龜を長火鉢の上坐よ坐らせる様よあし  
 勘兵衛も亦女房として一際位高き者よして置ばお龜の愈よ増長して斯して  
 置の當然だおれの富士屋の氏神様の様もものだおれを粗末よすりやア此  
 處の家は眞黒闇だぞ小辰も親よして孝行をするが能い勘兵衛さんも大風お  
 事ア云ねに義理だ湯屋も行くも髮結どの世間話も屹度之を云出しての  
 自慢し富士屋の新道も入る時よの片幅が廣過て一間半の新道も樂よの通り  
 されぬ  
 お龜の終よ小問物の店を仕舞て富士屋に入込し時よも百圓近くの金を親娘  
 の者よ渡したりき其よて一人のお酌を抱えて小辰の辰次と名を更へお酌を  
 二代目小辰よして廣めをせしよ二人ども存外よ繁昌して流行妓の中よ數へ



らるゝもど少時の波風も起らざりき  
 貨財の爲は集まる者如何でか共久しくあるべき六圓の米が七圓よかつて  
 も直様苦情の起る筈あり加之お龜の氏神風を吹せて勘兵衛との小鍋立も随  
 分贅澤な事も云ひ小遣錢もパツ／＼と遣方あるよを辰次の折を親爺も對ひ  
 て愚痴をこぼす此愚痴が親爺へばかりよて済む中の勘兵衛がまア／＼と押  
 へてまだしも折合てゆけどもお龜も厭々顔を見せツンケンとする氣勢が見  
 ね出してのお龜の方でも黙つて居す外の事又托けて思知らずお龜も當こ  
 すり新聞の雜報も不人情な記事があれバ大きい聲をして讀む其度毎辰次  
 もお龜もあたれバ目腐の下女も天氣豫報を見て天氣もなりさうか風向を  
 考へて居る

第二十八回

目腐の下女お花は空模様を見て天氣もなりさうか方を考へし氏神風の  
 曇りまたの雨辰次風晴天と見定めが付たれば辰次の顔色次第目腐の氣が

付て居ても付ぬ真似をしての万事もお龜を不自由がらすお龜の斯る事も別  
 して腹を立女されバ目腐を眼の敵として小言を腦天から打掛る打掛れば黙  
 つて居す隙子一重の臺所から聞える様も花風病がさぞとお龜の云はず  
 してお龜も當る様ある事を云ふそれを又怒れば粗想の様としてお龜の茶碗  
 を三日も續けて破す此様女の家の不経済だ直ぐ解雇して仕舞とお龜が云出  
 せば辰次が破さうと思つて破すものかい此迄三年も使つた者を此位も事  
 で暇を遣さら一月と居付女のかい私が辛棒さへすれば能のた何も出す程の  
 罪のかいお花其積で何時迄もお出でとお龜が理窟の好時よ辰次も一言も  
 打消れて不平の腦天の禿から火焔を吹出さうよあり朝起るから夜寝よつ  
 く迄富士屋の鳴動して明日をも待す破裂せんす氣勢あり  
 中よ立て困るの勘兵衛一方の眞實の我娘片方の其身の情婦として數百金を  
 其手より出させし義理もある一家の中の稼人はお氣の強きものお花は眞  
 頼から親の威光を振翳せば娘を食物として親もかいものだ其程親風が吹せ



たいから勝手よ吹せるが能のさ親風よ中られて私の風を感ましたと不貞癡をして一日位飯も喰ぬお龜よ我慢をして呉ると頼めば私の此家へ奉公よ來さいよ目腐よ迄馬鹿よされてたまるものかね此家で隠居様よして辰次よ三度くお給仕をさせても能んだお前さん其程自分の娘が怖いから私と一處よ別よ家を持て能ぢやアさいかねお秋と喧嘩をした時商賣品を曲たのが五十圓さ其から店を仕舞た時百圓さ其百圓で小辰を抱たんだから別よ家を持て小辰よ稼がせりやアお前さんと私の口は左團扇は何もお姫様の嫌機を迎て豆腐の多用よ世辭をつかはさくつても樂々と遣てけらアねお姫様のお腕前だもの百や二百の金ア何でもねねのさ其前の更衣の時も五十圓さ此の冥加金として奉納すらアね小辰と先般の五十圓せは下渡よさりやアそれでお禮を申して此處を出様と云んだから理窟も何も有りやアしさいよと云ふ今更其様事を云たつてさうされるものでもさし怒らねねで風波不起やうよして呉ねねと勸兵衛が云へば其が出来さいから別家やうと云の

だねお前さんの爲よお秋との喧嘩するし金の飾込し店の仕舞し家もさし喰もしさい様よしでいて今更其様事ハ云へねに義理だよ其様は娘ばかりが可愛い様も不實さ人あらまた其様よ私も考へがあるよ手前と別れると云てお呉さアお云まさまさかサウハ云はれまいとお龜が叫立てる聲を一間の中よ辰次が鼻よて笑ひお、騒々しい聲兒ばかり住でやア仕舞し安達原の孤屋ぢやアさいよ  
お龜の聞くより何だ孤屋ぢやアねねと安達原ぢやアあるゆねが柳橋の藝者屋新道よ辰橋の人喰鬼が住でるから不思議だ色の生白い辰次と云ふ人喰鬼が住でるのだ辰何とお云だ人喰鬼だア誰の事だねと今朝より風の心地と寐て居りし辰次立出ればお龜の冷笑つて人喰鬼たアお前の事さ人喰鬼よ違にねねから人喰鬼と云のだ其が何した辰能よ私が人喰鬼から人喰鬼で能から人喰鬼の家よ居さくつても能だらう口でこそ別家るとか出で行とか云たつて出行家があるぢやアさいかねモウ此家へ來てから足掛二年よあるよ



水食上人だつて身よつく物よのお金が入よ朝腹から贅澤三味の我儘をしと  
 いて買食の錢迄出させといて百圓や五十圓が何時迄あるとお思ひだ小辰と  
 五十圓が貰ひてえどの能其様事が云れるねと態と平氣を顔をして云へお龜  
 の眞紅もさう何だ宿おしだど行うと思へ何時でも行るんだ無禮文の金だ  
 から返さねねおら返さねねで取様よして取て見せらア此様家よ一時でも居  
 られるものか親爺さんお前さん眞逆辰次の様お心でもあるめね此様家よ  
 やア居ねねからサア私と一處よお出と云へども勘兵衛の腕組せしま、思案  
 の体

辰何出て行るものか親爺さんを引張出して人質を取る積だらうが其様馬  
 鹿も親爺さんの富士屋よは居ませんから本統よお氣の毒様だと目腐も眼を  
 見合せて互よ冷笑ふのみ心配さうお顔をして泣さうよあつて居るのお酌の  
 小辰ばかり

龜出て行ねねで何するものか親爺さんお前さんも來さいのかね其から其

で能ひと云捨て格子戸ガラリと開て家外へ出しか勘兵衛が支るを力草表面  
 ばかりの辨慶草あり、  
 辰次のお龜が家外へ出しを見て「お花犬でも入ると汚あいから格子をしめて  
 お出と命すればはいと答へて閉んとする時お龜が再び入らんとするを目腐  
 のヒンヤリと閉て確乎と押へ姉さん早く來て下さいよう

第二十九回

お龜の一旦の發怒よ家外へ飛出しが眞實立去るべき我家あるよあらず斯し  
 たから第一勘兵衛が支るの知切た事あり人喰鬼とててもよも黙つて見て居  
 まし義理も彼方より説言云ふからんと多寡を括りて家外へ駈出せし勘  
 兵衛の腕を組て思案せし顔をわけて見しのみ辰次の自分を犬扱ひよして目  
 腐も格子戸を閉よと命じ此で本統よ厄介拂をしたと云ふお龜の此様よ汝こ  
 そ義理を知らぬ犬畜生の生白ひ顔よ喰付ても此沸騰る胸を冷さんと再び  
 家内よ入らんとする時目腐の早くも格子戸を内より閉めて兩手よて確と押



へか龜が開んどするよ敵し難けれ辰次を見返りて姉さん早く来て下さい早くよう姉さんと泣聲を出すお龜の尙更口惜く目腐の何故開ね開きければ斯するぞと目腐が押へし指の格子より外へ出しを肉も裂よと引掻く目腐の痛やと叫びて手を放してまたもや姉さんと呼ぶ中お龜の力を極めて格子戸を引開けおはや家内へ入らんとす

辰次の早くも火鉢を離れて目腐を助力んと此時格子の傍よりお龜が片足家内へ入んとする胸板を骨も砕とけよリンと突くお龜の尙も格子の一端を握りながら家外へ尻餅搦を辰次の會釋なく格子戸ヒツシヤリ閉すお龜の打切れしかと思ふ程指を扱まれアツと叫べ辰次の格子戸は鍵を掛てお花お出と内へ入て障子を閉し静まり返つて居たりけり

往來の狭し四隣の軒を列べたり此騒動を聞付て皆々家外へ立出て愈よ始まつたよと口よこそ出さぬ顔と顔と首肯合てお龜が起上りて何とするぞと見物なす

サアおいらを殺すなら殺せ殺される迄の此處を動かねば人喰鬼め殺さねえか恩を知らねえ犬畜生め天道様がお出さるぞ乃公を欺して金を取やアがつて今よあつて斯様よして其で世間が渡れりやア神も佛もねえ世だ賢親も何も不用のだ勘兵衛さん此處を開て呉ねえ開ねえののか前も犬畜生と同腹よあつて私を欺したのだねさうであければ開てお呉れ開かけりやさうだ款子でかいらを欺しやアがつたあサア開ねえか何故開ねえのぞ早く開ねえのかと格子戸を蹴る打く引破らんとし暴れあれて手よつくべき様もあし家内よ勘兵衛と辰次の聲よて何やらん云合居れきもお龜の聲よ打消れて家外への聞えずそれでの義理が濟めえと云の勘兵衛義理も何もあひよお前さん其様よ彼婆さんが好から勝手よするが能やねと辰次の争ふ聲のみ折々よ漏れればお龜の唯此聲を目的よして尙も金の事を土臺よして鼓舌る丈怒鳴り暴れるだけ暴れる

四隣の者も仲裁せん心いあれどもお龜と辰次の日頃の氣質い知りたり氷炭



相容ざる物を押付置も再び事の起らん知れたり其時引張出されての溜らぬと進んで仲裁をせんとあすものもあく辰次さんが義理も彼様真似のされぬ筈と云ふ者あれバ彼お婆さんも能くぬいよ彼様者が居ちやア辰次さんも稼ぐも張合があからうと云ふ者もあるナニ其よりも勘兵衛さんが一番悪いのだと三人三人の評判もまた口尖をどがらすものもありけり  
 馳て巡査来りて説諭しけれど富士屋の辰次の家としてお龜が居るべき筈あらすお龜が金を出したりと云ふ其の無證文ある上も二年此家も寄食て居りしどの事も筋を立て行バお龜の方も七分の弱味あり巡査も辰次を強る譯もゆかねバ示談もせよとて立去る勘兵衛の何時か裏口より抜出て家もあらねバお龜の全く味方を失いて再び辰次と舌戦せし上斯様家も二度と足踏をするものかと云を拾登辭もして富士屋を出たりき  
 二三日の知つて居る家の世話もあれる十日廿日とあれば我子の家でさへ居悪い物勘兵衛も會て相談もさんと思へど勘兵衛の逃廻りて一度も會事も

第三十回

り難ければお龜の今更も非を悔れど詮さしされバとて鈴木へのゆかれず思案も餘つて雇婆とありしが主人の酒を盗飲して太平樂を列べての解雇され別當も予も胸を据ての退出される  
 今の万計盡きて鈴木を頼るの外一策なくお秋も會て口説たら真逆も他人扱ひのせまいと又手こそ飯田町の鈴木が家への來りしあれ  
 一室の四方は風を防がん爲めも密閉れたれば陰々として空氣異臭を帯び此室も入る者の頭を押へられたらん思ひあり壁も寄て設けし寢具の上も我体一箇を自由からずと俯伏もして枕も支へし頭のみ此方を向けたるの鈴木才之助が病臥るありき鬚髯汚く生へ繁りて顔白蒼く黒く活氣も手足細りて肉盡き骨の皮も形を見はして千日食せざる老僧の枯稿たるもぞ似たりける  
 枕頭も寄添て薬瓶を振蕩し茶碗も飾して良人も進めんとし才之助が眼を閉し顔をツンと凝視て眼をうるませたるの秋も看病の勞色も見はて



徹夜の痛心の色蒼く眼の陥落しよ知られたり  
 秋所天お薬を召上りまし所天く〜と云へバ才之助の眼を細く開きてお秋の  
 顔をツツと見しが首肯て唇頭を動せし儘再眼を閉すの薬を飲んでてあるべ  
 しお秋の進み寄りて「サア進ますよと云ひつゝ、茶碗を唇頭よ寄すれバ才之助  
 の少しく頭をもだけて三口四口も僅か又嚥下しぬ  
 稍ありて才之助の屹度眼を開きてお秋の顔を見詰めたりしが何やらん思ふ  
 所ある様よまたもや眼を閉んとする時間を隔て、お春の泣聲す閉んとせし  
 眼を鈴木にまた開きて「春が泣て居る様ぢや早う行て遣が能いぞ 秋ハイ勝  
 が守をして居りますから宜敷滞在ます小水でも遣て居るので滞在ませう  
 才さうか其かれバよいが乃公が斯して居つての万事よ氣を揉であらうが強  
 く心配のせんが能ぞ幾分か昨日より快い方であるからと云へばお秋も嬉し  
 さう又莞爾として「其のまア嬉しい事で滞在ます幾分かでも快方だと伺ひ  
 ますと私も蘇生た様お心持が致します随分モウ斯様よお横臥てから三月よ

もありますから定めて焦慮いとお思ひなさいませうが何卒お氣を永くお春  
 も可哀想で滞在ますし此子もと云さして涙ぐめバ才之助の別て胸を裂る、  
 思ひ涙見せしと眼を閉きて少時の無言  
 才ハハハ、と笑ふ聲淋しく其だからお前の不可のぢや醫士が死ぬと申し  
 た譯でもおければ乃公が死たいと云もせまいお春の可愛い事も知つて居る  
 お前の落膽す事も知つて居る其腹の子が安産の上で豫て望で居る様よ男子  
 であれバ乃公も實よ安心するのぢや死ねと申ししても乃公の死おね積ぢや心  
 配するお決して心配するお餘り心配致すと胎兒よ害るぞと慰めつゝいと心  
 地よき顔を見すれどお秋の良人の心中の節あるを察し遣り泣じとすれど涙  
 が自由おならぬこそ詮なけれお秋の母の難儀を脱れし後の一片の雲の心よ掛  
 るのみよて人の世の春よ花吹く心地ありき良人才之助が度々の昇進よ加へ  
 てお春と云ふ可愛き娘も出来たもや妊娠て今度の左腹よて男子おらんか  
 ど心よ祝し居けるよ測らざる才之助が病氣よ俄然よ其身が名の秋よありて



桐の一葉の軒端を打も打驚かる、其上肺病の衰弱甚だしければ十の中七  
つまで取返しが附すとの醫士の内談もある事あれば今日や容體の變らん  
か明日や悲しき事と合はんかと良人の眼口の働さよも其都度心を痛むるの  
みありされば鈴木が死ぬとすすとも死ぬ事でのないさうと無理な笑顔を見  
する時のお秋の悲しさ寫すべき言葉を知らず  
才「お秋改めて云でのないが世の中は此の頼もあるかと思ふ事もまた其人  
よも乏しいものぢやが万一の時よの頃何様であらうとも頼め頼まるゝ  
者の親子兄弟の外よのさい乃公よの知つて居る通り兩親ともさいが坂上の  
兄が子供の代迄の頼みだお前の幸ひよお袋があるから乃公よ比ぶればまだ  
しも仕合お人だイヤさうの云ぬ者ぢや平生の何様あらうとも孫と云ふ可愛  
い物よの何様お心も折るが人間だ話さう〜と思ふて居つたが能い機會が  
あくて今日迄すさあんだが乃公の病氣で人手も掛るこそ幸ひ早速招ぶ事よ  
致しての如何ぢやと思ひも掛ぬ良人の言葉よお秋の胸を突れし如く息も窒

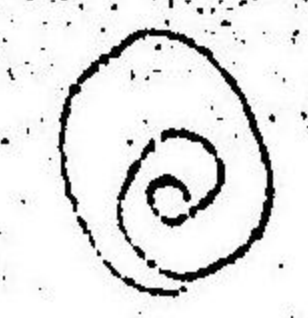
りて頼よの返事も出かねたり

秋「おの母をで滞在すかど問返せば才之助の心地よげよ首肯せば 秋「難  
有ふの御在ますが何所よ居りますか居所も知れませぬので 才「イヤさう隠  
くさんでも能い先日から度々見えられてもお前の一度も合んさうぢやが昨  
夜も見えたと云ふから今晚か明晩か見えたら屹度乃公よ知らせるが能いぞ  
と云ふよお秋の扱の良人も御存じありしか蓋かしやと垂頭で言葉おし

第三十一回

鈴「お、お母さんか能く尋ねて下さつたど枕よ支へかねし頭を掻げ會釋す  
る鈴木の顔の淋しさ此世よあらん早や四五日の中と見えたりお龜の鈴木  
病よ臥せりとは聞かから斯までよあるまじと思ひたりしよ此様を見ての  
流石よ心地よしと思はずそいろ憐れよありてお秋の面憂れたるも不便お  
りとお龜の頼よの言葉も出ず叩頭をせしま、躊躇たり  
此科お悪いどの存じませず本統よ涉無法沙を致しまして濟みませぬね





お秋鳥渡お前から知らせてお呉だど能のよとお秋よの知らすべき道からず  
 其身も斯く云得べき事情あらぬ其場の体裁つくらんとて云はれぬ事をも  
 口よするの斯る者の常習あり  
 お秋の母の言葉を聞くよ浅間しよの一入よて彼様事云はずとも能きよ  
 尙ほ我よ術なき思させんとてかど良人よ顔見らるゝも羞かしく覺えて才之  
 助が背後よ廻りお肩がお寒くのありませぬかど抱巻の襟を押へさぞす  
 お龜の以前の事を思へば人の皮を冠りし身の流石よ鼻白みて「旦那今更此様  
 事を申したつて仕様がありませんけれども迷惑ばかりお掛申しまして本  
 統よ如斯して伺はれる義理での滞在させんけれども實の「ア」以前の事を  
 繰返さんとするを鈴木の手を振りて押し止めイヤ有て過た事互に申さぬが  
 好い其が爲よ却つて又氣を腐らす様事起つての切角久し振よ尋ねて下  
 さつた甲斐もさいイヤ万事私の胸よ納めて居るから宜しい私よ任せて下さ  
 いお秋お春を祖母さんよお目よ掛たかど云へば 秋「イエまだ見せませぬと

云ふ 鈴おせよ早く目よ掛ぬかど云折しよお勝がお春を懐きて此處へ入  
 來たりしを見るよりお母さん其がお春ぢや親の目からの可愛い兒よ見るが  
 懐て遣て下されお勝お春を祖母さんよお目よ掛ると指圖すればお勝のお龜  
 が來しを見てまた鬼婆めが此からまた浮隠居様と云さるゝか可厭事かお  
 と思ふ色の顔よ見はれたれ主人の云付の背き難く此お可愛い様よお祖  
 母さまと云せる事不快すと思へども詮おければお春をお龜の手へ渡したり  
 孫の子よりも可愛しとさへ云よ以前の事を數へ立てられて厄介者扱ひよされ  
 るかと思ひしよの反對で鈴木が昔よ變らず我を其妻の母と尊み呉れる嬉し  
 さ嬉しきよ連て鈴木病臥るを氣の毒よ思ふ折しも眞實の孫のお春を可愛  
 くのホロリと涙ぐみて懐きしお春の顔を見れば祖母と知るべきあらぬとニ  
 くと打笑けるよ覺にす我顔をお春の頬よ押めて「お、お笑ひか祖母ちやん



懐して嬉しいかへと他愛なき様あれば鈴木のお秋も顔見合せ孫とあれは平生の彼心あれども斯あるこそ誠心あれど此も覺はず涙ぐめばお秋の別て嬉しさと有難さよ袖もて顔を掩ふお勝の老婆の所作虚か實かと感ひ呆れて言葉あし

鈴木のお秋の止むるを聞入れず動はぬ体を布団の上より起直りお龜も對ひ形を正しお母さん今晚久し振よお目に掛り實も大慶も存するが就ての改めて才之助がお頼みやす事がある私の先づ今度の病氣で大概の……イヤ今日明日でいよいよせよ遠からず六かしいと自分よの決心して居るさうあれば不便おのお秋ぢやお春の上は懐妊の身で決めて難儀をするであらうが財産と云て之と云ふ物のないが二三年の坐食しても餓渴も迫る事もあるまいまた此家の坂上も抵當もあつて居る事故兄の物同様ぢや私が死んだら兄も必らず……直引上られる事もあるまい私も亦能く頼んで置く積り其の其としてお秋と子供ばかりで家の取締も六かくし思はるれば其處を頼

むのお母さんお前さんの外はのはい我娘我孫を可愛いと思つて下さるから眞實のと云掛しが言葉を断り「イヤくどくすさんでも能い何卒お秋を助けて二人の子を教育して鈴木の家を絶さぬ様頼みますと身を起せし上は話せし呼吸の迫り來りしよや横もありて枕も頭おしめて色蒼白て見なければ秋の驚きて鈴木が耳も口をつけ「所夫何卒遊ばしたのでは伊在ませぬか所夫」と云へば鈴木の前か頭を左右もふりけり

第三十一回

鈴木が話も勞れて息も絶げば横も臥し眼を閉し様の臨終かとも見ゆる程あるよぞお秋の甚く打驚きて「所天何あさいました所天」と呼ぶ聲高くお秋の行か勝も才之助が枕邊へ立寄ればお龜もお春を懐し儘進寄りて互も顔を見合せたり

稍ありて鈴木の頭を左右も動かして「眼を見開き「イヤ其様も心配せんでも能い久しく話をせん所へ覺せず實が入て大分苦しふあつたがモウ能い何も



心配せんでも能いぞお母さん今お話しした通りお秋一人又あつての定めし心細い事であらうからとまたも以前の話しを續けんあすを 秋所天今晚はモウまたお障りあさいますと大變で滞在しますよ母のモウ彼方へ参りましてまた明日浮氣分のお宜しい時はお話を伺はせませうと云ばお龜も「お秋の申す通りで滞在しますよ今お話しした通り能く解つて居りますから明日また伺ひませうと坐を立んとするを才之助の少時と止めて「イヤモ少し待て下さいお母さんやお秋が其様又心配するからモウ話の止又致さうがお母さん私が今話した事の確乎頼みますぞと云へば 龜「ハイ私も以前の事の本統又後悔致して居ますから出来あい迄もか秋やお春の力になりませう決して浮心配あさいますかと判然答ふれば鈴木「莞爾笑を含み「其で私も安心するお秋も亦能く心得て能いか一圖又物を思詰ると随分前後の分別を失ふものだ萬事の坂上の兄と相談する様にして子供と家とが實又大切だぞ家名を汚さず斷さず子供の教育を怠らさい様にして鈴木の家名を起させて呉れ能いか解つたか確

と頼んで置くが秋「ハイ承知致しました其様事を仰有ると今又も別れずします様お心持が致しまして哀しくあります其様事を仰有らず能く浮養生遊ばしてお春も胎内の子も安心させて下さいましと涙ふさつ「云へば鈴木「態ど打笑み實又其方のやす通りぢや今晚又限つた事もあいや病氣もあると兎角愚痴もあるものと見ゆるハハハ馬鹿な事をやしたかと云捨てまた眼を閉ればお秋「咲よてお龜お勝を別間へ立せ遣りぬ其夜の異變もあく次の日の別して心地よしと鈴木自身も云ひ傍からもさう思はれしが夕暮より容體變り行たればお秋を初め一家の驚き今更事の起りし如く周章あし坂上夫婦も報知よりて駆付しが翌朝迄も尙神經鋭くして話説する事平日の如くあれは斯迄驚かずともよかりしものをあさ坂上が密々細語にお秋「又手のさうかどまた頼みある心地ぞする午後二時頃鈴木「お秋を初め一同を退け坂上のみを枕頭又請てお春の行末ハやす迄もあくお秋をも眞實の妹と思して浮面倒を見て下されど切又頼



めば坂上の其の兄が弟へ盡すべき義務ありと思へば何とて疎略あし置んや其の心配の無用よさるべしと慰め遣れば鈴木は涙を流して打喜びしが聴て再び容体悪りてお秋初め一同枕邊に集まりし時の呼く息長くして吸ふ息短く見るく唇の色褪め來たり眼いよ深く陥りて既此世の人と見えずお秋の悲しさ遣方おければ涙は聲曇りて所天くと呼返せば才之助の眼を少しく開きお秋をシツと凝視しがお春のど一聲云ふ秋お春で在ますかとお秋のお勝の膝よりお春を取りて鈴木の前より据れば鈴木は見る眼は涙見えしが淋しく笑ひし顔の其儘眼を閉し時の早や既呼返されぬ遠き方へぞ旅立ける

お秋坂上が歎きの云ふも更あり一同の愁傷の寫さずとも人々の心は想像り玉ふあるべし

阪上のお秋は向ひ万事の糸も居るおれは其方自身よせられずとも用足るべし一本までも數多く其方とお春の手から供へられし線香の才之助が爲の

千僧の供養も勝れば成たけ柩を離れぬ様し玉へと注意られる程悲さの百倍それおれはお願ひ申しまするとお春の手は持添つゝ煙は家内の暗ふある迄線香をぞ供へ居る

人の見る前ばかり飾りてのみお龜も泣くよあらず鈴木は死せし時の多くの人は催はされて眞實悲しかりければ盛の人の耳に入る迄泣たりしが通夜の折より早や涙盡きて泣たうても泣れず起て居様と思ふても昨夜も半夜しか寐ざれば眼蓋と眼蓋を縫合さるゝ如く覺えて阪上夫婦が來て居れば辛棒すれども動ともすれバコソリゝ夜船を漕よを彼を見ぬかど書生の山田小問使のお勝目ひき袖ひきすればお秋の阪上夫婦の思はん程もと淺間しき事限りおし

第三十三回

親しく交はる朋友の團樂も自然に禮節はあり年長の者か威權あるものか學術も長ぜしものかが先づ上座より着きさうお事にて人よ依りての甚く之



を氣よきし其が不快の原因ともあるあり殊に儀式だちし中よての着坐の前  
後の其人々の身分の輕高も關はれべど其争ひは十年の交際を絶つ事あり  
演劇よても演て見せる太閤記の大徳寺の焼香場の羽柴秀吉と柴田勝家との  
分目の勝負此時若も勝家が勝たら賤が嶽の戦も秀吉方の負よあるの知れ  
切た事あり

鈴木才之助が柩の菩提寺の本堂よ昇据られ和尚の引導も終りて早焼香の時  
どのありけり阪上の指圖よて第一の焼香のお春とお秋よ供すれお秋のお  
春を棺の前よ懐きて連れ行き口よこそ出さね此が父様との現世のお別だよ  
と耳よ口を寄せて細語き手を持添て香を撮ませ佛さまへ叩頭おかしと云へ  
何どの辨まへねども頭を前よ下げてアツクと二つばかり叩頭すれお秋  
の悲愁腸を斷ち其場よ泣伏んとして心を取直し袖よ顔を掩ひつゝ本の坐よ  
歸り來り涙よ聲盛りながら何卒と阪上へ會釋あす阪上の心得て焼香あし終  
りお秋よ對ひ「サお春のお絹懐て遣れ早く焼香あさるが能いと云ふよぞお秋

り其心されば背後よ控へしか勝よお春を渡さんとする時綾のお絹のツト坐  
を立ちて焼香あす

焼香の時よ自然順序あればお絹が此様よお秋の呆れて立もあらずツツと  
見て居ればお絹の坐りさまよ「お秋さんお前へと云し儘坂上が次へ座をしめ  
たりお秋の此仕打を心地よしと思ねども相手の娘あり場所も場所され  
ば争ひんも大人氣あしと其儘よ焼香をあしけり

悲しや一塊の土饅頭とありし良人の墳を離るゝ事お秋の何様あつても不  
おれども坂上初め一同よ頼められて我家よ歸りしが何があつて何が仕舞  
よあつたのやら自分よも解らぬ迄氣抜のした様よて人よ物を云るればま  
た直よ良人を思出し悲しさと心細さの胸を裂るゝ様あり

坂上夫婦を初め心安き人々皆々慰めつゝ暇を告て歸去れば淋しさの一入母  
のお龜と侍女のお勝書生の山田と四人何を話すともあく一室よ集り居りし  
がお龜のお秋よ向ひお前の何様思ふか知らさいがねお絹さんの今日の仕打



の餘まりぢやアさいかねお勝お前の何と思ふねと云へば 勝本統よで涉在  
ますねえ私の口惜涉在ました奥様の順良く入つしやるから坂上様の奥様が  
彼様もお威張さるので御在交すよと膝を進めつゝ云ふ秋の二人の言葉  
を聞けども聞ざるが如く何とも云ねばお龜の向も口惜さうよ其は何だよ  
先刻の事ばかりぢやアさいよ香奠の始末から臺所の事迄能も彼様よお饒舌  
が出来ると思つたよお前と云ふ者もあり及ばずお前が私と云ふ者もあるよ  
餘まり踏付た仕方ぢやアさいかね才之助さんの兄さんのお神さんと云ふん  
だから長い物よの巻れろつともつて黙つてたけれど餘りぢやさいかねね  
お勝 勝本統で涉在ますよ彼様よあさらさいでも能さうあもので涉在ま  
すねね些ども奥様よ涉相談あさらさいので涉在ますものど之も不平の結塊  
ありと見にて涉隠居様の仰有るのが伊道理で涉在ますと繰返し〜云ふ  
お龜が不平の第一の焼香場よあらずお絹よ切て廻されたからの不平ありお  
秋の其の何とも思はず阪上の言葉よも家内の事のお絹よさせるがらお前の

軀を離れずよ回向をせよとありたればお絹が働いたのの自分よ代つて働  
いて呉しかり此の禮を云ども恨のせぬさりながら焼香の時よの實よ口惜か  
つた兄様の格別あれを私を越者わがりと侮つての仕打あらんと之の大きい  
不平よ思ひ居れば此前自然口惜き事の多かるべしといと頼みあさ心地す  
る

第三十四回

坂上の座敷よ坂上夫婦さし向ひよて何やらん密々ど談ひ居りしがお絹の不  
平らしき顔してそれで何で御在ますかあの證書を香奠がのりよお遣しお  
さるので涉在ますか 坂左様よ此儘よして置た處で今の有様でい急よ鈴木  
から返濟ると云ふ目的のあい殊よ才之助が臨終の時よ暮々も私よ頼んだ處  
を見ると定めて此證書の事が氣よあつて居つたらうと思ふ抵當よ取てあ  
つても元來弟よ遣はす積りで計らつて置た事だから香奠がのりの様よして  
お春よ遣はしたら彼娘が教育の料よもあらうと思ふから其方の心よ濟ぬ事



もあらうが此の私に任せて置がよい、絹さう仰有ると實に御道理で御在ま  
すがさうしてお遣さつて後來までのお春の財産もあれば能御在ますかま  
たアノお袋が参つて居るで御在ませんか其もお秋……さんだつても以前  
が以前で御在ますから才之助さんがチャンとしてお出の時の様で御在ま  
いと思ひますよ所夫が何様も思召ても却つて御後悔さる様事ありあり  
ますまいかと云ふ

夫婦の間よの思ひの外妻も勢力あるものよて妻の云廻一つよての親子の愛  
情をも割く事ありお絹の彦六の事よりお秋を快からず思ひ初め何と云ても  
以前が以前だから義理と云ふものよも親戚相愛するの情も疎き女ありと  
思込みたれば万事よつけてお秋も面白からず全休されば才之助さんの死を  
つたのを機會よして暇を遣すが一番よい腹の借物お春さへあれば鈴木の本  
統の斷る事い彼子一人あれば彦六と一所よ私が養育てもよいかと平  
生思ひ居るべお秋よ對する様の初めて逢し當時の様よていさしさればこそ

良人阪上が鈴木よて現に住居る家を抵當として差入ある其證書を香冥とし  
てお秋よ遣はさんと云ふの薄又捨るよりも無益な様さ心持がするあり其よ  
りもお春ばかりを此家へ引取りお秋への少々の手切を遣はして彼お袋と共  
よ鈴木家より出し遣ること後來の爲よ上策あらんどの事を暮々も良人と争  
そひけり

阪上のお絹の様よの思はず弟が彼程よ愛せし女あり且つのお春と云ふ子の  
ある上よ今又懐妊居るものを去る無情ある事いさし難しお絹の何故よ彼程  
お秋を厭がるか知らねど我見る處よての左程よ悪き女どの思はず詰る處  
お秋よ心得違の事あらば其時はお春を引取り鈴木家を絶さぬ術の幾干もあ  
らんど心よ確と決し居れば妻の言葉を聞入れず初七日の薄し翌日お秋自身  
來り呉よ種々相談したき事あればと云遣しけるよアお秋の何事よもあれ  
以來の兄様ばかりを頼みありとお春を伴ひつゝ來りぬ  
家事の上よ就て相談せし末阪上の家屋抵當の證書をお秋の前よ置き此のお



前も承知の通り才之助から遣した證書だが才之助も私様おつての私の方でも返済て貰はふとの思ひぬので香奠としてお前の方へ返して進めるから彼家の何様お事があつても決して人手への渡さぬお春を教育する爲の財産として疎畧も思つて呉てのあらぬぞ才之助が死去した時又柩の前へ供へたいとの思つたが名聞を好む様で人へ由ての善悪の評もあらうと思つたから今日まで猶豫して居つた何卒其積りよて納めて置て貰いたいと云へばお秋の坂上の眞實の心へ感じ坐る良人の事を想起し稍少時の泣居たりしがお絹の之を哀れりと思ひぬのあらぬと一年過た末が危き物だと尙も不平の心のあり

お秋のお志の難有けれを何時まで貴所の御手許へお置き遊ばしてと辭退の上も辭退しけれを坂上の聞入れず兎角勤めてお秋へ納めさせけりお秋の此事母も物語らん善悪あるべしと歸宅ても素知らぬ振よて居たりけり

第三十五回

鈴木才之助が病死せし二年の昔とぞありよけるお秋が良人へ見せで別れしと歎きし腹の子の安々と産れて此度も亦女子ありければ此子の是非とも男としたしと才之助が希望たりし事お思出してのそいろ涙ぐまるゝを果しおしと諦め名をお道と命じてお春と兩手の花蝶鳥と愛しみぬ

斯て鈴木家へのお勝と書生の山田へ暇をとらせ同じ地面内へ四間ばかりの家を建てゝ之へ移り住み此迄住たりし家の人へ貸して其家税のお春お道が教育の料と驛遞局へ預けおとし唯々質素を旨として二兒の行末の頼みのみを愛し替る樂しみとあしけり

坂上の折々鈴木を見廻りて萬事の注意怠りおかけれお絹とお秋の中一つ喰違ひし以來兎角以前の如く親密とのゆかずお絹絶て鈴木へ来る事おかければお秋も後への態々厭お顔をされ行く事愚し近しと五度か二度もあり三度か一度もありて終りの年と三度正月と盆と師走の外への阪上の門口を踏すありぬ



斯かれバ彦六も亦絶て鈴木への遊びも来ず學校への往來も秋も聲掛られ呼止れても何時も叔母さんまた来ますよと逃るが如く捨言葉を残すのみあり

萬一の時に頼み頼まれねばならず親類の中でも別して親しくする筈の阪上と鈴木との女の氣の持様一つにて他人よりも疏遠もあり行き終りの殆んど音信不通の中もありたりき

阪上の元來阪上家の總領も生れ唯一人の弟才之助も鈴木家を繼せられたれば父の遺産は阪上一人の手は歸しいと富裕ある身ありしと親しき人より某會社の株主もあり吳よと懇々の依頼を最初承引ざりしが世間もても評判好く内々探つて見ても後來見込ありて基礎確乎したれば終り心動きて望まるゝ半分の株主もありたり踏込んだ一歩が二歩もあり彼絶頂から彼海を見渡したらと箱根も登ればまた富士の絶頂を見たい人情あれば坂上も知らず數萬の資産を投じて此が早晚何倍の價值を生じ其株券も羽が生て飛べ

しとお絹をも喜ばせて樂しむし悲しや社長支配人の横着一時も露見し百九十圓迄も騰りし株券無價與るも貰手あき程の大失敗を招きたれば坂上の絶壁より突落されし如く家産の大畧を失ひたりされども儉約を守らば彦六が廿五歳迄の學資の續け難きもあらねば此迄住し家屋敷を賣拂ひ市が谷の加賀町とやらんへ引移りぬされば鈴木との益々往來の道絶て病氣火事の見舞さへも互も知らず顔も打過ぎたりき

加賀町も引移る時お絹の良人に對ひ此方が富裕として居ればこそ人々慈悲の施行もするされ今度の會社の失敗の何の新聞も出た事故鈴木でも知らぬ事の仔細りませぬお秋も以前の恩義を報ゆるの心あらば元來頂戴せし家さればと義理も云て來ねばありませぬ向方から申出すとも此央されば此方から引上ても誰が何と申しませう女の差出がましければと云出せしを阪上の頭を振りて今もあつて取戻す程あらば彼時何で證書を返すものぞ乃公の先代の身代を其儘譲受たれど才之助の財産も鈴木の養子とありて



彼程までもあつたの、全くの自力養子と遣はさねば財産を分て家を持さねばならぬで、いかにか其を思ふての乃公の寸志今更其様事何あつてもあらぬ彦六と學問をさせる程の物さへあれ、其で能のだ子の爲め、財産を殘しても何の役も立ものぞ乃公が好標本ぢや彦六が立派な者もあつてさへ、呉れ、バ千万金も勝た財産だ、と理を責めて教訓せば、お絹も理も伏して行末の頼みの唯彦六の立身出世を祈るの外、あしと夫婦心を一として彦六の教育も怠りあかりさ

第三十六回

一度しみ込だ性根の善悪も拘はらず容易除れ難しお秋が母のか龜の年も五十の上を五つ六つお春か道と云ふ二人の孫もある身、あれ、普通の人間、あらん、の、後生願ひ、一三昧の抹香臭くあつて毒ももならず、薬ももならず、多隱居様として崇められて難有がつて居て能き筈あるも持たが病またそろ、お秋をいぢめ初しこそ、淺間しけれされども以前の如く頭から母親さん風を吹

せるよあらずお春を連れて招魂社と遊ばするとして、日毎又辨當でしらへあどして朝から出掛て日暮近くに漸と歸る事、毎なり其歸つた時、又お酒の臭のする事があつたが、此が抑も、又てお春の小遣錢が昨日よりも今日の多くあり、明日のまた何を欲がるから二十錢、丈別、又貰ひたいよ、と云ふ様もありぬ、お秋も變だと思ふ事の時々ありても、お春が能く馴染でお祖母ちやんく、と終日附纏ひ一日でも家外へ出さねば、仕様のさき程、我儘を云ふよ、と詮方、さく云ふ、又、又小遣を持せて毎日、出し遣りけり

鈴木家の才之助が死せし時、數百金の現金の殘したれど、此と云ふべき財産の坂上が、購ひ呉し、家屋敷の外、又のさきあり、今日まで、既、又三年を過たる、又居食同様、され、バ、大方の遣ひ減して、今、の家税も、教育料として、預入る、事、出来難く、此、又て生活、ね、バ、あ、ら、ぬ、様、も、あ、り、行、き、た、り、稼人、あ、く、し、て、一、家、残、ら、ず、女、ば、か、り、其、上、頼、り、又、す、べ、き、娘、二、人、の、姉、さ、へ、も、六、つ、か、七、つ、萬、一、の、時、又、相、談、す、べ、き、坂、上、と、い、お、絹、の、事、よ、り、仲、違、し、て、互、又、安、否、さ、へ



も知らぬ此頃行末何とさり行くぞと案じ出せば際限もさく氣も掛りてお秋の肉の減るを覺ゆるばかりあり

秋「お母さん少し氣を付けて下さらぬいと春の小遣ばかりでも大變だし何どか仕さくツちやア迎も遣て行れさくあるよと其とさく云へお龜の餘り面白からぬ顔付私だつて其を思はさいぢやアさいよ春坊が段々種々物を欲がる様もあるもんだから私も氣を付ける様にしてるんだけれど何も入用だけの矢張入るよ 秋「そりや私もサウだらうと思ひますがね此頃の平均三十錢位の掛るんだもの迎も遣て行れさいから成たけ氣を付ける様にして下さい

龜「お前がサウ云さくツても私も能く知つてるわねだつて何ぢやアさいかね春坊の物もなるのが月々十五六圓入るぢやアさいかね其だものお前春坊が三十錢位遣つたつて幼時又餘り窮乏にして欲しがる物を與さい様にするど他兒の物を欲がる様もあるから出来るから春坊の云通りまして遣て鷹揚も養育たいぢやアさいかねと云ふの子供を養育の方から見れば一理窟か秋も

出来るものから可愛いお春の事を龜の云ふ通りまして遣りたいは山々かれども此頃の生活よての迎も及ぶべき事よあらす

秋「本統よお母さんのお云の通りよ自分達の身をつめても子供は樂に育たいと思ふけれど此頃の迎もサウ行さいから困るのですよ 龜「お前其様事を云たつて其日は困ると云譯ぢやアさいと云ふのお龜はまだお秋の内心は困つて居を知らざるものと見えたりお秋の母の顔を少時見て居たりしが現金の盡た事を能く話したら母も其氣よあつてお春の上よも氣を付けて呉る事あらんどお母さんよ未だ話ささいかね實のモウお金がさくあつたもんだからと云ふをお龜の目を丸くして聞答め「何だつてお金がさいって 秋「其だから困るのさ 龜「本統よかねえ 秋「何を虚言を云ものかね實のお母さんよも疾よ云ふと思つたんだけれど心配を掛るのが滲氣の毒だから其で黙つて居ましたがね家税で漸々生活て行のですよと云ふよお龜の此程よあるまいと思ひし事故少時の言葉も出ざりしが稍思案の末お秋お前何思か知ら



さいがねお前斯しちやア何だね私の外は仕様のあからうと思ふがねと膝を進めし如何ある事をや思ひ付しとお秋も母の顔を見て「お母さん何様事です能い工風があるの」

第三十七回

お龜が考へたりし別の事よてもあかりし此迄驛遞局へ預け込んだ家税の貯金を引出して確實な人を見立て鳥渡く貸付て利を取て如何だ少し面倒を見れば直よ子が子を生活の足もある處か忽ちの中は金持よされるよ云ふ誠に都合よき話ありお秋も藝者をして柳橋よ居た頃よの随分苦しい事があつて高利の金を借て一時を凌いだ時もある今母の勤めるのも所謂日成貸であらうと思ひし故眉を皺め頭を振て「お母さん其様事の迎も私よの出来せんよ彼様非道い事が如何して仕居られるものかね其こそ本統よ好事は決してありやしさいよと云をお龜のホ、ホ、と大きく笑つて吹飛し何だねお前其様氣の弱い事で何して今の世の中が押通せるものかね高利貸を

そ非道いけれ借る人の便利よもなり此方も利得る様お貸法がいくらもあらアねお前袖手て斯して食て行うものから驛遞局のだつて直きよ食て仕舞よ其よりかお前幸ひ其丈でもある中よ早く何と仕さくつちやア仕様がよくあるよ何よお前利を低くして遣て好法をたつて遣やア却つて人助よあるんだよさうおしさいお前氣を弱しちやア迎も女ばかりで遣てる事ア出来さいよサウおしさいね私が受合よ慣熟る迄の知つた人よばかり貸す様よすりや間違いつこのさいよサアおしよよ何お前何でもありやアしさいと疊掛て勸むれどもお秋の即座よの決しかね能く考へて見ませうと其夜の其儘よして寝けり

此儘よ袖手て食て居れば終よの家迄も食て仕舞ねバあらぬ様よあるの知切つて居るされバと云て女業よ何の商賣が出来やう出来た處が鈴木才之助と云立派な官員の遺族が商人よあつて仕舞たと云れては旦那のか位牌よ泥を塗る様よものでお春お道を店よ坐らせる様よ事の迎もされさい併し此儘よ



して何時迄生活事が出来やう其の商賣をするのが一番好いけれども堅氣  
 商賣の何様風にするものか抱の二三人も置いて柳橋は歸れば様子も知れ  
 て居るし其こそ譯もさい事だけれど其様事をしたら旦那も何と申譯が出来  
 やう如何して此様可厭考へが出来たらうあ、濟さい、此様考へが出  
 る様でお母さんの事でお母さん自身で頼みもあさい様と思われ  
 るあ、可厭考へが起つた併し何様したものだらう何様かしおければなら  
 さいあ、如何しやうお母さんの考へも全く悪いとも云ないし高利を貸して  
 こそ氣の毒も思ひもする利を低くして人の便利もあり此方の利益もある  
 事から高利でさへなければ悪い事でもあいなだけれども私もやア迎も出来  
 さいしお母さんで不安心だしあ、如何したら好からう何とかない工風の  
 さいか知らん坂上さんと此様風もあつて居さいと兄さん又相談を願ふの  
 だけれを金を貸してお母さんと二人で甘く遣てけるか知らん外も能事な  
 からうかあ、何とかししたいものだ種々考へを凝せ此と極て自分で安

心される事おければお秋の身も瘦て唯思ふ勞るのみあり  
 お龜のお秋の顔を見れば直ぐ初めると云ふ工合もさう極てお仕舞何屹度甘  
 く行は違ひさいよサウおしあ、と勤めらるゝ度敷の重なり行はお秋も他  
 は詮術なき屈託の餘り何時かお龜の考案も捲込れていつそ遣て見様かど  
 云ふ氣もあり成だけ利を低くして確實も人又貸すと云ふ事もありたり最初  
 こそ二三軒から十軒ばかりの間は極手堅く貸付居しがチヤン、と利足も  
 持つて来て元金の倒れる事もあいな中よ、お禮の爲ありあ、と云て美蕪の一棟  
 もお嬢様方へと持て来る者もありて思つたよりの世話も焼す甘く金も轉つ  
 て行よぞお秋も乘氣が来ればお龜の鼻を高くしてソラ傍覽さね矢張龜の甲  
 より年の功だアねえ

第三十八回

女の高利貸の夜叉の化身あらで出来難し鈴木のお秋の母の勤めと證方  
 と利を低くして金貸を初めたれども此がお龜のみあら、或ひの甘く行たか



も知れぬ涙のある人間よの六かしき話あり第一利を低して人の爲よも  
 り自分の利益をも得様と云位も人間らしい考へでの金貸さぞの思ひも寄ら  
 ず貸すよりも捨ると云ても能方だ何も其何で此頃の不景氣で商賣も間で  
 座いませ家内が唄子供合せて六人其も稼人の私一人其上斯々の災難も罹り  
 まして此寒空も子供も被せる物も座りませぬ斯様事をやされた義理での  
 伊在ませんが何かモウ少々お待ちつて下さいまし來月の二分岐度お納  
 め申しますと掩口説るればお龜の彼様當よからさい事の聞入られぬ今日中  
 も元利耳を揃へさせて受取るが能い氣を弱くしての出来さいと云ふの此  
 處の事だよと云どもか秋の方の涙もろく他人の困るのも自分の困るのも同  
 じ事私が斯して氣を揉様よ彼人も實よ心配事であらう見受た所悪い人で  
 のさい來月の岐度納めるよ違ひさい情の人の爲からすとの此處の事彼様よ  
 心配して人を買よ氣の毒事だあゝ可哀想よ子供の被る物もさいとのお  
 春の古物でも先方で悪く思はねば遣たいものだと云ふ様を鹽梅も涙から先

よ流してナアよ其様譯から今月の待ませう其替よ來月の間違はぬ様よと云  
 ありよして歸して遣る  
 此有様されば借人の非常も多かつて來る多かる程倒れも多かる賃金の高  
 も段々上つて鈴木家の親子四人が命の綱の殆んど残らず人手よ入つて居る  
 事よあつて終よ元も利もなくす程の淺間しき境界とありたりお龜のツラ見  
 た事かお前が餘り佛様の様よあつて居るからとお秋一人で初めて一人で損  
 をした様事事を云ふお秋もお母さんが彼様事を勤めおければ此様事よのさ  
 らさい元來私の嫌だと云たのだと愚痴を列べる論じても争つても跡の祭何  
 どか趣向をせねば愈よ親子餓い思ひをせねばからぬ事よありたり  
 此上の頼みの家税の外にさい去年までの最初坂上から世話おし呉し借家人  
 引續いて住居たれと其人地方よ轉任してからの家の直よ塞がれども永住す  
 る者さく早きよ一月返さる半年を出ず明家よあり居る事もありて今よ必ら  
 ず其月の當よしては居られずありぬ其のお龜が饒舌をするのを五月蠅と云



ふが第一の口實見掛さへすれば必らず言葉を掛けて言葉を出したら滔々たる悪河の辨を振ひて人々の口を開かせず世間のアラを其人の上へ開つていも居る様よまゝ、自問自答を交えて一時間も二時間も引留く話し掛る其も家外よて逢し時のみあらばまだ辛棒もさるれを少し心安くされば遠慮あしよ上り込で妻君よでも主公よでも家主の威光をチビリく見せて話たて故最初の中ハ饒舌婆さんとして除物よして置けども後ハ人ハ飽れてお龜の顔を見れば逃る様よあり行くあり無價で借て居る譯でハあし相應の家税を出して彼婆よ頭をさげて居るのハ馬鹿くしい譯だ外聞よも關ると逃る様よして轉宅するお秋ハ之を覺れどもお龜ハ何とも思はず餘り無遠慮よ行くのハ能くさいと注告ればお龜ハ直よ頬を膨らして私の爲よ家の借人があければ私ハ何處へでも出て行よと行くべき家もあらざるよ鳥渡逗留よでも来て居る様よ事を云出し一日位は言葉も交へずお秋も之よ弱りて度々の云ぬ様よすれど何時迄でも其辭が止ぬあり生活ハ困つて來る仕法ハあし

第三十九回

お秋ハ一人よて氣を揉のみ日毎よ頼り少さくあり行こそ果敢ありけれ

命と頼む家税も入らず勝よさればお秋の氣苦勞は筆紙よ盡し難く貸金のボツく取るのを唯一の頼みされども此迄も貸した物を泣付て返し貰ふと云ふ鹽梅今迄返済さい奴が中々素直よ返すものでもあければ帳面の上證書の金高から云バまだ二三百圓の金はある筈よて此困難をあし居るあり思へば思ふ程口惜けれども女業よ裁判沙汰よするも面白からずした處で三百屋の食物よあるだけの事世の中よ何と便があいとて子供を抱へて相談相手もあき寡婦は儘あらぬものあしとお秋ハ今更の如く阪上戀しくお絹様も無無理されど私が其盾をついたのハ大人しくあし姉妹同様の義理ありとすれば此方で負て居あければあらぬのよと思返せど此も今よされば死んだ子の年とありたり

針もつ術ハ心得居らねばと鈴木へ來りしより裁縫ハ心を用ゆたれば商賈



人程よの行ねど人よ見られても差かしからぬ程よの出来れば伊仕立物仕  
 と看板を出して此よても生活れぬ事はあるまいと容易の膝を離れぬお道を  
 欺しすがしゝて晝夜之腕も癒れるばかりあり商賣よして居て商賣物の心  
 よされぬの素人の證據此處の斯して置ねば後の爲よさらぬ彼處よもあれで  
 のと自分の物を裁縫するより尙ほ念を入れるれば晝夜の心を盡して日よ稼げる  
 金額は幾許よもさらぬ斯様事をして居てのお春お道よ鹽煎餅の一枚も遣ね  
 ばお秋の氣を腐らして後よの仕事する心も撓みたり  
 お龜の傍から其様ぢや仕様がよいお前何どかおしお春よ一枚の着物も  
 着せられさいよ着せられさいばかりなら未しもだがお春の身の皮を剥す様  
 よあるだらうぢやアさいかねえお秋如何したもんだねと自から助ける道に  
 知らずして却つて我子を恨む様ある言葉を出す事もあるお秋の聞く度よ五  
 月廻てさらすお母さんの様よ其様よ云たつて仕様がよいよ私だつて種々考  
 がへてるんだから黙つて居て下さいよ種々お事を云はれると裁縫をする氣

もさくさつて仕舞から 龜黙つて居ませうさお前さんざア裁  
 縫あんかアしあくつても立派な腕をお持ちぢやアさいか寶の持腐れどの此事  
 だよ何を考へてるんか知らさいが稽古所をしたつて知れたアものだね此邊  
 で初めて伊覽お前位を腕から其こそお弟子の直よ附よ考へるばかり考が  
 へたつて實地よ遣て見かけりやア仕様がよいぢやアさいかねと云ふ顔お秋  
 の屹度見て「お母さん其ぢやア何の私よ稽古所を開とお云のかねまア考へ  
 ても伊覽おさい私よ如何して其が出来るものかね其様事をして伊覽おさい  
 鈴木の家内の結局彼様事を初めた以前が以前だからと云れるのの知れ切て  
 居るよ如何零落だつて旦那の位牌の泥る事ア如何しても私よの出来ません  
 よと云放して垂頭やお龜の冷笑つて「お前の中々エライのさ子供よの餓しい  
 思をさせてと云ふを聞答め「お母さん何を云だね外聞の悪い自分の食さく  
 つても子供やお前さんよ餓しい思ひのさせませんよ 龜其だからお前のエ  
 ラいと云ふんだアねえ成程餓しい思はさせぬがお春を伊覽お可愛想ぢや



アいかねモウお前踊の一つや二つ何家の子だつて踊らさいものなさいよ仕込の中だアね大きくあつちやア仕様がよいよ学校の止させたつて能ぢやアいかねお前が人よ教えれば此子も教ねらるべし弟子が多ければ此頭の様も困らなくつても能ぢやアいかねお秋悪い事云はさいよお秋の斯と聞いての腹が立て堪らず其儘身を堅くして口惜涙又咽びぬ

第四十回

東京近在の料理屋稼の女を見しもの知るべし場末の藝者の喰詰者か茶屋女も使法あき女の流れ込みて新田の小旦那敷下の作左衛門を相手よ二三年前の流行唄を鼻聲よ我鳴散してお茶も濁し嬉しがらせもして此故も切たり打たりの騒動も起させる事世間の廣きものなり

茨城縣下の牛久と云は傍よ六里からの廣さある牛久沼を控へて此からの利益も多き事なれば先づ鳥渡近邊よての繁花地あり此地の櫻屋と云ふ料理店よ此頃東京から来た生辨天様と評判高き酌取女あり年の三十を少し過たり

と思ひぬれど櫻樹の老樹もありても色香深く藝道の別て勝れたりと其沙汰近郷を振蕩して五里十里の遠きより浮れ来るツレツレ連もいと多く櫻屋の思ひも掛ぬ拵錢樹を植込だど娘よりも大切よあしけり

此生辨天様こそ鈴木のお秋があれの果あり既よ前も述し如く貸金の倒れる家の借手のなくある其日を支へ難き程ありたれば種々よ工風を運したれども他よ覺えし業あき身の如何とも詮術なく此時唯一つの手段の家を金よして何か手堅き商法よても營たけれども慣ぬ業の金貸よ手懲して容易よ手出しをせず勇氣あし其上此家のみ二人の娘の養育料あり財産ありよて之を賣拂は命の綱の切れ時いや一圖よ其様思切た事をして若し失敗たら其迄あ何どか好工風なさいものかと心配する傍よりお龜の左迄よ心配らしき顔もせず何か前身を捨ててこそ浮む瀬もあると云ぢやアいかね脊よ腹の換られさいやね柳橋でこそ人よ面も見らるゝけれど赤坂か深川あたりの場末から知れる事ぢやアいかねお前も一花咲せて傍覽あえお前操さ



へ破らさきやア鈴木さんへの義理も立つはね鈴木さんだッてお春やお道の  
 儼じがるのを喜びもささるまいぢやアあいかねさうおしあえ二兒の私が預  
 つてりやア大丈夫だよ何とかしなくツちやア愈よ仕方がないぢやアあいか  
 ねと再度左袂を取りて客の前は笑顔を見せよとの餘りとは云へば情なき事  
 されども外は憂えあき身よ何科可厭ありと思ふども行末其様お事をせね  
 ばあるまいかいやいや假令何様お事あらうとも其様事をして何あつても  
 旦那は濟ぬ如何して其様心が起るだらう自分又覺はのある事此ばかりだ  
 からつひ此様考へも起るのかあ、情なき自分ながら愛想が盡ると苦しさ儘  
 と思はぬ事も思ふ人の死なれざる所お龜の勤める折に随分喧嘩面よあ  
 つて一日二日口を利さざる事もありされども日毎又困難は加はりて今如何  
 どもし難く質あつよ其日を送る様ありたるよ斯て何時迄斯して居らる  
 べき質種あくならば其迄可愛い二人の娘の衣類迄も自由よいされぬ様せね  
 ばあるまじ今の中よ何とかしあけれ何程の苦難を見ねばあらぬかも知れ

ぬお母さんのお云の通りよ一度以前の身よいや、何しても心が濟ぬ其  
 でも斯して居られぬ何とか仕法のあるまいかど漸心の動き初めし處へお  
 龜の鐵も湯よあさんとお春お道が可哀想だ子供の爲と思つて可厭お事もし  
 てお呉れ私がお前の様お年お孫子の爲めよ何様事もして見せるけれど  
 も何も家の爲め子の爲めよ身を落す事だもの人が賞こそすれ笑ひせぬお  
 前早く決心してお呉れと手を合せて掻口説れて正當ある教育あき身の以前の  
 身よ返る事おれおお姫様が女郎よある様お心持もせねば東京で何處で何  
 様人よ會ふも知れぬお寧ろ近在の一日掛れば歸京れる位の處で一年ばかり  
 稼いで見ませうと漸と其氣よありたりお龜の心で東京よて一花咲させた  
 い心おれを無理よとい強難くお秋の心よ任せて牛久宿の小料理屋の酌人よ  
 住込せしが二人の兒を家よ殘して羞かしい事をしよ行く心の中筆よ盡さ  
 んこと難し

第四十一回



男兒を喜ぶべき娘を生ざる事を歎くの子も衣食して不義の快樂を欲する者の情あるべしお龜の孫の二人とも女にして容姿勝れたれば行末頼みありと之を愛する事一方ならずお秋が牛久へ行ざる前より姉のモウ遊藝を仕込べき時あり學校を高く慢臭くあつて賣た事よあらず長唄は唄の本元踊の水木でも藤間でも花柳も至極よからう私の老後の樂みよ是非習はせて貰いたいと幾度と云出したれどお秋の之を聞入れず鈴木家の娘の踊の不用物手紙も書け本も讀め裁縫一通り羞かしからぬ程習はせ置ねば行末私の様もものよあるべし我身の在て過た事よ是非あければ娘の立派者よして立派な婿を貰はねばあらぬお母さん決して其様事のお春も聞せて下さいませと云切り牛久へ出立の時もお春も對ひ私が留守よあつても學校を怠つてのありませぬを誰が何と云ふとも決して淨瑠璃の稽古や踊を習つてのありませぬを私とても長うの留守よせぬとも兼ねると歸つて來るから能く勉強して待つてお出と云みく云聞せしかば子供心ながらお春の腸も染みつき寒

き朝雨の降日も學校へは進んで行き子供よ珍らしと云る、程大人びてお道を守りし遊ばせもして母の歸るべき日を待こそ哀れなれ或朝お春が學校へ行んとするをお龜の止めてお前モウ今日から學校へ行くぢやないよお春の不思議さうお顔してお祖母ちゃん何故學校へ行く悪いの何故して事もないがね今日のお祖母ちゃん能所へ連れて行ますよ春いや、好所行あくつても好い私や學校の方へ行方が好い、お祖母ちゃんど行たつて仕様がよいよ今日のお祖母ちゃんお師匠さんの所へ連れて行くからお出で、お祖母ちゃんど不厭事だお祖母ちゃんが稽古さんか行ぢやないよお云だつたから私踊いや、お祖母ちゃんが踊れたいと人が笑ふよ、お春人が笑つたつてお母様も貰られる方が能い、お祖母ちゃん其様我儘を云ふぢやないよお祖母ちゃん悪いこと云やアしさいからね好兒だ學校お止し學校おんぞから見ると何様も面白いか知れさいよ好兒だね能くお祖母ちゃん云事をお聞だ春坊の好兒だぞとすかせと春の聞入ざるよとお龜の態と怒つた顔をさしお前



母様云事ばかり聞いてお祖母ちやんの云事のか聞であいかと屹度云へお春の涙ぐみて答へせず其儘學校へ行んとするをお龜の呼止め「お待ち何故お祖母ちやんよお返事をしさいんだと強く云へばお春の其儘其處に坐りてシクシク泣く

お龜も孫の事あれば眞實お春の可愛きあり可愛きあり可愛きなり可愛きなり相違なければ行末を思量り終生の上から見て此様事よせぬば孫の爲よならず良家の嫂とあさんよハ斯く教育ねばあさハ云ふ教訓法の微塵も思ふことあく藝者をさせても甘く行ハ途方もなき出世の出来る事よお秋ハ心柄よて牛久あんどへ行ク事よハあつたがお春やお道ハ今から我手よて思ふ存分よ教育てお秋の様事よハせぬと又手こそ踊を習はせんとあすありけり  
お春が涙よありシヨンホリと坐りし様を見ればお龜も可哀想よ彼様よれ秋の云つた事を守つて居るのハ感心だ無理よ云て病氣よでもしてハあらぬ當分の中ハ學校ハ學校藝事ハ藝事よしてお春の好き物もさせて我身の希望も

達せんと尙もお春を掻口説き平日ハ學校へ通ふ事よして日曜ハ踊の師匠よ行く事よして漸どの事で説伏せ六十よ近い老婆ハ日曜を待遠しがつてお春よ着飾らせてニコくすれば十歳よ足らぬ孫ハ日曜の來るのを厭がるこそ誠よ世ハ逆まされ

第四十二回

照君が胡國よ嫁し常磐が入道の聞よ侍せしハ昔語其どの心違りたれども鈴木の後家お秋ハ二十の上を六つ七つ今を女の盛りあるよ苦よ瘦し身の花失せて三十路を越せしと見ゆめるを愛身の上よ愛き事ハ牛久の宿よ茶屋奉公思ふよ心暮て行く人の上こそ果敢あけれ鬼が島よも鬼ばかりと聞されと鋤の手の荒くれ男濁たる聲の鼻唄よ合す調子の合難き客を相手よ夜盡の摩敷ハ地獄の心地あり眞拭の中よ咲く花を我手折んど集ひくるを風の潮よ靡くと見せて兎よも角よも世を送る心の中切あさを我子の爲と辛棒して早や一年を過しける



東京の母の許より手紙の都度困難事の數限りを云來すとお秋の二人の娘共が定めて我を待居らん物の辨別もあき者も苦勞を掛る口惜しませめての朝夕の寒からぬ迄身を粉よさすも仕送らんと手紙見る度胸裡も泣き一日を三秋の思ひあり

日毎の客の其中より田舎珍らしき人もあり心のいとく清きもあり實意深きも見ゆめるよ手を變へ品を更へ我も許せ我も靡けと今宵を明日よ云のべて僅かよ呼吸をつく事あり中より數多の纏頭を興へて東京より子供あり親もありと聞く我も幸ひ妻あければ我妻もあり玉へ子も親も引取て我子我親とあすすべきぞ其があらすば東京も置く費用は我手も送るべしと世も難有く口説もありお秋の聞毎も戰慄して悲しども口惜しども醫へ難き思ひあれども其を能程よあしらり傍より母からの櫛の齒を挽く如く親と子とを何とする氣す家の其儘借人あし身身よりの送命も三圓五圓と少許づゝ送りしとて幾日支と思ふよやせめての廿卅の纏りし金贈り呉ねばお春お道が身の

皮を脱の外あきぞ早く贈り下されたと其都度くの催促もお秋の胸を掻むしらるゝより節あければア、親の爲子の爲昔から例のあき事あき寧ろ其身を捨物にして實意深き彼人よ身を委せ親子三人引取り貰はんかいかいサウある時の鈴木の家を絶す道理絶ぬ迄も浮位牌は何と申譯が出来ようどハ云へ此儘よあし置ばお春お道何とあるわ何とせんとばかり客の座敷よ招かれても唯此事も思ひ屈し尋常あらぬを見て取られ其顔色の好あき京都の人を思ふてあらん先日よりもやす通り我心も随ひあば身身の我妻都の人も引取りて愛事知らず暮させん如何くと追らるれば此身を拾れバ濟事あり此人も身を委せ母や我子を救はんかいかい何あつても良人へ貞操を缺く時の人間と云はれまじとまた思返せば母よりの手紙もまたも追られて三千界の愛苦を唯一身も集めし思ひ一夜寐す二夜寐す寐ぬ程思ひ乱れ行き眼の釣り心の表るばかり客も追られ母も追られ晝夜うつゝの境界の寧ろ死さんと思ふるべし



お秋の終は思ひ定め操を捨て操を立るとやら云ふ事の斯る時をや云ふから  
ん亡夫の済ねども現在の子よの代難しと其客よ日を約し身を委する事と  
ありよけり

さりおがら如何もして亡夫と済しせめての能く供養して心の限り詫中さ  
んど供物を調へ其家の佛壇は供へつゝ身を伏して斯る心よありし由の能く  
の事と許して下され此身こそ捨れすれお春お道の屹度立派な養育あは鈴木  
の家へ絶しませぬと千遍万遍繰返し涙と共に入て漸う頭を掻げしよ此の  
そも如何死せし良人のありと蒼白めし顔は眼を怒らせ屹度睨みし怖ろ  
しさよお秋のアツとはかりよ氣絶さす

第四十三回

お秋が牛久あたりの宿場の料理屋に酌女とありしのみか困苦の餘りとい  
云ながら貞節を破りて客の意は随はんとせし事平生よかはり心弱し母と争  
ふ昔よの似ざりけりと思はん人もあるべけれと操を破りて操を立ると云ふ

事を全く善どの思はねども止を得ざる時よの斯るの外おしといお秋が幼  
時より生長せし巷よて見も聞もせし事常磐彦前が清盛と肌を觸しを實に得  
難き貞婦ありと思へるされば斯る場合も臨んでのお秋の胸は第一は湧出べ  
き筈あり其を善どは思はず善どの思はねども亦一の烈婦のあすべき事の様  
よ思へるの今若牛若程の子ありたればこそ常盤も幸ひ貞婦の皮を被り課せ  
しよて語る處貞女節婦と云ふべきものあらぬを知らぬあり

さりおがら善と思はねばこそ斯決心迄の苦しみの比ふるよ物おく思定し後  
も我心の我を許さねば佛前よ香を焚き物を供へて罪の幾分を輕うせんと祈  
りしされされども終は心の許さずして亡夫才之助が死せし其儘の顔は怒を  
帯てハタと睨みける怖はお秋のアツと一聲叫んで悶絶したりしありき  
人々よ介抱されて漸く我よ復りたれども今早や其人よ許すべき妄念は片  
雲も止めずあり終は彼が心よ従ひざりさされども此後の折々才之助の怒れ  
る顔目よ見えて客の席へ出んとする廊下の障子よも怪しき影を認め酌をさ



さんとあす袖を背後より曳て我への貞操を忘れたるかお春お道を彼心悪き母親へ托みて此邊へ来りし事同穴の契百年の約も全く一時の虚言ありしかさらす何故東京へ歸らぬぞ家も子も他所もあして斯る處へ徘徊こと奇怪あり心外ありと叱る如き聲の少時も耳元を離れずして客の席も侍も深夜人静かある間の中へも朦朧と影見え聲聞えて後より心も狂しくされ日々々の勤めあし難くツラく病とあり又けり

其身の心地勝れざるさへあるよ東京の母よりの尙も金の不足を訴へて少時も猶豫する事なく一日の中も二通迄郵書の来りし事さへありお秋が牛久へ来りし後思ふ儘の金こそ送られされ家の生活子供の衣服位の充分とい行ねと普通よの出来る丈送りし積ありさるよ斯迄も来るの餘りと云へばお母さんも酷過る以前と違ひし事は云はずとも知つて居らるゝ管此身が斯る賤しき業をあし居る事少しの不便とも思ふて活計も約め外見も大概よして貰いたい今月よあつても三度の送つてある其よ此催促の何事ぞ柳橋よ居た時

の様よ金よある事と思はれてハ斯して辛棒して居る甲斐もあゝ其上此通り病人同様よあつて客の勤まらず体ハ弱くあつて此頃の様でハ何時迄此地へ居らるゝものであし何とかしおければ又々食ぬ程の苦惱をせねばならぬア、何したら好からう考がへると狂人よでもありさうだア、濟ぬ事をした思ふばかりでも彼様心よあつたのハ實よ中譯があいお春の爲めお道の爲とフツと彼様氣よあつたのハ私の一生の罪過で御在ますお腹も立ちませうが何卒勘忍して下さいまし家も大事と思ひ二人の娘が可愛いと思へばこそ羞かしい思ひをして此牛久三界まで参つたので御在ます何卒勘忍して下さいましと我身の上子の上亡夫の怒り怖しやと晝夜よ心を苦しむれば髪も結ばず紅もさゝす半日の一室よ立籠りて顔蒼白て肉脱ち生辨天と云はれし色も香も今に見返る人だよあし

またもや母よりの手紙また泣せられるかど進まぬお春が讀下せばお春が大病よて今日明日をも頼み難き容體とあるよお秋の驚きハ一方お春は櫻屋の



内儀も頼みて幸手迄人車前の船もゆられて兩國へ着たりし時の日も暮て燈火のチラツク頃ありき

第四十四回

お龜が秋へ送金の催促をさすの種々雑多の口實を設けて幾度とさき無理難題を予送りたりしが春病氣の事のみの全くの實事として假作談のあらざりし

お春の母が秋が牛久へ行し後日毎も其方の空のみ眺めて十も寐れば歸京の事ありしも何として歸り玉はぬぞ十どころかモウ百も寐た千も寐た數の知れぬ程寐たの歸り玉はぬを見れば口惜しや私とお祖母ちやんと道ちやんと置てき堀してモウ歸宅の積りかも知れぬお祖母ちやんと尋問の直も歸京の出だ澤山土産を持て歸京の出だとお云だければ此様も待つて居てもモウお歸宅のさいの違ひさいよと小さき胸も母の安否を懐ひて逢たがる事流石もお龜を涙ぐませる事あり

斯く母を思ふ心の屈してか氣の進まぬ跡を稽古する事の辛くてかお春の漸々陰氣もありて室の隅のみ居る様もありお龜が笑ひ掛れば催ふされて笑はずれもいと淋しくして子供らしくもお道の事の大人も及ばぬ程世話しければ少しも活潑ある様子見えず終の床もつきて咳嗽出で色蒼白の醫者も聞の肺病の下地ありと云ふもお龜の甚く打驚さ心の限り看病して其本復をぞ祈りける

お龜の眞實心からお春お道を可愛く思へるありお春の病氣の心から打驚き醫者の外も人の勸める事の加持でも祈禱でも飯田町から深川の端千住の先迄も行くを厭はず或日圓子坂迄肺病も特效ある虫を求めよとて行しも本郷の通りもて端も出會し彼柳橋の富士屋小辰が親爺勘兵衛ありお龜の其實意さきを恨み居れば顔を背向て行過んとせしも勘兵衛早くも聲を掛けて傍も寄り」ウ知らさい顔をしさいでも好ぢやアさいか種々話たい事もあるから急ぐんでさけりや鳥渡其邊迄來て吳さいかと云ふお龜の面白から



ぬ顔して「モウお前も欺されたくもさいよマア浮免を被りませうよと行を引  
 止め 勘「其様云ねえでも能く話をすれば解る事だ七八年ぶりで會たんど  
 やアさいか其様野暮を云はねえで話しせねすりや直分解アホアマア乃公と  
 一處も來ねえと無理よ手を取り勘むればお龜の六十近き身も猶男と云ふ  
 もの嬉しきよや勘兵衛も引る、儘其邊の小料理屋へ到りぬ其處まで何と話  
 をおせるか此より後の勘兵衛折々飯田町へ來りて一泊する事さへありき  
 お春何と云込入た考へのあるあらねと勘兵衛の來るのが嫌ひまで彼が一  
 泊する夜にお道を其身の病轉入て母の事を懐ふて泣くめり  
 斯てお春の日毎も病氣重り行て今今日明日を保ち難しとある醫者の言葉  
 よお龜の足元から鳥の立た様も驚き唯オロ／＼して立騒げの勘兵衛の晝夜  
 詰切居りてお龜も力を添へつゝお春死せし後の戸主後見人の事を早くも  
 相談さし置きお秋へお春の旦夕も六かしき由を告遣し此後の事ありき

第四十五回

世も哀れあるもの病つかれし小女の母を想へるよ如ものあらじ愛くるしき  
 眼の陥落て涙をたへ紅の唇色褪めて微顫たる見るもの誰か泣ざるべきお  
 春が今の頼妙さく見えつゝ母様のまだかまだ歸つて下さらぬかお祖母様  
 くと病苦をも打忘れて早う呼で來て連て來てとお龜を見る眼の涙ぐみて  
 蚊よりも細き聲の悲しきよお龜も途方を失ひて唯泣のみあるが誠心ある  
 此の中も日毎勘兵衛訪來りてお龜を慰め勵ましお春の枕邊も菓子菓物も  
 せ山の如く此の好かいやあらば彼を與ふかど氣嫌とり／＼よ心付れど子心  
 よも見所あるか勘兵衛右の枕邊も寄れば左を向き左よりすれば夜具を被るか  
 さらすべ眼を閉て點頭さだませず此小女めがど心よ怒れどお龜の秘藏孫さ  
 れば此故も事を破らん効あしと醫者よ藥よど自ら先よ立て騒ぎ散せばお  
 龜も勘兵衛のみを今の頼みと思ふあるべし  
 お春病氣の事を第一よ通じ遣るべきの母のお秋あり其よ續いての伯父の坂  
 上あるべし然るよお龜の其間際も至る迄も母よ通ぜざる程あれば坂上よ



素より通すべき筈あしさればお春にお龜と勘兵衛との間も介抱され其運命も其掌中も左右何れもさるべく母を戀ふ心の妹のお道のみを少時も傍を放さぬ様として其顔を見て泣く

春道ちやんやお前姉ちやん死んじまつたら誰と遊ぶの 道道ちやん誰とも遊ばないよ姉ちやん死んじやしないよ姉ちやん死んで不可よお春のヨツとお道の顔を見て姉ちやん死んで不可かい姉ちやんも死ぬのいやいやだけれど死ぬかも知らないよ姉ちやん死ん…… 道いやよう姉ちやんいやよう死ぬのいやようと結し口より力入て眼の邊充血ありて泣出さんとすればお春も涙もありて道ちやんお泣でおい今の戯言だよ姉ちやん死んやしないよお泣でおい泣でおい母ちやんまだ歸らおいのね母ちやん何故歸らおいのかねお前母ちやん逢たいだらう逢たいかい逢たいかいと云へどもお道にお春の如く河事も辨へし後母も別れしならねばお龜も置去よさるゝと何方がいやかと聞け祖母も別るゝを悲むあるべしさればお春の思ふ程母も逢たき様も見え

ねばお春の尙更悲しくありて覺えず泣聞を出せばお道も共泣出しぬお龜の聞付て走り來り何事ぞと仔細を聞て此も泣き其様事を云つてお吳でおいよ母ちやんの訖度今夜歸つて來るよと慰さむればお春の世も嬉しげに打笑み其の本統の事かと云ふ今よあつて何の虚言を云ふものぞお藥でも飲で早く能くあつてお吳よと云へばお春のいやゝをして顔を背向ぬ

母の大病ありと聞けども斯迄と知らねば牛久を出立する迄も種々の用ありて二日を過し三日目も出立して我家の門口も來たりし時思ひしより人出入多きよハツと胸を突かれて駆込みぬ

第四十六回

お秋の歸京其儘我家へ駆付し様子何となく胸を突くが如くお春が既に死せし様ある心地あるよ早派せぐり來て駆込さまよお春の問ハ手傳の一人認むるよりソレ奥様のお歸京と叫べばお龜の飛んで來て「オ、お秋か遅かつたねえと云れてお秋の聲も出ず勝手知つたる坐敷へ走り入れば屏風遊み



立て線香の烟立上れるよ言葉の出す死骸の枕邊に轉げ寄り白布を取除け  
 別れし折の誓あがら春の盛の色を見せて實を結ぶべき行末を樂しめし  
 春の色も止めずありしのみか虫喰れし苔の地も委し如く陥落し眼を半開  
 き白くありし唇の間お答へん風情あるよお秋の覺えず懐上て「春坊やお  
 前何して此様よおありだ可哀想よ何して此様よおありだ母ちやんだよ母ち  
 やん歸京て来よ春坊」お春や母ちやんや母ちやんだよモウ何よも云はあ  
 いのかねえと冷きつたる頬よ我頬を押當てし血泣入にお龜を始め居合す人  
 々また泣かせられ皆々鼻汁をすゝる音のみ聞えて一言だよ發するものあし  
 お秋の母の方を見返りお母さんと云しまゝまたむせかへればお龜の傍よ摺  
 寄りお前の實よ悲しいだらうがモウ此様よあつて仕舞たんだから其様よ泣  
 たつて泣きいで回向でもしてお通りまたお前でも煩つて呉ると大變だから  
 と慰むればお秋の尙も春の死骸を懐きし儘「私しや死されるものから此  
 りよ死んで仕舞たい春ちやんお前嘸淋しいだらうねとまた泣くお龜も涙を

落しお前其様事をお云だど何時までだつて歸められやアしさいよモウ斷念  
 てお呉れねね仕方がないぢやアさいかお前が其様事を云て病氣よでもおあ  
 りだどお道が仕様がわりやアしさいよと云バお秋の初めてお道を思出せし  
 様よ「道坊道坊道坊の其様よありアしさいねと云ふ傍よ不思議を顔して立  
 居たるお道を見付け「道坊かへどお春の死骸を漸く以前の如くよ直し置きお  
 道を懐き上てお前の能く達者で居て呉たねえと云つゝ泣く  
 稍ありてお秋の少しく我よ歸り坐よ在る人々を見廻すよ坂上からの彦六だ  
 よ見えざればお母さん坂上の兄さんへ報知て下さつたの 鱈いえまだよ  
 ねえ勘兵衛さんと云へバ勘兵衛進み出てさうですよお秋さんのお歸んあす  
 つてからよ仕様つてまだ知らせねえでありますお秋の勘兵衛と聞て屹度見  
 れバ覺えある富士屋小辰の親父勘兵衛ありや何して此男がまた宅よ来て居  
 る事か此よ仔細もある事あらんが何よしても坂上のお兄い様よお出を願  
 つて万事相談を願ひかければあらぬ平生の何あらうともお春が斯々だど



知らせて遣たら屹度来て下さるゝ違ひさいと早くも心を定めて誰か頼んで  
直又坂上の兄さんよお報知して下さい 龜「お前坂上よ知らせるのかい  
秋「坂上さんの唯一人の伯父様です彼方での何と思つて入らッしやッてもお  
知らせやすのが當然ですと云ふの争ひ難き道理直様坂上へ人を走らせたリ

第四十七回

お春死してお秋の歸京しばかり家内の只涙又濕りて火の消はし如くあるよ  
悪しき心の如何ある時よも働く者と見えて勘兵衛の別間よお龜を招き今坂  
上さんを呼びよ遣つたからモウ直よ来るだらう彼の人が出来た日よやア此方  
の思ふ盡きは行かねえ來ねえ内よ何んどかしあくつちやア仕様が無からう  
せお龜の未だ涙の干かぬ眼を圓くし「それアお前さんの云ふ通り彼の人が出来  
りやア迎も私さんぞの思ふ様よやアあらねえそれだから呼びよ遣らあかつ  
たのだよこうあれアもう仕方がさいと諦めてお仕舞あ 勘「お前「それだ  
から不可ねえ今日坂上さんが來たつて葬式の相談位で後見の事さんさア迎

も氣の付く氣遣の無えだから氣付かねえ内よお秋さんを巧く抱き込んで乃  
公を道坊の後見人よして區役所へ屈けて仕舞やアそれで紛紜さしよ濟んで  
仕舞わア 龜「たつてお前親類の連印が入用と云ふじやア無いか親類と云や  
ア坂上さんが第一の親類さ其印形が無くつちやア治まるまいじやア無いか  
ねお前それを何うおしだ 勘「それア譯ア無え坂上さんばかりが親類じやア  
あるめえお前の方の續き合の親類もあらうじやア無えお其方の印形を取つ  
ちまやア區役所の掛りの禿頭乃公の懇意お翁だから巧く治め込んで仕舞わ  
アあア 龜「成程お前のお云ひの通りよ行きやアあんでも無いねだがねお秋  
が直よ應と云つて呉りやア能いが彼女が中々強情張りだからね 勘「それア  
斯うしねえ何んでも構わ無から坂上さんの事を口から出まかせよ悪く云  
ふのさお秋さんの留守中よ斯様事があつた彼様事があつたと有る事無い事  
お前の口から焚き付けりやア全体が坂上の姉さんよ交情が悪いのじやアね  
えか其所え持込やア忽ち此方のお身方よあるおア知れ切てるよ 龜「成程お



前さんの作者だよそれから大概行くだらうよオヤ坂上さんが来た様だよ  
勘さうか今乃公が出ちやア悪いから少時間忍んで様子を見ると仕様  
坂上の報知又打驚き直様車を走らせて鈴木へ乗り付け家又登らんとするを  
お秋出迎へ坂上の顔を見るより「兄様お春がど云ひ掛けて早や泣き沈めバ坂  
上の何んど云はん言葉も無く案内又連れてお春が枕邊に到りぬお秋のお春  
の顔又掛けし白き巾を取り除き兄様此様よあつて仕舞ましたよ又泣く坂  
上も少時お春の死顔を見詰しが涙をバラ／＼と流し「ア誠又可愛想事  
したので無いかお前の愁傷の察し入る併し此様やらぬ内又報知て呉れたら  
病中又遇う事が出来たらう又實又残念事をした此兒の才之助があれ程  
藏ましたから尙々不便であらぬ鳥渡でも報知せて呉れたら……あゝ残念事  
事をしたお秋の泣き入り「私も臨終又遇ひませんで此様お悲しい事ハ在ま  
せん 阪「それでいお前も留守であつたのか病中側又付添て居あかつたか  
秋「ハイツイ田舎又参つて居りましたから…… 阪「留守の 秋「母が兩兒

第四十八回

の守を致して居りました坂上の斯くと聞くよりお龜の方をツツと見返りし  
が唐紙の彼方又早くも勘兵衛を見留め心中密又點頭き「その定めて残念事  
事であつたらう此れからの別して心を用ぬぬと不可又心添も致さうから  
遠慮なく相談をするが能い 秋「此れからの万事兄様又御願ひ申しますと云  
ふを聞きて勘兵衛お龜の密又顔見合せ心安からぬ面色あり

お春の葬式の昨日既又済せたりきお秋の失神せし如くありてお道を膝又佛  
壇よのみ向ひ居りお龜と勘兵衛とのお春の葬式前事多くしてお秋の心落着  
かざるを奇貨とし後見の一條を仕果せんと思ひし又阪上絶えず來り居りて  
お秋又阪上の側を離れず萬事を相談せるよぞ乗すべきの機無かりし葬式済  
みし後又出直し來るべしと坂上我が家へ歸へりしをお龜勘兵衛ハ得難きの  
好機とあし此間はお秋を説伏せんと思ふ折しも坂上又來りければ二人の顔  
見合せて鼓舌し漸々汕断からじと思ふあるべし



た秋の坂上の前も手を支き「お蔭さまで漸と安心致しました嘸も疲勞様で入らつしやいませうのよ又早速お出下さいまして誠に有難ふ滞在ました坂上の打首背き「イヤ何禮を云はれる程の世話も今での出来んから相談相手も成るのがせめての才之助への寸志ださて種々相談致さんければあらぬ事もありお前の心得迄も申して置かねばならぬ事もあるお前の此後を如何致す積りか 秋「左様で滞在ます何と致しまして是迄でへさ誠に困難ますから私が田舎へ参りました様事ではれから何致さうかと實に當惑致して居ります 坂「お前田舎へ行て居たと云ふが田舎の何んど云ふ所で何よをして行て居たのかナ 秋「ハイあのそれの何ッイ近在で滞在ます 坂「左様かしてそれの生活の扶助の爲めまでいもあるのか 秋「ハイ 坂「眞逆以前の家業をした譯でもあるまいの斯く問はれてお秋の胸を突き刺さるゝが如く又亡夫才之助も傍より我を睨みて叱するが如き心地あるよぞ覺えず兩手を支きて泣出し「イヤ何其様事其様事での滞在ませんハンケチの縁縫の教師も来て呉れ

と申されましたのでそれで田舎へ参て居りましたので滞在ます 坂「ハ、アさうであつたか零落の時よの人が悪い方よ見る物でお前が田舎へ行たと云へば直ぐ何か商賈までも出掛た様も申したがるから私も心配した事が有たがさう聞いて誠に安堵致した女の身ではれ程の家内を抱へ能く之れ迄辛棒して呉れた才之助も代つて私から禮をやす中々普通の女の迎も出来ん事ではれ呉れた才之助も代つて私から禮をやす中々普通の女の迎も出来ん事ではれ能く之れ迄辛棒して呉れた坂上も實に有難く思ひますと心正しき人の涙弱くてホロリと泣くを見お秋の術ささ苦さ穴あらば消えも入り度き心地あり漸やありて坂上の涙を拂ひ「イヤ斯様事をして居つて何時迄泣いても致し方がないお秋どの能く相談を致さんければあらぬがお道と二人から私の宅へ参つて居つても宜し又此家も住んだ所が本家の家賃で遣つて行かれぬ事もあるまい私の宅へ来て居れば家賃の丸で残つて行きそれを驛遞局へ預ける事ですれば丸々どの行かぬとも小遣を差引た所で毎月半額の残つて行くさうされば此後手堅い見世商業をして二人の屹度遣つて行ける 秋「そ



れい誠は有難ふ滞在ですが其本家が何うも借家人が滞在せんので 坂、それい又何ふ云ふ譯で 秋、私の留守中も誰れも借家人が無かつたさうで滞在す坂上の二月程前、爰の前を通り掛り人の住居せるを見たりき然るもお秋の留守中一人の借家人無かりしと云ふの之れ、的切母のお龜と見も知らぬ彼の老爺との間、仔細あらんと漸々見込たれ、心密に點頭、何の兎も角先づお道の後見人を定めずばあるまい 秋、左様で滞在す、面倒さまでも何うかお兄様貴所、多願ひやしますと云へ、坂上も直ぐの答へず何やらん暫し思案の体あり

第四十九回

お道の後見人とあり呉れよとのお秋の依頼を坂上の如何すべきと思案せる處へ、大至急の用事出来たれば直様、歸宅下されたしと宅よりの迎來りけるよ、坂上の大至急ありと聞て捨も置れず此方もお龜と勘兵衛とやらんが心中計り難けれど、も一二時間の中、取返しの出來ざる事もあるまいと思

返し知つての通り、何か至急の用が出来たさうで宅から迎が參つたから鳥渡行つて來る事、致さう其上で万事相談を致さうと早立、掛るお秋の送りながら、其での誠、恐入ますけれど、も、多用が多濟、ありましたら何卒、また入ッしや、しつて下さいませ、様、坂、いや直參るから万事、注意を致すが、能いぞと、其と、お、警め、置て、立歸りぬ

千秋の一時、此時ありと、お龜、勘兵衛、お秋を中、挿みて、龜「お秋、お前、お道の後見の事、誰、頼む、積り、だへ、お秋、何氣、あき、体、よて、そりや、お母、さん、極つてるよ、お春、だつて、お道、だつて、唯一、人の、伯父、さん、で、あり、道の、頼、も、ある方、の、坂上、の、兄、さん、より、外、の、お、い、から、モウ、先、刻、兄、さん、お、頼、み、する、事、も、したよ、お龜、の、呆、れ、し、顔、も、て、「オヤ、坂上、さん、かへ、彼、坂上、さん、かへ、秋、ハア、さう、です、よ、龜「お前、マ、何、だ、ね、怖、お、い、彼、様、人、は、頼、む、の、の、お、止、よ、其、こ、そ、お前、大、變、事、も、ある、よ、秋「そりや、又何、故、です、よ、龜「何、故、だ、つて、お前、と、勘、兵、衛と、顔、見、合、せ、お前、の、田、舎、へ、行、て、た、留、守、だ、か、ら、知、る、ま、い、が、ね、坂上、さん、の、此、家、を



欲がつてるんだよ 秋之兄さんがホ、ホ、お母さんの何を云だか其様  
 事が外の人から知らさいけれを兄さん又限つて彼の兄さん又限つて其様悪  
 い考へがあつて能ものかね戯言を云ちやア困りますよ 龜アヲお前の其だ  
 から其様よお心よしだから實又困るよ勘兵衛さんが能く知つてお出だね富  
 士屋の親爺さん本統又何様よ心配したか知さいよ勘兵衛の此處ぞと膝を進  
 め「お秋さんお前さんの知ねえが實又驚いたよお前の留守中又坂上さんの代  
 理の人てエのが来て此家の故事來歴を喋々たてやがつて坂上でも以前たア  
 違ふ他家の能様よばかりしちやア居られね証文を返したから知らねえと  
 云はれりやア其迄だと以前の恩を知つてるあら彼の本家だけでも返して貰  
 ひてえと云ふのさお前さんの留守だしお母だつて女の事だし仕方がねえか  
 ら私又話をして呉ろつて頼まれて見りやア人の難義を救ひてエのが私の本  
 願だから以前の因縁もあり一番肌を脱ぎアあるめねと其から斯やつて此家  
 へ出入りも仕て居るし其代言の三百野郎を追拂つた譯だよ知らねえ中やア

兎も角も斯知れちまッちやアお前さんだつて眞逆安心してお道坊の後見を  
 彼様人又やア頼まれめえせお秋の聞うちより彼坂上さん又斯様事が何した  
 つてありさうお事がさいサウ云ふ自分達の腹の中が見え透く様ありと心中  
 私又打笑ひ「私の留守中の事だから私知らさいがね其やア坂上さんで仰有  
 る通り坂上さんで此家が是非入用から随分遣も仕様さど態と平氣を顔を示  
 せばお龜勘兵衛の言句も出ず顔見合せて呆れたりお秋の臆度形を正し勘兵  
 衛さん留守中種々世話様で在りましたモウ私も歸つて見れば心配な事も  
 ありませんからお前さんのお宅へも濟さいし今日のお歸宅おすつて下さい  
 まし何れお禮又の私が伺ひます小辰さんでいさいお辰さんよも宜敷云て下  
 さいましよと云出せば二人の共又打驚きて少時言葉もあかりけり

第五十回

お前様のモウ今日からお歸去あさつてと理の當然あるお秋が云條よ流石の  
 勘兵衛も返すべき辭柄あくお龜の顔を見て何と云いぬかど眼で指圖する



の外をさきお龜のツ、と進寄り「お秋お前其の何を云のたへ勘兵衛さんの他家の人だとそりや云ねへでも知れ切てるよ人様又散々腹世話を焼けて置いてモウ用いさい左様あらと能もお前の云られるね實又呆れツちまふよ爲よある様よと此前の事迄も氣をつけて下さるのよ其を有難いと思ねえで能も其様事が云られるね其ばかりぢやアあいよお前の田舎又行てるし金を送らすさ病人を抱えて私一人で困切てる時何程世話よあつたかお前知りやア仕舞がねと捲立んとするを秋の軽く受け「マアお母さん静かよかしよ私や勘兵衛さんよお世話よあらいどの云のさいんだよお前さんが世話よあつたとお云だから世話よあかりの事だと思つてるのよ其だから何れ改めてお禮又行と云つてるぢやアあいかね 龜そんなから今の様事を云ねえが能い其よ何だよアまだ勘兵衛さんよねに確か五圓ばかり借よあつてるのよ其もお前返済ねえぢやアあらねえよお秋のツツと母の顔を見詰たりしがそれでの何ですか勘兵衛さんよ五圓お借よしてあるんですねよ浮座んす其の

私がお返しやす事よしませうよだがねお母さん私の田舎から随分送金た積りだよお春のお藥代やお醫者様のお禮をしてる其でもまだ残るだけ送つてありますよ 龜戲言をお云でさい幾許送金や其様事を云んだらう廿と卅と纏つて送つた事がありやアしめえし 秋廿と卅ホ、ホ、柳橋の日本よ一ヶ所しかあひよ東京と牛久と一所よのあらあひよお母さん大概よおしあさい纏つた金を送りあひから其日の暮が出来あひと云ふ理屈のあいでせう帳面がありませうから見せて下さい 龜帳面火打箱の様お家又帳面も渡まじい其様物のあひよ 秋さうでせう帳面のありませうまい帳面のあくつても送つた金額の明瞭てるよ私の方よの爲替を組だ郵便局の領収書があるからと云ひれて流石のお龜もウンと詰るお秋の重ねて「濟た事の済た事で洗ひ立をしたつて仕様があひから其の其として置かねお母さんだつて私のお母さんと云だけで鈴木と云ふ家から云ふとお前さんが此様よしてお出の云の厄介同様ですよ怒るから怒りあさい其よ違ひあひんです此から家の事よ付



て口をお出しでさいお道から見ると阪上の伯父さんと一處よのされませんよと思ふ様云籠たりお龜の烈火の如く怒れども詮方なく齒齧を噛たるばかりあり

此處へ阪上來りてお秋と相談おし外の事は兎も角もお道の後見を定め置くこそ專一されど阪上を後見人として外親親連印の上其日直ち區役所へ届けたり之を見るお龜勘兵衛切齒すれども其甲斐なく勘兵衛の其日の夕方をめくくと柳橋へ歸りける

第五十一回

鈴木家の後見人の愈よ阪上と定り富士屋の勘兵衛も柳橋へ歸行き跡の親子三人母のお龜が心のみぞ有まじく悲しき事と思へど此の一人にて何をかおし得べきとお秋の稍安堵の思あり

静かあらんとすれば又動き動いて定らざるの時却つて静あるを得るの人情の免かれざる所なるべしお秋の稍安心まつけて既往將來の事の胸を刺すが

如く朝も夕も唯其のみぞ思ひ續けゝる昔を思へば悲しき事ばかり末を思ふも亦涙のみあり行末の見込ある人あらざると心も契ひて男嫌にて遣通し初めて鈴木才之助を其人と思染めしも母の怨深き胸の曇の晴しと云ふ事も亦く良人死別し後の別て活計さへ自由ならず牛久へ行んと決心めし時の苦しき又人追られ母の文も迫られ既真操を破らんとせし時の心の今更思出しても實も毛髮が棟立よしや一時の事にして如何して彼様心が起つたか我ながら愛想が盡て人の知らぬを心の我を賣てお今も旦那が其處にお出さつてお叱なされる様お心持がする濟ないく實も濟ない其上鈴木の家を頼む子供を頼むと其ばかりを遺言の様おしてお死なかつたの家も持つてられず大事のくお春の被様もあつて仕舞し何と申譯が出来様其上此からしても何あらうか貯蓄はあし目的はあし商賈をするよ云ふ目的もあし牛久を出立時買つたお金とても葬式や何かでモウ幾許もあし此があくされば其からの何として其日を送らふ思へば思ふ程實も如何して能



か分別も何もつかまゝある頼みの矢張家賃ばかりし其も借手があければ其の持腐れ同様何とかして借手をこしらへてせめて其日の續きだけでもせねばからぬ家だけが公道と私の命の綱此ばかりの土を食つても放しはせぬ公道の財産此家ばかり此家ばかりの放さぬ其もお母さんと憎いの彼勘兵衛爺私を女と女や子供と侮つて後見になりたいた云ふ腹の中の見透て居る其様事又欺されて命の綱を放して能ものかお母さんも矢張昔の氣が失ふからいゝで實に困る孫子の行末を考へたら勘兵衛など捲込れると云ふ事があゝ頼みもあるまいの人情だ現在の母親が彼通りとい實に情ない事だ阪上さんとお継りやして公道の事又就ての万事の渉相談を願はなければならぬ家を阪上さんが奪たいとお母さんの話だが此の虚言は極つてる真逆其様考へが兄さんあう筈ばあ兄さんあう屹度あければ姉さんあう姉さん次第で兄さんの氣が狂はずとも云へず何よしても苦勞でくからぬ何したらばと思案は沈める所へ公道よろしくと出来ればかう道坊かど懐めて

庭近き窓又出て道坊や姉ちゃんの様は煩はさい様よししてね成人あつて立派にあつてお呉れ能かいと懐しめつゝ云へば公道の唯母の顔を見詰居る次の一間よりお龜の咳癖の聲聞ゆ

第五十二回

人間の苦しき事朝夕の不自由より節あきあかるべし夜の中又風呂敷携へて米屋の門より人目を忍びて客の身又遠慮して戸を敲き浮面倒ながら此だけ量つて下されと白銅貨一枚又銅貨二三枚風呂敷又包みし儘出して歸途も蔽膝又忍ばせ明日の朝の漸と此で安心され明日の夜とあらば早や今宵程の目的ありしと昨日の過去しを喜び明日の來るを氣遣ふ境界とあらば如何口惜しくも節あかるべき其も一身あらば一食二食の水を飲ても過さるべけれど子供ある女の身の他又扶助あく正午の飯を十一時より責まれあば親の身の如何ばかり悲しがるべき大半膳も充て米を炊く音さへ知らざる人想見よ毛髮悚立て涙自然と襟を濡すあるべし